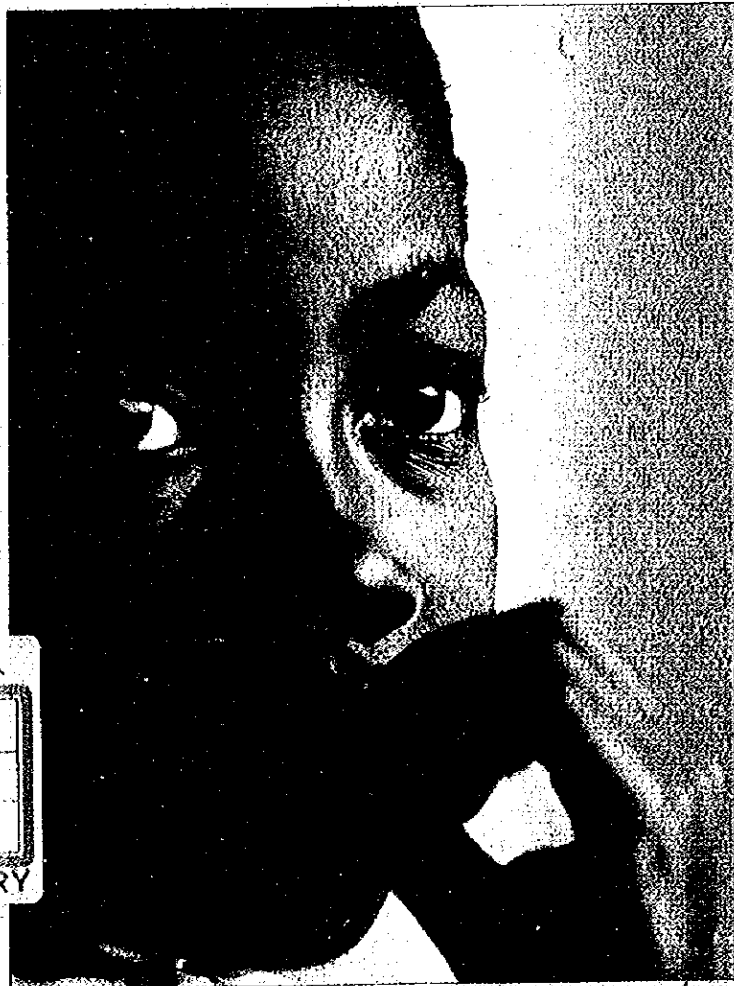


国際協力を読む

国際協力を読む



東京
0036
K
BRARY

東京大学

国際協力事業団

23783



国際協力を
読む

JICA LIBRARY



1111933161

JICA

JICA LIBRARY

目次



はじめに	1
------	---

開発問題を考える

開発援助と貧困	6
理念の変遷をたどる	16

人口問題と教育(座談会)

人口から人口問題へ	28
いま、途上国の学校で	44

地球環境を考える

森林は地球にとってどういう意味を持つか	62
漸死の熱帯林は何を語るか	72
熱帯林に生きる動物たち	100

生活環境と子供たち

- ストリート・チルドレンの実像……………114
子どもたちのために懸命に生きる……………124
-

食物と住居

- 途上国の主食……………142
民族の個性を反映した家……………152
-

地域研究

- イスラームと開発……………164
「アフリカの年」からの30年……………176
ラテンアメリカの不安……………186
-

日本が援助を受けた時代

- 援助が日本を生き返らせた……………198

はじめに

『国際協力』誌は、JICA（国際協力事業団）の広報誌として1974年に創刊され、以後、開発途上国の実態と、国際協力の意義を伝えてきており、今年の10月号で通巻450号となります。

今回、「国際協力を読む」として、読者に好評であった記事を厳選し、読みやすい新書判として発刊することになりました。本書が、国際協力への理解の一助となれば幸いです。

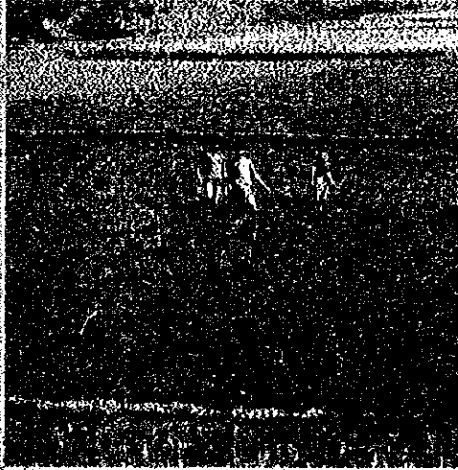
1992年4月

「国際協力」誌編集室



開発援助と貧困

克服への道を見出すために



●大東文化大学教授 近藤正臣

●近代文明の誤算

戦後40年以上におたうて実施されてきた開発援助が、それほど貧困撲滅と発展に寄与してきたと言えそうにないのはどうしてか。国や地域によって事情は異なるからいちがいに言えないけれども、今日大量貧困が問題にならでいるところについて言えば、それは「そのような社会がどのような仕組みになっているか、開発というプロセスがどういう形をとって進むのが本当には分からないままに援助（だけでなく、その他の開発努力）を行っていたからだ、と言えると私は思っている。いや、分かったつもりでいたのだが、その理解はどうも間違っていた、と言すべきであろう。

あるいは、物質的な豊かさという最終目標は設定されたのだが、それは「近代」という文明——それまでにあったその他の文明とは比較にならないような強力な文明——の行き着いたところであったのに、それに至る過程を十分に理解せずに、その結果だけを手に入れようとしたためだ、と言ってもよい。そして、結果だけを手に入れようとする、それがどんなに困難なことかは、科学技術についてだけでも、明治の日本人がさんざん苦勞を重ねたことであるし、社会の仕組みを取り入れることまで考えれば、できあがった制度だけを導入してもだめだということを知るために軍国主義の時代まで経験しなくてはならなかったのではないか。いや、この問題は今でも一大

課題として残っているとも言える。日本のODAについて、絶対額は世界一になったからいいとされ、残る批判点として(1)対GNP比が低いこと、(2)グラント・エレメントが小さいことの2点に集中しているのは、貧困をなくそうという意味から考えるとまったく的外れだと思う。再職やむだに使われる分は論外だとしても、また国の行い援助がまったくの博愛主義に基づくことはありえないにしても、問題はやはり額や条件ではなくて、その使われ方である。

●GNPの幻想

では、誤解していた開発の過程とはいったい何だったか——。開発途上国が苦しい植民地闘争を経て政治的に独立を達成したあと、さて今度は経済的にも独立を遂げて、豊かな生活を築こうとしたときに、必要なのは工業化だ、そのためには投資が必要だ、足りなければその不足分を海外から援助しよう、あるいは民間の資本を導入しよう、必要な技術はもうとも進んだものを取り入れて、近代工場を作り、それがうまく稼働するようなインフラストラクチャーを整備すればよい、そこで働けるように教育すればよい、そうすればGNPは伸びて、国民は豊かになる——このように考えられ、開発努力、援助思想の主流は、長い間、このような考え方に基づいていた。

GNPが伸びても貧困は減らないことは比較的早くから指摘されていたが、実際の政策では今でも上

地改革の必要性は説かれても、それが実施されないままに緑の革命が実行に移された。これは、農村のあり方はそのままにしておいて、そこに近代技術を投入するという意味をもっていた。もちろん、プランテーション農業は、たとえそこで作るゴムやバナナが世界市場で高値をよんだとしても、その恩恵はプランテーション労働者には行き渡らないような仕組みになっている。

その後、貧困撲滅をはっきりと目標にすえたいわゆる基本的ニーズ充足の戦略も唱えられたが、開発途上国の政府はかえってこれを批判するようになり、スローガンとしては社会的公正は掲げられているところもあるが、実体は必ずしもそのようには進んでいない。

● 伝統社会の豊かさど制約

これら開発途上国には古くからの生活様式があり、そこにはそれなりの秩序があって、ある意味では豊かな、人間的な生活があったと言われる。しかしこのような秩序は同時に、その共同体の規制を犯せばとても生きていけないような、人間を縛る側面をも持っていた。しかも数世紀にわたる植民地支配を経過しているうちに、その仕組みはかなりの変貌を undergone けてしまっていて、それなりにひとつの社会生活の単位を作っていた村、園などは崩壊したり、人間をもろとがなじがらめに縛るような体制になってしまったところが多い。宗主国と結びついた大地主ができた

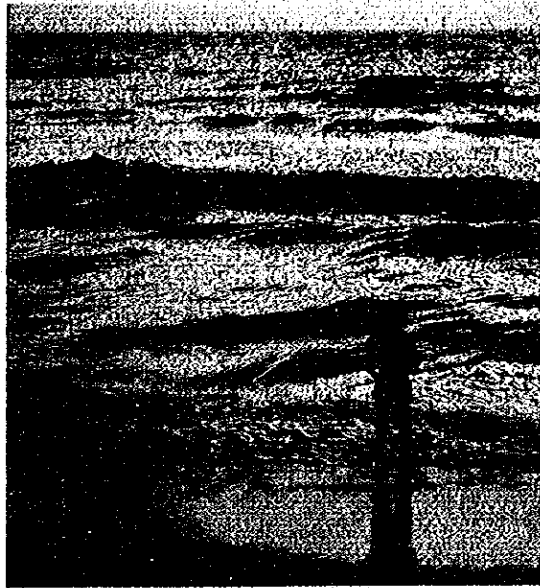
り、村の庄屋のような存在も、税金を過酷に取り立てる役を負ってしまうことになっていた。そうしたところに上に述べたような政策が採られたのである。

こうした政策は、西洋において西洋の社会を分析するために発達した近代経済学がほぼそのままに第三世界にあてはまるものと考えて、その枠組みで構想されたものであった。しかし、その近代経済学が前提とした歴史の見方は、基本的にはどの社会もすべて伝統社会から離陸を経て高度大衆消費社会にいたるというものであった。伝統社会が高度に発達した近代文明と接するとスムーズに離陸して高度成長が可能になるところか、そうした発展の道をふさいでしまう、壊してしまうことがあるということに思いをいたさなかった。

●多様な人間のタイプ

それぞれの戦略はそれなりの問題点をかかえていたのであろうが、基本的には、もともと西洋に人類史上はじめて近代が登場しかけていた時に、その経済・社会を分析しようとして発達したのが近代経済学であったが、その経済学が通用するためには、前提として充たされなくてはならない条件がいくつかあったのに、開発途上国ではそれが充たされていなかった、しかもそれを軽視して性急に適用しようとしたからではないかと、私は思っている。

近代経済学（ここではいちおう、新古典派とケインズ学派を折衷したものを考えておこう）では、分



インド洋を眺める（スリランカ）

スリランカは、インド洋に面した島国である。この写真は、スリランカの海岸を撮影したものである。前景には、暗い木製の柱が立っており、その背後には穏やかな波が打ち寄っている。空は曇り、全体的に静寂と孤独の雰囲気が漂っている。

析の対象となる社会には、ある特定の型の行動をとる人間がその中心を占めているということが前提になっていた。それは、生産・流通・消費活動など、経済に関係のある行為をする場合に、地縁・血縁などの配慮はしばられることなく、比較的自由に自分の行動を決められるようなタイプの人間である。そもそもこのような行動ができなければ市場メカニズムは機能しない。もちろん、社会もそれを許さなくてはならないから、地縁・血縁などのきずなにそれほど頼らずとも生活ができるような社会の仕組みになっていなくてはならない。ところが開発途上国では、そのような人間のタイプが中心ではなかつたし、社会の構造もそれを許すようにはなっていなかった。これは直ちに、そのような人間のタイプが優れているとか、これを許すような社会がより良い社会だと言っているわけではない。ただ、「アダム・スミス以来の理論経済学——いわゆる近代経済学——は、そのような人間が社会の中心部を占めるようになっていくことを前提としていたということである。経済学の発達もあって、いろんな前提をこなすことができるようになってはいるが、それでも、経済の要因だけを考えればまずまずその社会の人間の行動が把握できると考えるという点では、大きくは変わっていないのではないか。それ以外の行動をとるような人間が大勢いるということ自体が、そもそも想像を絶することだったのであるまいか。

●自立の原理とは

「それではどうしたら良いのか。」これは私のように外にいる者には答えの出せる問題ではない。かつての共同体は壊されてしまったとは言え、それでもなんらかの貧困脱出の試みは内から出てくるものの他にはありえまい。これまで言っているのは、外から答えを持っていっても無意味だということでもある。このことをはっきりさせた上で、それでも外にいる者に何が言えるかと問われれば、それは、外国支配の中から自立の核を徐々に作り上げることによって成功した原形が参考になるということではないかと、私は思っている。

イギリスが歴史上最初に特殊近代という文明を作ってしまったときには、まさに周辺国の地位にいたところから、外国支配をはねのけて、はじめて自生的な(あるいは内発的な)発展をとげたのであった。それを見極めるといふ学問的作業は、じつは日本で比較経済史などを通して世界にも誇れる成果をあげている。そうした研究を促すような事情が近代の日本にあったということである。

それでは、そこに析出された自立の原形とはなにか。簡単にいえば、13、14世紀ごろからイングランドでは、なんと半農半工の小生産者たちが、農村において、数カ村を単位とする市場を足場にして、禁欲の倫理によって伝統主義(伝統そのものではない)を克服することにより、伝統のもつ悪い側面を崩し

つつ、自分たちの力をつけていったものであることがわかっている。これが、単なる金儲け主義を旨とする、どこにもいつでもあった資本主義ではない、近代に特有の資本主義をつくり、外国支配や外国と結びついた国内勢力を排除して、国民的な経済を打ち立てたのである。

たしかに、これが周辺に巨大な影響を及ぼしはじめた時には、その周辺の経済の構造を壊したり、貧困をもたらしたりした。しかし、あえて言えばそれにもかかわらず、自立を求める原理はこれしかない、少なくともこれは試みに値すると思う。このようなイメージを活かすことが、貧困克服のための、速くて近い道なのではあるまいか。そのためにODAをどう活かせるかを考えなくてはなるまい。

(1990年4月号)

理念の変遷をたどる

開発の変容と未来



●神戸大学教授 初瀬龍平

開発と工業化

太古以来、人間は生きていくため、子孫を守っていくため、自然に働きかけ、自然を造り変えてきた。文明はそのままの自然のうえには成立しない。それは、造り変えた自然のうえにのみ成立する。この自然への働きかけ、自然の改造のプロセスと経済的成果を開発と呼ぶことにしよう。

ここで問題が生じる。この開発によって、地域の経済が全体的に向上したかどうか、またそうだととして、地域の人々が、等しく開発の成果を利用できたかどうか。これがひとつの問題である。もうひとつの問題は、自然の改造が自然そのものを破壊してしまわないか、ということである。度を越した改造は、自然の破壊となる。

文明と自然

近現代の世界を支配しているのは、西欧の資本主義文明である。そこでの開発の方法は、機械化であり、工業化であった。近代科学と機械化によって、自然を造り変える人間の力は、飛躍的に増大した。工業化によって、自然の一部を切取って加工した物を製品として大量に生産できるようになった。ここに、人間は科学技術によって自然を制御、支配できると思いこみ、自然に対し自らが神であるかのように振舞いはじめた。

工業製品は資本主義経済を通じて、商品として国内に売られ、世界に売られて使われている。人びとの生活は快適となり、安定し、豊かになってきている。人びとは、便利で美しい商品に魅せられ、「消費者は神様です」とおだてられ、現在の物質文明が人類最高の文明と思いこむようになった。

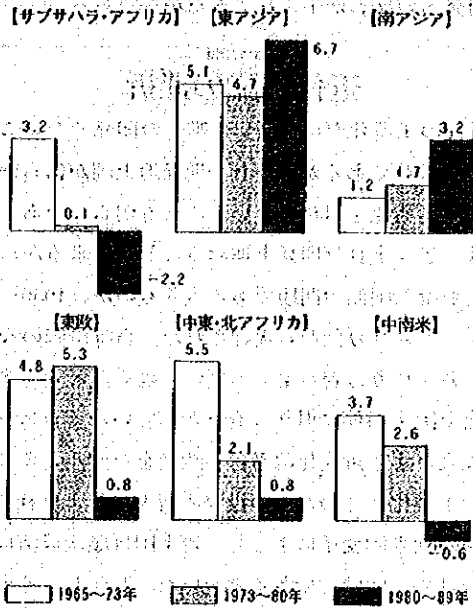
世界的囲いこみ

近代世界では、世界全体が西欧文明というひとつの文明圏に囲いこまれた。工業化と近代化と西欧化が、いまでは世界中の合言葉となっている。そのうえ、世界各国の開発は世界システムのなかで同時進行しており、もはや一国単位で自国の開発を取り仕切れなくなっている。

自然への働きかけは、工業化の成果を生んだが、その反面では、自然環境の大規模な破壊を進め、それは地球全体に及ぶようになった。しかし、人間は自前の利益にとらわれる性癖があり、自分たちの小さな便利が無数にひとつひとつ集まっていくと、その結果として人類や地球そのものが脅かされることに鈍感である。世界全体として、このような状況に素速く対応していけない。その例は、オゾン層破壊、地球温暖化、海洋汚染、熱帯雨林消滅、酸性雨への対応に見られる通りである。

開発がアジア、アフリカ、ラテンアメリカで国家的目標として登場するのは、ヨーロッパの旧植民地

一人当り国民所得成長率の推移 (%)



出典：「世界開発報告1990」世界銀行

が独立したあと、1950年代からのことである。それ以前は、植民地の経済的停滞は当然のこととされ、放置されたままであった。60年代から第一次「国連開発の十年」が始まった。これは途上国の開発が世界的課題として認知されたことを示している。開発論の内容は、60年代から時代とともに変化してきている。それは、ひとつには欧米型の開発が世界各地で成功しなかったからであり、もうひとつは

は、先進国の過剰開発によって世界中で工業化中心の開発への反省が生まれてきたからである。

近代化論の挫折

近代の工業化だけが歴史上唯一の開発でないことは、明らかであるが、今日の開発途上国が何らかの意味で工業化を目指していることも明らかである。では、どうすれば開発を進めることが出来るか。

本来途上国側の問題であるべきものが、1950~60年代にアメリカ側から提起された。当時冷戦のなかで、アメリカは資本主義の優位を説くことで、多くの途上国を西側に引きこもうとしていた。ロストウを代表とする近代化論者は、欧米をモデルとする経済の工業化、そのための投資の増大、および社会と人間の欧米的変革によって、途上国は順次経済成長にむけて「離陸」できると説いた。しかし、その予言はその後の歴史によって裏切られた。60年代、アメリカは南ベトナムで腐敗した政権を支持することになった。途上国一般は経済的停滞、政治的抑圧、社会的不正の方向に進んでいた。

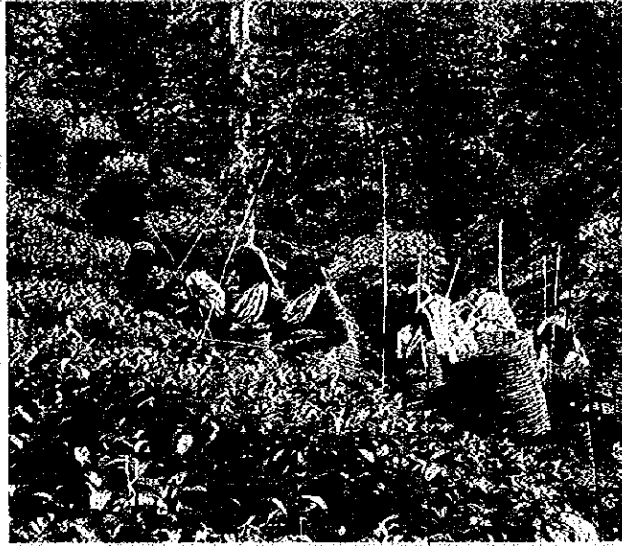
途上国の開発を阻止しているのは、従属論者ブレピッシュやフランクが説くように、世界の中心国側であって、貿易などで周辺国が中心国に結び付けられているかぎり、周辺・途上国の発展は不可能と思えた。近代化論によれば、途上国の遅れは資本の不足で説明されていたのに、現実には多くの資本が途

上国から流出していた。中心・先進国は、表向きの言葉とは裏腹に、周辺・途上国の開発に協力的ではなかった。

幻滅の社会主義

冷戦下で、資本主義的近代化に対抗していたのは、社会主義的發展論であった。これはソ連型の重工業化戦略から毛沢東の自力更生論までの幅があった。しかし、ソ連の重工業化は国民の日常生活を犠牲にして、進められていた。キューバと北朝鮮では、経済開発は初期に成功したものの、その後、失速状況にある。中国の自力更生路線は、70年代にはモデルとしての魅力を失っていた。自力更生は革命後に短期的政策として有効であったが、長期的にみれば、国際競争力を失い、国民経済の停滞を呼ぶことが、次第に明白となった。乗用車でいうと、中国の「上海」や田東歌の「トラバント」では世界に売れない。従属論は、近代化論を批判するには強力であったが、その議論からの答えは、世界システムから離脱せよ、そのために社会主義革命をせよ、というものであり、解決策は一種の鎖国論であった。社会主義での鎖国は、70年代後半にカンボジアで虐殺の悲劇となった。従属論の正統派から、開発への理論は生まれなかった。

このような理論的閉塞状況を打ち破ったのは、70年代から80年代にかけてのアジアNIES（韓国、台



茶の採集が盛んな茶園の様子、スリランカの茶園

このように、戦前戦中にかけては、日本がアジアの諸国（タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、バングラデシュ、パキスタン、インド、スリランカ、中国）に多大な影響を及ぼした。この影響は、第二次世界大戦後のアジア諸国（台湾、香港、シンガポール）の従属的发展であった。外国から資本と技術を導入し、国内の安い労働賃金で加工して製品を輸出して発展を遂げる輸出志向型工業化は、途上国側から積極的に国際経済を利用していくものであり、自律的国民経済と政治的抑圧の強引なバランスのうえに成立するものであった。それは特定の開発理論に基づくものではなかったが、経済開発へのひとつの解答であった。

ここでの開発は、目標を経済成長におき、人権の保障や社会的公正の実現を犠牲にして進められた。このような開発で、経済成長は続いていくのである。

うが。80年代後半には、韓国と台湾で民主化運動が成果を挙げた。答えは出ているようである。経済成長を持続していくには、政治的・社会的民主化が必要である。理念は、開発から発展へとひろげねばならない。しかし、はじめから発展を目標にできるかという問題には、依然として解答はない。

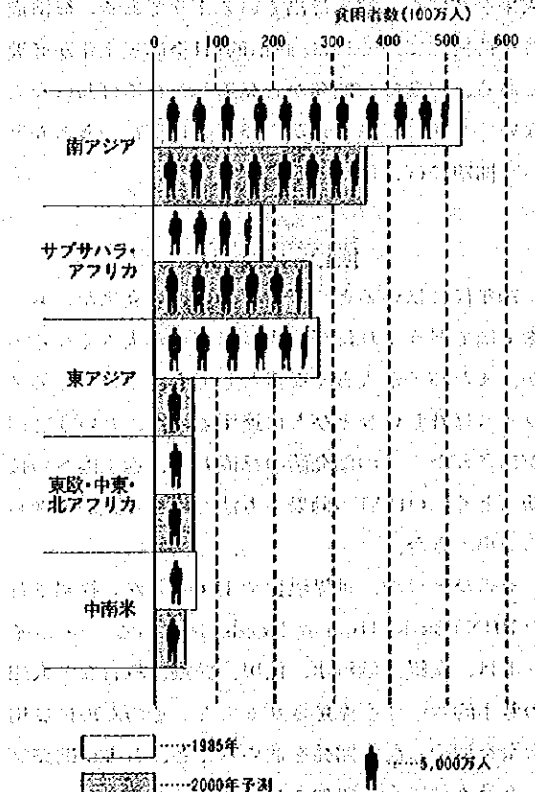
開発と公正

70年代にはいと、近代化論に近い立場からも、途上国でどうすれば経済成長のパイが大きくなるのか、またパイが大きくなるとしても、そのパイのスライスが貧しいひとびとに達するのか、という疑問が出された。この開発論の見直しは、途上国への援助（とくにODA）の効果と方法をめぐる議論とからんで出てきた。

そのひとつが、世界銀行やILOなどから提唱されたBHN (Basic Human Needs) 論である。そのポイントは、食糧、飲料水、住居、医療、教育など人間の基本的ニーズを充足させること、そのために雇用機会を増やし農村開発を進めること、および開発プログラムに民衆を参加させることである。

BHN論にも、基本的ニーズを量的にとらえる世銀の立場と、基本的ニーズを質的に考え、社会環境を重視するILOの立場とがある。後者からは、労働集約的技術、土地改革、あるいは労働機会としての公共投資を重視する政策論がでてくる。この意味で

第三世界の貧困者数



出典：「世界開発報告1990」世界銀行

のBIN論に基づく経済政策では、長期にわたって分散的に多くのコストがかかるであろう。ODA政策とすれば、供与国には見返りが少ないであろう。しかし、その重要性は明らかである。

環境との調和

もうひとつの見直し論は、環境と開発の調和を重視する発展論の立場である。それは、70年代に説かれ始め、現在でも有力な議論である。具体的には、先進国の経済成長が地球の有限な資源を使い尽くしてしまうのではないかという懸念(ローマ・クラブ「成長に限界を」論)や、これまでの経済成長優先型に代わる「もうひとつの発展論」の提言(ハマーシールド財団)である。

もうひとつの発展論は、BINの充足、地域の内発性、自立性、環境との調和、民衆の参加行動を説くものであった。日本で鶴見和子・上智大学教授の「内発的発展論」が出されたのは、これとはほぼ同じ時期であった。両者の論旨はほぼ共通しているが、差があるとすれば、内発的発展論がアジアの精神的覚醒と知的創造性を強調していることであろう。

同様の立場に立つ議論として、80年代末から「持続可能な発展」論が有力となっている。それは、経済成長が環境との調和のうえに成立し、かつBINを充足しなければならないという議論である。

発展論の問題点

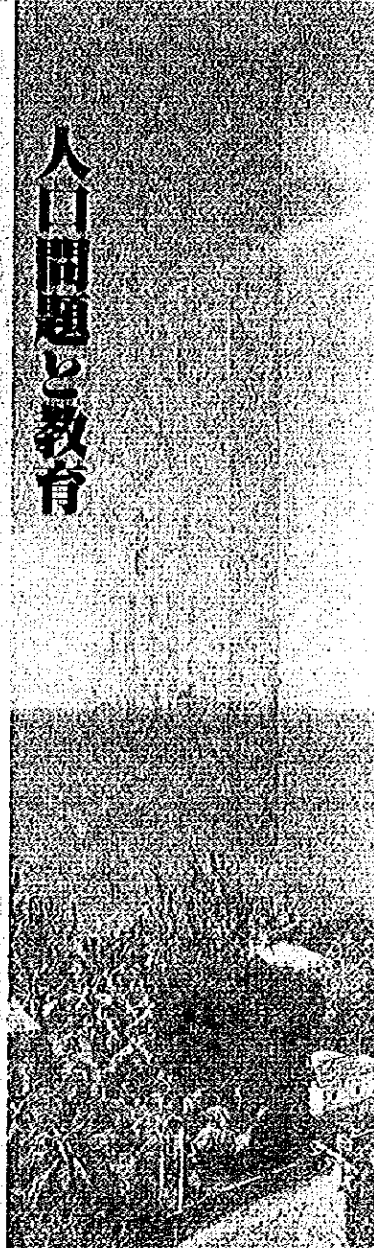
この30年間に開発をめぐる議論は、近代化論から持続可能な発展論へと、世界的に展開してきた。経済成長したのは、従属的發展のアジアNIESであった。社会主義は近代化論に代わる答えとならなかった。

理念が開発から発展にふくらんだことは、素晴らしいが、その反面で議論が経済学を越えて社会学に拡散し、焦点が散漫になるおそれがある。発展論でも、ハードな経済学の議論が重要である。人間や地域を重視するミクロの発展論を、国民経済の成長を目指すマクロの開発論とどのように結びつけていくか。これからの課題である。

人間の自由意志、地域の自律性を重視する発展論は、西欧近代のもつ人権、科学というような普遍的価値を無視し、歴史を逆行する思想になるおそれがないとはいえない。古い共同体社会は、人間の自由を縛り、科学を否定する権威主義の世界であった。しかし、歴史は、前にしか進めないのである。

(1991年4月分)

人口問題と教育



人口から人口問題へ

貧困との循環



尾崎美千雄

(毎日新聞人口問題調査会事務局長)

河野稠果

(厚生省人口問題研究所所長)

村松稔

(元埼玉県立衛生短期大学学長)

早瀬保子

(アジア経済研究所統計調査部研究主任)

昭和34.11.1990年時点

21世紀への課題

尾崎 人類が21世紀に向けて取り組むべき大きな課題として、軍縮と人口の2つの問題があると思います。軍縮の方は御存知のように米ソ間の緊張緩和で第一歩を踏み出したといえます。一方の人口問題はどうかと言うと、残念ながら将来になかなか明るい希望が持てないでいる。依然としてわれわれ自身がなんとかしていかなければならない大きな課題であることに変わりはないわけです。

そこです、人口問題の今日的な意味といったところから話を進めていきたいのですが――。

河野 一概に人口問題と言いましても、先進国と開発途上国の間には大きな差があります。

現在の世界地球人口は52億9,200万人、1950年の時点では25億人だったのですから、40年間で約2倍となっており、大変なスピードでの増加です。(以下、表参照)

もう少し細かく見ていきましょうか。人口の構成比は途上国が77%を占めている。増加率では、先進国は0.5%増でゼロに近づきつつあり、マイナス成長へ転じようかという状況ですが、途上国は2.1%。最も衝撃的なのは、1980年から90年の世界人口の増加のシェアを見ると、92%が途上国での増加であるということ。

合計特殊出生率を見ていくと、先進国は1.9。この

(世界および主要地域の主な人口指標(1990年))

人口指標	
人口増加	総人口(百万)
	世界人口に占める割合(%)
	1985-90年平均増加率(%)
	1980-90年世界人口増加のシェア(%)
人口動態 (1985-90年の平均)	普通出生率(年間千人当たり)
	合計特殊出生率 ^(a)
	普通死亡率(年間千人当たり)
	平均寿命(男女合計)(歳)
人口構成 (%)	出生後20歳になるまでの生存数(%)
	15歳未満
	15-64歳
	65歳以上
人口密度(1km ² 当たり)	

数値は2.1ないと人口の再生産はできないのですから、このままでいくと先進国では人口が減ってくる。途上国では、3.9、ほぼ4人ですね。

寿命も違います。それと、20歳までの生存数。途上国では20歳になるまでに100人のうち12~13人が死んでいく。アフリカでは100人のうち23人が20歳になれないのです。人を育てることを将来への投資と考えると、これは大変な損失です。

年齢構成では、15~64歳の生産年齢のシェアが大事なのですが、途上国ではこの年齢層が少ない。当然、扶養人口がそれだけ多くなってしまう。人口密度にしても、途上国は2倍以上の数値です。どの角度から見ても途上国は不利な情勢にあり、貧困と結びついているのです。

(資料・国連人口部、1988年人口推計 河野氏作表)

世 界	先進地域	途上地域
5,292	1,205	4,087
100.0	22.8	77.2
1.73	0.53	2.10
100.0	8.2	91.8
27.1人	14.6	39.9
3.44人	1.90	3.92
9.9人	9.8	9.9
61.5	73.4	59.7
89	98	87
32.4	21.4	35.6
61.4	66.5	60.0
6.2	12.1	4.4
39人	21	52

*合計特殊出生率=女性が妊娠可能年齢の間に普通出生率にしたがって子供を生むとした場合に生むことになる子供の数

地球は満員？

村松 1960年代から70年代の前半まで「人口爆発」という言葉がジャーナリズムを中心にずいぶんひんぱんに使われました。「このままいくと地球は満員になる」といった議論がなされ、地球から人間がさぼれている「マンガ」を一度はご覧になったことがあると思います。

しかし、ちょうどその頃に世界の人口の伸びは加速から減速に転換しています。それに応じて、人口の総量の問題は影が薄くなり、問題の焦点は南北の格差へと移ってきています。

早瀬 60年代の世界の人口増加率は2%を超えていましたが、最近は1.7%に低下しています。しかし、絶対数としては毎年、地球上では9,000万人の人口が増えており、そのうちの90%以上が途上国においてです。世界の人口問題というのは、イコール開発途上国の人口問題であると言ってもいいかもしれませんが、あと、途上国の中でも人口増加に関しては格差が出てきているということも指摘しておいた方がいいでしょう。

村松 人口問題の最大の焦点は、人口の数字そのものではなく、それが何かと結びつき、“人口”から“人口問題”へ転換していく所にあります。食糧や環境、資源、エネルギー、もっと幅広く考えれば産業、教育、交通、都市化などとも関連してそれぞれの問題へと発展していくのです。

開発は最大のビル？

尾崎 世界の人口政策に対する考え方や家族計画の歴史といったあたりを少しふり返っていただきましょうか。

河野 1974年のルーマニア・ブカレストの国連人口会議では、「開発は最大のビルだ」という考え方が主流でした。所得が伸び、工業化や都市化が進めば出生率は下がってくるという。しかし、84年のメキシコシティでの会議では、「開発がそれほど進んでいなくとも政府が熱意をもって家族計画に取り組

めば、出生率は結構下がるんだ」という所まで考え方は移ってきました。所得が上がるまで途上国は待っておられないという切迫性・緊急性が感じられるわけです。

尾崎 昨年のオランダ・アムステルダムでの人口フォーラムでも、アジアの諸国はもちろんですが、ラテンアメリカの諸国の家族計画を積極的にやっていかなくてはというムードになっていました。人口問題をほったらかしにしたままでは、開発は進まないというコンセンサスが形成されつつあるようです。

村松 具体的な家族計画の歴史ですが、アジアの国々の取り組みが早く、1951年にインドのネル首相が始めたのが最初でした。52年には、日本でも厚生省が「受胎調節普及運動」を開始しています。インドに続いて、アジアの国々が家族計画を導入し、最近にならってラテンアメリカやアフリカの国々が参加してきています。

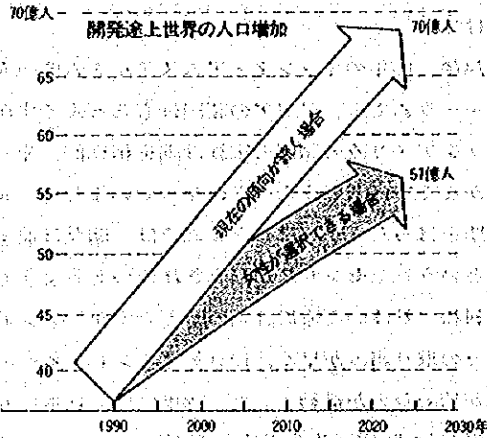
アジアには家族計画を受け入れやすい「風土」があったような気がしますし、ラテンアメリカやアフリカで参加が遅れたのは宗教や死亡率の高さの影響が大きかったらと思うれます。

■「保険」

尾崎 人口と貧困とがどのように結びついているのかを考えてみたいのですが、貧困が人口増をもたらすのか、人口増が貧困をもたらすのかというどちら

【女性が選択できる？】

下のグラフは、「開発途上国の人口増加」の予測である。両者の差は35年間で13億人になる。 ※ユニセフ「世界子供白書(1999)」から



らが原因でどちらが結果なのかという議論より、両者間の「悪循環」ととらえておけば十分と思います。

なぜ途上国で子供がたくさん産まれるのか、その理由はいろいろあるでしょう。

第1に、途上国の家族にとって子供は不可欠の労働力であるということ。第2に社会保障制度が手薄な国々で子供は親が自分の老後を託す唯一の存在であるということ。第3に、医療水準が劣悪な状態のなかでは子供が産まれても無事に成長するのがどうかかわからないため、「保険」をかけるようなつもりで子供を沢山持つということ。そして最後に、女性の人権が認められていないという点などがあると思

ますが。

村松 多産と貧困と疾病が悪循環になっていることに間違いはありません。(図1) この循環のどこにメスを入れて循環を立ち切るのか、という議論が盛り上がったことがありました。「多産というのは貧困の結果なのだから貧困をおさえるべきだ」という考え方、「貧困は多産の結果として生まれてくるのだから、多産にメスを入れるべきだ」という説。

しかし、現実には貧困や飢餓が進み、医療状況も改善されていない。「論争をしている場合ではない」と各国とも現実的な考え方になってきているようです。

早瀬 バングラデシュで「人口問題の解決には、何が一番重要だと思うか」と聞いてみたのですが、「教育と保健衛生と貧困の問題の解決だ」という答えでした。

例えば、バングラデシュの女性たちは避妊法は100%知っているんです。しかし、避妊をすると自分の生活がどう変わっていくのかという知識があまり提供されていないので、誰も実行しないのです。

ここには、非識字率が80%という現実が背景としてあります。実際には90%以上ではないとも言われています。非識字率が80%以上の国というのは、40カ国近くありますが、そういう国々の人口増加率は3%程度に達しています。初等教育機関が未整備であったり、女性が労働力としてなかなか参加していけないという事実が人口増加の大きな要因となり、

貧困へとつながっていくわけです。

バングラデシュの女性たちに「理想の子供数は？」と聞きますと、日本人と同じように「2人が3人」と答えます。日本だと結果的には1.6人になり、バングラデシュでは4.5人ということになっていきます。乳児死亡率の高さが「保険」という意味での多産に結びついているのです。

女性の地位の低さにしても、私たちが考えているほど彼女たち自身は意識してません。教育水準を上げ、家族計画の重要性を知らしてもらわないと、根本的な人口問題の解決にはならないようです。

村松 男の子が少なくとも1人欲しいという考え方が、多くの途上国の中にありますね。

早瀬 男女の出生性比を見ると、一般的には105対100ですが、途上国では110対100などで男の子の方が多。育て方にしても男の子と女の子で差をつけるといふこともあるようです。

少産少死へ

尾崎 さで、こういった開発途上国の人口問題に対して、われわれ日本人はどういう貢献ができるのかを考えていきたいのですが、日本は、多産多死から短期間のうちに少産少死へと人口転換をした経験を持っています。

日本も実は40年前までは開発途上国であり、さまざまな国や機関の支援のもとで経済大国といわれる



ところまで来たわけですが、今度は日本が助ける番になったのではないのでしょうか。さて、どんな貢献ができるのかと考えた時、人口転換に非欧米社会で日本が初めて成功したという事実は、途上国の人々をも勇気づけるものではないでしょうか。

村松「もちろんそうだろうと思います。19世紀のイギリス、ドイツの例や20世紀前半の合衆国の例を持ち出されるよりは日本の例の方が身近であることに間違いありません。

ただ、戦後の日本の経験がすべてそのまま開発途上国にあてはまるのかどうかは疑問に思っています。教育水準に差がありますし、現状を改善していこうという「動機づけ」ができていくということもあり

ます。実は、この「動機づけ、が開発途上国での人口・家族計画において最大の課題なんです。

家族計画のプロジェクトを大きく分けると2種類になります。一つは、人口統計や人口論的な分野、もう一つは、公衆衛生的なアプローチが中心となっているものです。JICAのプロジェクトは、大半は母子保健やプライマリー・ヘルス・ケア(保健保健)を合わせたものですね。

人口問題をどう定義するかで違ってくるのですが、JICAでは医療協力の範ちゅうに入れています。一番最初の家族計画のプロジェクトはインドネシアで始まりました。その後、アジアの諸国で行われ、最近の10年間でラテンアメリカやアフリカにまで舞台が広がってきています。

人口論の研究を

河野「なぜ、途上国で出生率が高いのかということについても、実はすべて解明できているわけじゃないんです。いまだにわかっていない部分が多い。基本的な研究をきちんと行う必要があるわけです。それでなくては、適切な人口政策もとれません。

ですから、JICAなどでもそういう人口論を研究するような協力もやってほしいと思います。現に米国の援助ではそういう分野に力を入れています。

村松「全く同感です。途上国からもそういう要求

があるようです。率直に言って、今までは人口分野への援助というと内政干渉的なものになるのではないかという危惧もありました。それで、立ち上がりが遅れたというのも事実です。ただ、これからは相手国のニーズを十分に理解し、技術協力の分野で人口・家族計画関係のプロジェクトをのほしていきましょ。

1つ説明したいのは、人口・家族計画のプロジェクトでは「評価、を出しにくい所があります。プロジェクトが始まった時と終わった時とで、どこがどう変わったのかということを正確に出しにくいのです。

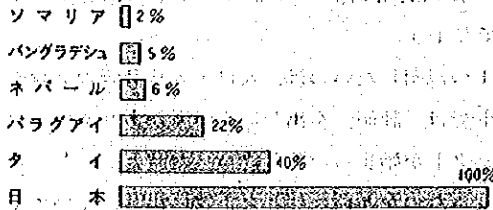
女性の自覚

早瀬 バングラデシュの方々に、「日本にどのような援助を期待するのか」と聞いてみましたが、「教育水準を上げ、公衆衛生を良くし、経済水準を向上させる——この3つをパッケージにしたものか、またはそのうちのどれでもいい」という答えでした。

例えば、経済援助について考えてみましょう。バングラデシュ政府も熱心に取り組んでいるのが、女性に雇用機会を与えるようなトレーニングです。女性が経済活動ができるようになると、家庭の中での発言権が増し、社会のさまざまなことに触れる機会が多くなってくる。子供をたくさん持つことがどれだけ生活の負担になってくるのかを、彼女たち自身が自覚しないと何も始まりません。

【保健婦の付添いを得た出産の比率】

座談会の中でも指摘されているように、子供が無事に育つとい保証がないため、「保険」としてどうしても開発途上国では多産の傾向がある。公衆衛生の劣悪さが大きな原因としてあるのだが、いままさに誕生してこようとするその時、そばに保健婦の付添いすらない状態が世界の多くの国では、「普通」のことなのである。



(ユニセフ統計)

河野：私が人口、家族計画の分野でもっとやっていいと思うのは、ハードウェアの分野ですね。そして、日本人的なキメの細かさと言うんですか、そういうものも援助の中で表現していいと思います。

あと、村松さんがおっしゃってましたが、この種の援助に対する「評価」ですね。その評価でデータを整理していかなくは、将来につながりません。なんとかして、ある程度普遍的な評価体制の整備をきっちりしていくべきです。

もう一つ言わせていただければ、国際機関との連携ですね。彼らは実際に今までやってきていますか

ら。途上国は人口増加に悩まれている国が多いです。

早瀬 人口統計を整備することは重要なんですね。例えば、都市と農村の人口動態を比較する時に、どうしても農村部では調査漏れが多くなります。それでは、統計の信頼性に欠けるわけです。援助をどう進めるべきか、援助の結果どうなったのかということが把握できません。人口統計、人口調査への援助をぜひ進めてもらいたいですね。

人口問題への政策を

尾崎 日本の援助全般を見つめながら考えてみたいのですが、日本のこれまでの援助はダムや橋の建設といったハードウェアが中心でしたが、必ずしも援助が途上国の民衆のところまで届いていないという批判もありました。

私は、教育を含めて日本の経験を援助の中にどんどん取り入れていくべきだと考えています。日本の経験とはすなわちソフトウェアですね。人口問題、家族計画分野への援助というのは、まさにこのソフトウェアの援助なんです。

日本の政府は人口問題へのアプローチに関して非常に神経質であった。内政干渉的な要素があるし、また個人的な部分ではプライバシーの最たるものであるということですね。

しかし、途上国は現実には人口問題を抱えて苦しんでおり、栄養や母子保健や寄生虫予防や教育などと

インテグレートした援助の方法がずいぶん普及してきています。そろそろはっきりと人口問題への援助政策を打ち出していくべきではないでしょうか。そして、もっと自信を持ってやっていくべきだと思います。

村松 わが国は、援助の中で「あなたの国はこういう問題があるからこうすべきだ」という姿勢はとってきていません。私は、これからもそうあるべきだと思います。ただ、現実にはかなりの途上国において家族計画プロジェクトを重要なものと認識し、日本に協力を期待しています。しかし、日本側が腰を上げないということでは、途上国側の不信感をつらせるばかりです。

個人のプライバシーに関しては、我々が考えるほどには問題にはならないようです。援助の末端では、われわれの方がコンタクトをとれるわけではありません。最後はやはり現地の方同士ということになります。すべての地域で英語やスペイン語が通じるわけではないのですから。

ただ、知っておいていただきたいのは、世界のどこの国でもいいですから、女性たちに「子供がたくさん欲しいですか」と聞いてみると、「そんなには欲しくない」というのが彼女たちの本音なんです。

尾崎 家族計画のようなソフトウエアの面が多い援助というのは、もっとNGOの方を利用していくべきではないでしょうか。NGOを先頭に立てて、

政府がそれを後押ししていくという姿勢がもっとあっていいと思いますよ。

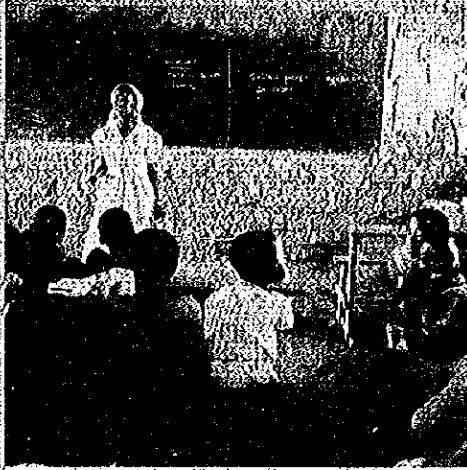
河野 私は、日本で人口統計分野のトレーニングをする機会をもっと持てないかと思います。この分野の日本の技術は、世界に冠たるものですから。その意味では、日本を訪れる研修生は少ないですね。

村松 確かに、国際協力と言っても最後に残るのは、人、です。かつてアメリカのロックフェラー財団が中国に医療協力のプロジェクトを実施しましたが、色々な変化で、ものは残らなかった。しかし、少数ではあっても素晴らしい人材は残ったのです。最後は、人、です。

(1990年5月3日)

いま、途上国の学校で

実態と問題点



東京国際大学教授 豊田俊雄
神奈川県立衛生短期大学学長 皆川卓三
アジア経済研究所理事 堀信

発行年1997年時点

ぶつかり合う場

編集部 開発途上国の学校教育の実態と問題点と
いっても、地域あるいは国によってずいぶんと違い
があるようですが、まずアジア地域はいかがでしょ
うか。

農田 世界の途上国地域の中では、東アジア、ラ
テンアメリカに次いで東南アジアの学校教育のレベ
ルが上がってきています。インドシナ3国は例外と
しても、東南アジアに関しては初等教育の整備は終
って、これからは中等教育あるいはそれ以上をどう
するかという段階です。

アジアの学校教育に共通項はないかと考えてみま
すと、独立後の国造りのために学校教育がどう関わ
ってきたのかに、1つの共通項があるようです。

何よりもアジアの大部分の国は、多言語・多民族
国家であり、その中で1つの国家を造っていくとな
ると、ある種族が代表として国家の統治者にならな
ければならない。そしてその使っている言語を強制
的に広めようとし、さらに統一国家としての意識を
植えつけようとする。そういう方向で国造りをして
きた。

そこで、上からの教育政策と一般の住民の意志が
ぶつかり合うことになる。その両者がぶつかり合う
場、それがアジアの学校教育の場であった、と私は
考えています。

産油国と非産油国

編集部 次に中東ですが、ご存じのようにこの地域は確固たる文化を築いてきています。学校教育の方はいかがなんでしょうか。

堀 中東という地域は東はアフガニスタン、イランから北はトルコ、西はモロッコ、南はスーダシまでの広い地域を指しますが、今日はアラブ世界だけに絞って話をさせて下さい。

アラブ世界の国々は、独立の時期がバラバラのため、近代的教育の導入の時期にもずれがあります。その中で学校教育の共通項を探すとすれば、産油国と非産油国と分けて共通性が見られます。

70年代中葉以降、サウジアラビア、クウェート、リビアなどの産油国では巨額の石油収入を基に野心的な経済開発計画を進めるとともに、人造りのための教育投資にも力を入れてきています。教育という事業は長い時間を要するので、初等レベルの就学率を上げるのにも10年、20年の期間が必要です。それでもこの20年で相当改善されてきています。

エジプト、シリアなどの非産油国はと言えば、学校教育の面はかなり進んでいました。

イスラム教育

編集部 中東の学校教育というと、当然イスラム教の影響を見逃すわけにはいかないんでしょうね。

堀 小学校のカリキュラムでみると、宗教いわゆるイスラームを扱うものがあります。学校教育以外

■国民1人当りの教育公費(推定額)

1970年 1982年

世界	57	181
先進国	137	
開発途上国	17	40
アフリカ地域	17	31
アジア地域	10	59
アラブ諸国	15	129
中南米諸国	20	96

(UNESCO統計年報より)

(米ドル)

451

でもモスクのコーラン学校でコーランの講読を中心とした教育を実施しているところがあります。

エジプトには、近代教育を行う文部省所管の教育体系とアズハル省所管の教育体系とがあります。生徒数、教員数など両者の区分は不明ですが、カリキュラムも卒業生の就職の扱いもそんなに差はないようです。

アズハル系の学校はなかなか見学が許されないのですが、私が視察したカイロの中学校には配属将校がいて、文部省系に比して教練がより多く行われているという印象を受けたことがありました。

編集部 同じイスラームでも東南アジアの方はいかがでしょうか。

豊田 正規のカリキュラムとしてイスラーム教育は認められていますがインドネシアでは何となく

遠慮がちですね。マレーシアは奨励しており、イスラームの時間が増えています。その時間、中国系の生徒たちは教室の外に出ています。

フィリピンは、建て前としては宗教教育（キリスト教）は行わない方針です。

堀 エジプト文部省制定の中学校の授業時間数をみると、宗教という科目は各学年とも週に2時間、そしてアラビア語が6時間、英語5時間。時間数だけをみると、宗教以外は日本とあまり変わらないんです。問題は授業内容でしょうけど。

上層階級者のため

編集部 ラテンアメリカは他の地域に比べると、言語的にもある程度統一されているわけですが、学校教育の方はいかがでしょうか。

皆川 この地域は、ラテンアメリカとカリブ海地域という言い方が最近出てきました。これは、国際関係という角度から出てきているようですが。

カリブ海地域のハイチ、ドミニカ共和国、キューバといった古い国々もありますが、大部分はイギリスの植民地から独立した国々です。これらの国々の学校教育のレベルは高いんです。義務教育が10年から12年という国もあります。ラテンアメリカとカリブ海地域は分けて考える必要があります。

そこで、ラテンアメリカの学校教育ですが、1960年代までは植民地時代の考え方が連続していました。学校というのは、上層階級者が通うところで、インデ

イオ、黒人、混血といった人々には無縁の存在でした。第2次世界大戦が終って、しばらくそういう状態が続いていました。

(注①)
ところが、OAS (米州機構) ができたことと、そのOASとユネスコがたえず連絡して、ラテンアメリカの教育状況の改善に取り組んでいった結果が、ゆっくりと姿を現してくるのです。ラテンアメリカの国々の社会そして経済開発のためにどのような人材を確保したらいいか、マンパワーポリシーというものがある学校教育において強烈に意識されるようになってきました。

コロンブス以降500年たった現在、学校教育は上層部だけという意識はなくなっています。いよいよこれから離陸して、さらに上昇していこうという段階だと思えます。

教養教育の影

編集部 さて、アフリカの学校教育ですが、この地域での問題点としてはどのようなことがあげられますか。

農田 JICAの専門家派遣の約4分の1はアフリカに対して行われている。協力隊員は約600名。我が国とアフリカは深い関係にあるように思います。アフリカはイギリスの教育制度の影響が色濃く残

(注①)=OAS

1948年にコロンビアのボゴタで結ばれた全米連合憲章に基づく機構で、南北アメリカに架かればつづつあった共同体の集大成というべきものであった。加盟国は現在、28カ国。



タンザニアのハイスクール

っているんですが、このイギリスの教育制度というのは教養教育中心で、どちらかというど労働というものを下に見る傾向があります。

(注②)

タンザニアのニエレレという前大統領は、非常に傑出した政治家だと思いますが、彼は実に厳しく西洋式の教育を批判しています。なぜ西洋式の教育がいけないのか。その核心は、西洋式の教育は一部のエリートを造り出すだけで、エリートたちは自ら働くことを喜ばず、農民は農業から離れて行くとい

(注②)ニエレレ

1922年生まれ。ウガンダのマケレレ大学卒業後、タンガニカハとして初めて、イギリスのエディンバラ大学に学んだ。64年にタンガニカとザンジバルとの連邦でタンザニア共和国が成立すると大統領に就任している。

うものです。大統領は、大学で学生たちとさかんに対話集会を持ち、「君たちは社会開発のエンジニアになれよ」と言うわけです。

家と学校

独立後20余年たって、初等教育は整備されてきた。そして7割近くが小学校に席をおいている。親も学校へ行けば何かいいことがあるに違いないという期待で。ケニアやサハラ以南やナイロビには塾や予備校が多くなっている。学校へ行かないことには出世のパスポートが手に入りませんから。

アフリカの人々の信仰では原始宗教が34%と一番多いです。子供たちは、家を出ると近代学校という西洋式の洋服を着るわけです。帰宅すると、部族や家族との生活に戻って行く。二重生活を強いられる子供たちが気の毒にさえます。

ですから、子供たちが喜んで学校へいっているのか疑問に思うこともあります。ケニアでのエピソードですが、6年前に学校でミルクを出すようになりましたら、就学率がいっぺんに23%も上がりました。

こういうことを考えて行くと、アフリカでは学校というものは、まだまだ地域社会から離れたところにあるんですね。

就学率の格差

堀 アラブ世界では、義務教育とそれ以上の教育との間で就学率に差があります。それと、都市部と農村部の就学率格差ですね。

皆川：その点はラテンアメリカも同じです。

堀：カイロでは初等レベルと中等レベルの就学率にそんなに差がありません。しかし、私がいったエジプト北部のソフタスという村では初等教育は70%位の就学率ですが、中学になるとカクッと落ちます。特に女子の就学率が下がりますね。それと高等教育を受けるチャンスは地方にもあるのに、どうしてもカイロ、アレキサンドリアへと集中している。サダト大統領(1918—1981)の時代に相当、地方にも大学を造ってはいるんですが。

ドロップアウト

編集部：我々が途上国の教育の状況を見る時に最も悲しいと思うのは、ドロップアウトの問題ですね。

皆川：ラテンアメリカでは、1学年から2学年に進学する時に50%がドロップアウトしてしまう。1年か2年、同じ学年を続けてあきらめて辞めてしまうケースが多いようです。

従来であればその原因は、家庭の貧困や親の教育への無理解といったことに向けられていたんですが、最近の説明はそうではありません。

教育行政それ自体に欠陥があるのだと指摘されてきています。設備が絶対的に少なく、ある程度ドロップアウトしていくことを前提に校舎が造られているのです。

教師の教えかたが下手くそだから生徒がついてこないということも指摘されていまして、さて、それ

では質のいい教師の養成のためにはどうすればいいのかということで、大学の教育学部や教育大学の充実に努力してきており、だいぶ成功してきているようです。このペースで行けば、次の世紀までには教師の問題は解消するのではないかと言われています。

先生は町へ

豊田 どの国の財政も楽ではないのですから、教育財政を拡大しようとはみな考えてはいるものの、最後には負けてしまうんです。

教育の予算の8割近くが教員給与ですから、教育財政が伸びないと教員給与もアップしないということになります。

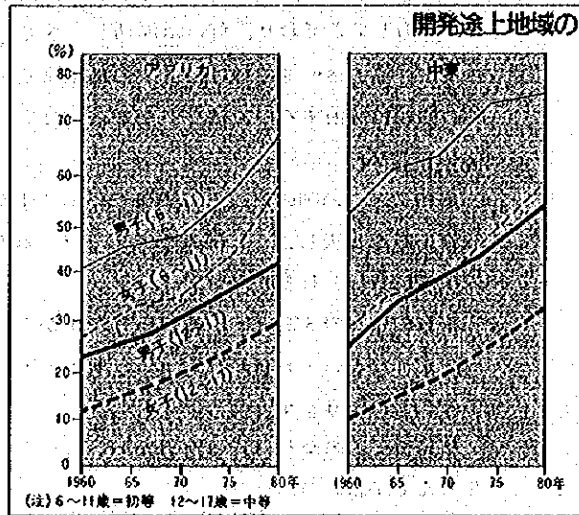
結局、一般の会社に行った方がいいということになるんですね。

私が行ったケニアの学校は自習が多いんです。

「先生はどこに行ったのか」と聞くと、「町へ職がしに行った」「町へ働きに行った」と言う。ある先生はときどき乗り合いタクシーの運転手をずる。校長が許しているんです。それできなければ食べられないからです。

皆川 教員の給与に関してはラテンアメリカも悲観的です。日本のように給与体系がきちんとしていません。

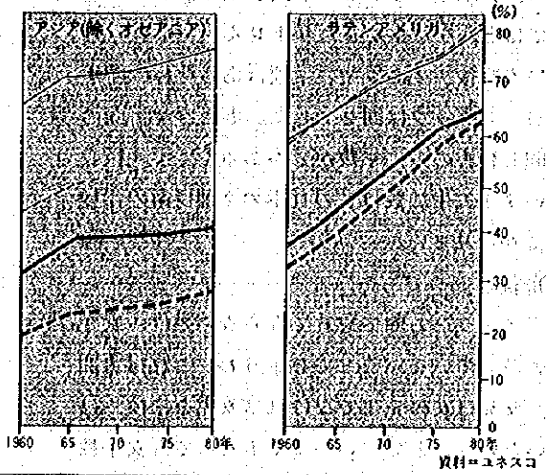
メキシコなどでもそうです。小学校、中学校の教師は時間給です。定額の給与をもらえるのは校長と副校長だけです。午前中はある学校で時間勤務をし



て、午後はまた別の学校で時間勤務して、そして合せてなんとか暮らせるか暮らせないかというところ
です。

豊田 南西アジアからアメリカにかけては、中学校以上になると、国家からの援助が少ないので授業料収入に頼らなければなりません。なかには熱心な教師もいまして、豚をたくさん飼ったり、土曜日に競馬場で馬券を売ったりして稼ぐわけですよ。なんとなくのどかでいい面もありますよ。(笑)

就学率の推移



2人の校長

■ 編集部 授業の内容などはいかかなんでしょうか。

■ 皆川 ラテンアメリカはカリキュラムはしっかりしています。ところが、大都市の爆発的な人口増加で生徒が急増しているため、午前中に1部授業、午後には2部授業、夕方には3部授業を行うということで生徒の増加に対応しているんです。サンパウロ、メキシコシティともそうです。

■ 堀 カイロもそうですね。

■ 皆川 時間的にどうしても短いですから、カリキ

ムラムを消化できないということになります。

堀 教育財政の中で教員給与の占める割合が高いですから、教室を増やすとか学校を建てるなどの投資にまではなかなか手がまわりません。

日本にも戦後、2部授業の学校はあったわけですが、施設、スタッフは同じでした。ところが、向こうでは同じ校舎の中に学校が2つあるんです。校長も2人います。生徒数は昔の日本の2部授業の学校と比べてかなり多い。

今日の宿題

豊田 イスラーム圏で忘れてならないのは、女子教育が普及していないことでしょうね。これは大問題です。父兄は女の先生でなければ女児を学校へはやれないということで、いつまでもたっても女子教育が普及せず、そのため女性教師が育たない。これは悪循環です。それと、地方の学校教育のレベルです。

しかし、教育の効果はそれでも少しずつは発揮されてきているようです。例えば、学校は8時は始まりますが、1時間か1時間半かけて子供たちは歩いてきます。時計もないところでも何とか間に合うように登校してくる。熱帯圏ではいつも太陽は同じところにあるからでしょう。

下校時には先生から簡単な宿題が出される。子供たちは、どういうふうにやろうかと頭をひねります。

明日のための段取りというものを考えるようになる。それから、授業中は騒がない、机の上には手足で上がらない。……こういう集団的な訓練の場が学校であるわけです。これは、ある意味では読み書きより大切なことかもしれません。

皆川 全くそうだと思います。私たちも今日のこの座談会にだれ一人遅れず集まって来ます。(笑) これも幼児期からの訓練がそうさせるんですね。

豊田 ただ、時間厳守もあまり厳しくなると、日本の学校のような超過密な状態になってくる。明日というのは来月のことである、といった考え方も魅かれるところがないわけではない。(笑)

ケニアとタイで

豊田 さて、我々が途上国の人々に何か与えられるものがないだろうか、逆に我々が彼らに貰うものがないだろうか。私は途上国の地域社会や家族がもっている教育力はうらやましいと思いますが、与えるものでは、例えばケニアのジョモ・ケニヤツク農工大学^(注③)の設立は、大きな教育の協力です。タイのモンクット王工科大学^(注④)も長い協力が続いています。途上国の教育財政の厳しさを考えても非常に有効な協力です。そして、これからはどういう協力ができる

(注③)ロジヨモ・ケニヤツク農工大学
1930年に合資課事務修結後、無償資金協力として総額56億で大学校舎、農場関係施設を供与。さらにプロジェクト方式の技術協力を組み合わせて、専門家・青年海外協力隊員の派遣、研修員の受け入れ、機材供与などを実施している。

(注④)モンクット王工科大学
1954年タイ電話公社設立以来、わが国は電気通信技術者の養成をする国保センター設立に協力してきたが、62年にセンターが工業専門学校に昇格。さらに70年北バンコク、トンブリー工業専門学校とノンブリー電気通信大学の3校が合併し、現在のモンクット王工科大学となった。



メキシコの女生徒

のか、また望まれているのかを考えていく必要があるでしょう。

編集部 教師の育成の問題もありますが、校舎などの物理的な面の欠落も大きいんじゃないでしょうか。

大食堂のある学校

皆川 さきほど校舎の不備を申し上げましたが、ラテンアメリカの場合はビジからキリまであります。例えばアルゼンチンの首都のブエノスアイレスには我々がうらやましくなるような施設がある。私が見学させてもらった学校は、150人位の子供たちが一同に食事できる食堂がありました。そういうことも理解しておいて下さい。

豊田 首都の学校には日本の水準以上のものがありますね。

皆川 日本のように1つの学区に1つの学校と決まっていないようです。もっと学区が大きいんです。地域にA、B、C、Dといくつかの学校がありまして、A学校は裕福な家の子弟、B学校はその次といった具合に。黒人の子弟が間違っってA学校に入ったところ、教師に親が呼ばれて、どうもお子さんはこの学校に向かないようです、とやんわりと言われたそうです。

マテンアメリカの学校教育の特徴をつけ加えておきますと、女性教師の多さがあります。9割が女性教師が占める。もう1つは、有資格教師が都市部に集中するきらいがあるということ。

それと、財政的な問題と関連があるんですが、教科書が十分に行き渡らない。メキシコではそれを実施しようとしているんですが、地方まではなかなか行き渡らない。数は確かにあるんですが、地方には届かない。

フィリピンの核家族

編集部 なるほど。学校教育の基本である教科書の問題もありますね。

豊田 数の問題と同時に翻訳式教科書の問題があります。例えば、フィリピンの教科書には家族の代表的なケースとして核家族が出てくる。フィリピンは拡大家族です。核家族というのは、アメリカの教

科書をそのまま翻訳しているからなんです。

全般的な教材の不足と、教科書の内容が翻訳調であること。その面で我が国の経験から何かの手助けができないか、という気がしているんですが。

電化と義務教育

皆川 ラテンアメリカでは、日本の学校を見てみたいとおっしゃる先生が多いです。日本は学校教育で成功した国というイメージがあるんです。そういう人たちを日本に呼べないものでしょうか。お金があったら私が呼びたいくらいなんです。

堀 カイロで学校を見学した時、別れぎわに校長が、日本に行く方法はないかと聞いていました。

最後はひとつづけ加えたいのは、電化と教育普及の関係です。日本の経験を振り返っても農村の電化と義務教育の普及率には相関関係があります。

エジプトの農村部には電気が届いていないところが多いんです。電化という開発プロジェクトは教育とは直接、関係がないのですが、農村の電化が及ぼす学校教育への大きな波及効果は見逃せません。

編集部 本日はどうもありがとうございました。

1987年7月9日

地球環境と人間



SACIS DESIGN CENTER

森林は地球にとって
どういう意味をもつか

●朝日新聞編集委員 石弘之

自然災害と森林

このところ、世界的に災害による死者の急増が大きな問題になっている。米海外災害救援局(O F D A)の統計で、60年代と70年代を比較すると、世界の災害の犠牲者は6倍にもなっており、80年代はまだ半分しか経過していないが、70年代を3割ほど上回る増加傾向を示している。ところが、気象データを調べても、70、80年代に入って災害規模を大きくするような気象異常があったという事実は出てこない。唯一考えられるのは、70年代に入って森林破壊が地球規模で進行したことである。傷めつけられた自然がそれだけ脆弱になり、災害の規模を拡大させている、とする見方がこのところ世界の専門家の間で広まってきた。

O F D Aの統計をもとに、60年代と70年代の年平均の災害件数を出してみると、50%ほどしか増加していない。ところが、年平均の災害別死者数を比べると、際立った違いが現れる。干ばつは1,010人から2万3,110人と23倍になり、洪水は2,370人から4,680人と2倍、熱帯性暴風雨は1万750人から3万4,360人と3倍になった。

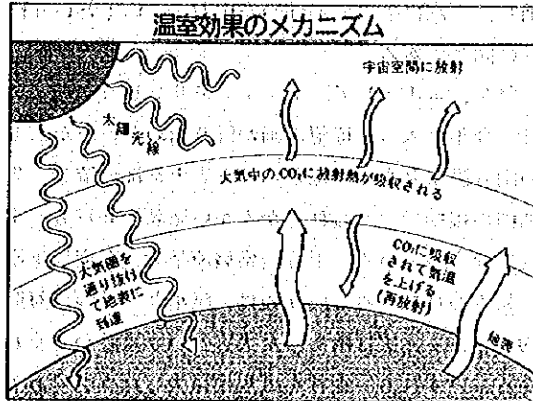
死者・被災者の数を地域別の割合で見ると、アジア15、中南米とアフリカ各10、欧米1という比になり、圧倒的に開発途上国に集中している。死者を国別にみると、ワースト50に登場する先進国は、日本、

イタリア、スペインの3国だけで、あとはすべて開発途上国。つまり、貧しい国ほど災害1件当たりの死者数が圧倒的に多いのだ。

現在、貧しい国々で続いている人口の爆発、その結果起きている過剰農耕・放牧による土地の侵食、砂漠化、森林の乱伐や山地の破壊による水源の荒廃で、小さな災害でも被害の大きくなる案地が広がっている。

近年の災害の中でも、何と云っても最悪に数えられるのは現在のアフリカの干ばつである。一般には干ばつイコール飢餓、という公式が信じられているが、この干ばつに取り組んでいる国際気象機関(WMO)などの専門家の間では、単純に雨の不足がこれだけの被害をもたらしたのではない、とする見方が固まりつつある。というのは、今世紀に入ってからでも、少なくとも8回も深刻な干ばつがあったのに、これほどの被害が出ていないからだ。

エチオピアでは790万人が干ばつで飢餓線上にある。74年のサヘル干ばつときに推定20万人を超える餓死者を出して以来、ほぼ毎年のように干ばつに襲われてきた。こうなると雨量の問題ではない。エチオピアはかつて、国土の50%以上が森林で覆われ、食糧や木材の輸出国でさえあった。それが、森林面積は60年の調査で16%を割り、81年の国連食糧農業機関(FAO)の人工衛星写真の分析では、わずかに3.1%しか残っていなかった。これだけ、急速に森



林を失った国も世界では珍しい。その最大の原因は人口の爆発だ。50年に1,756万人だったのが、現在では4,200万人を超えたと推定される。

家畜も人口は比例して増えていく。人間は森林を焼き払い、伐り払って畑や放牧地に変える。さらに、人口の増えはエネルギーが薪炭で、燃料のために森林を伐採する。家畜は容赦なく緑を食べ荒らしていく。緑を失った土地は雨が降れば洪水、少なければ干ばつとなる。畑や放牧地は養分が枯渇し、乾き切って表土が風や雨で流され始めた。FAOの調査では農耕地の52%が土壌侵食を起こし、農業生産が壊滅的な打撃を被っている。

エチオピアほど極端でないまでも、現在干ばつの被害を被っているサハラ砂漠南縁地帯のサヘル地方の諸国でも、人口と家畜の圧力によって森林が姿を

消し、それによって干ばつが広がっていくという図式は同じである。

だが、エチオピア、ケニア、モザンビークなどには、今年に入って待望の雨が降り始めた。だが、その雨も洪水となって乾き切った表土を洗い流し、先進国の援助でつくられたかんがい施設や井戸も、土砂に埋まっている。干ばつ常襲地帯で、今度は洪水に見舞われているというのは、洪水と干ばつは対照的に見えて、実は隣あった災害ということがよくわかる。いずれも、森林を大規模に失ったツケである。

何といっても地上最大の洪水地域はインド亜大陸であろう。史上10大水害の8つまでを占めている。過去30年、水源のヒマラヤ山麓の森林が広範囲に破壊され、保水機能は壊滅して雨期には土砂を含んだ奔流が下流を襲い、一方、乾期にはほとんど流れないといったことが災害の原因となっている。カシミール（西端）からアッサム（東端）まで、海拔2000m以下の山麓は文字通りはげ山であり、緑を探す方が困難である。30年前には洪水時の被害面積が平均2500万haだったのが、今や4000万haに広がっている。

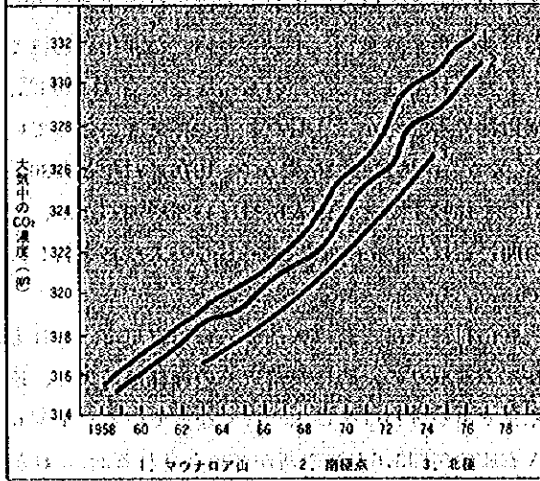
エネルギー危機

デリーなどインドの大都市の郊外で、トラック、荷馬車、人の頭にのせられて、大量の薪が運び込まれてくる光景によく出くわす。ときには、数千人が

行列を作って運んでくるのは壮観ですらある。だが、都市ではこの薪の高騰、農山村部ではその不足がひどくなってきている。インドでは、料理用燃料の87%は薪、農業廃棄物、牛フンといった非化石燃料である。農村ではごく一部の富裕層を除くほぼ100%、都市部でも66%がこうしたエネルギー源に頼っている。だが、森林資源の枯渇から、1970/71年と1980/81年を比較すると、個人所得は43%増加したが、この間に薪は264%も高騰して、貧しい人たちを苦しめている。

農山村部では、薪は大部分、自給自足だ。これも、長年の薪取りのために集落近くの森林は消失し、遠くまで出かけねば手に入らなくなっている。1家6人家族で年間3.6トンの薪が必要とされるが、これだけ確保するのは大変な作業になりつつある。しかも、薪集めは女性の仕事である。ある調査では、4日に3日は平均7時間かけて薪を集めねばならず、帰りは25kgもの重荷を背負ってこなければならぬ。薪が手に入るのはまだ幸せで、貧しい農民の間では火を通さずに食べる食事の回数が次第に増えている。こうした薪の不足は、カリブ海のハイチでも日に日に深刻化している。上空からこの島を見ると、土砂崩れの絶えないはげ山ばかりが続く。森林面積は国土の1.7%しか残っていない。住民たちも、森林が減少するとともに山崩れや洪水が増えできた事実は経験的に分かっているが、今晚の食事のためには盗

大気中のCO₂の増加



この10年間で薪や炭の値段は5倍にもなった。人口に占める栄養失調者の割合では、世界でもワースト5に入るが、とくに近年、子供の間にも下痢による衰弱死が目立っているのは、火を十分通さない食事が多くなっていることも原因に挙げられている。このエネルギー危機はインドやハイチに限らない。世界人口の4分の3を占める開発途上国では、このエネルギー危機はいよいよ深刻化している。FAOの推定では、薪の不足に悩む人々は、アフリカで5,500万人、アジアで3,

100万人、中南米で1,500万人の計1億100万人いる。ところが、これが2000年には、1億4,000万人にもなるという。食べ物は手に入っても、それを煮炊きできない人たちが、刻々と増えているのだ。

気象異変と森林

私たちがこうして生きていけるのも、大気中に酸素があるからにはほかならない。だが元をただせば、この酸素も植物が光合成によって排出したものである。その意味では、人間は森林の寄生虫ともいえるだろう。だが、呼吸している空気の成分が刻々と変化しつつある。これも森林破壊の巨額なツケである。大気中の二酸化炭素の連続測定が始まったのは、1958年のことである。ハワイのマウナロア山に設置された連続測定装置が、初めて刻々と増加する大気中の二酸化炭素を捕らえた。測定開始時に315ppmだったのが、現在では340ppmを超えている。逆算して、エネルギーの大量消費が始まる1850年以前は285ppm程度だったと推定される。この100年足らずの間に2割近くも濃度が上がっていたわけだ。

これまでの二酸化炭素増加の原因は、主として、石炭、石油の化石燃料の燃焼に求められてきた。しかし、最近になって世界的に森林の破壊が急激に拡大するにつれて、緑の消失が化石燃料と同じ程度に二酸化炭素の増加に関わっていると見る見方が有力になってきた。二酸化炭素の増加にこれだけ神経を

尖らせるのは、これが地球の温度を上昇させる危険性が高いからだ。

大気を通り抜けてきた太陽エネルギーの大部分は、比較的短い波長で地表に届く。これによって暖められた地球は、逆に波長の長い赤外線形で放熱する。このとき、大気中の二酸化炭素などが、赤外線を途中で吸収して、その一部を地球に再放射する。この再放射がなければ、地表は現在の平均15度Cから、零下20度Cに冷え込んでしまうともいわれている。光は通すが熱は逃がしにくいという二酸化炭素の性質は、温室のガラスと同じ働きなので、「温室効果」と呼ばれる。

樹木は伐採された瞬間から三重の意味で、二酸化炭素の供給源になる。①二酸化炭素の固定能力がそれだけ減り②伐採された樹木は木材となっても、紙となってもいずれ燃やされ③森林の土壌中に蓄えられている有機物が分解される。伐採や焼き畑によって年間18億トンから47億トンの炭素が大気に供給されている。化石燃料の燃焼に伴う炭素放出量に、この緑の破壊に由来する炭素を加えると、少なくとも毎年70~100億トンもの炭素が大気に排出されていることになる。

このまま続けば、今後70~80年後には、現在の2倍以上の濃度になりそうだ。この結果どんなことが起きるかはまだ推量の域を出ないが、早い予測では10年後、遅くとも100年ほどで、気象に影響が出始め

るか、極の水が解け出して海水位が上がり出すかもしれない、という。

実際にコンピュータにモデルをいれて、二酸化炭素増加と気温上昇のシミュレーションをやってみると、二酸化炭素濃度が倍になることに、平均気温が3度C（プラス・マイナス1.5度C）高くなる結果が各種でている。すでに、「過去40年間に海面は年3ミリの割合で上昇していて、この半分は極氷の融解による」「過去100年で約12センチ上昇した」といった説も出されている。

温暖化したら私たちはどんな影響をこうむるだろうか。一番悲観的な見通しでは、来世紀半ばには海面が40～60センチ上昇するという。東京や大阪の下町は水浸しになり、高波や津波の被害も受けやすくなるだろう。むしろ世界の気候地図も一変してしまうに違いない。

地球に振りかかるかもしれない激変を前に、地球はこれ以上、縁を失うことはできない。そして、これからもこの地球に住まねばならない子孫のことを考えたら、今、私たちに課せられた責務は、一本でも木を増やすしかないことが、こうした事実からも理解できよう。

(1985年6月号)

瀕死の熱帯雨林は
何を語るか

●ノンフィクション作家 橋本克彦

地表を覆う煙

ジャカルタ発の飛行機の窓から見下ろす視野に、うっすらともやのかかった空が広がっていた。近くカリマジタンの地上にも、薄雲が広がっている。(今日の行動は太陽の熱射にさらされずすみそうだ)

4カ月前にマレーシアのサラワク州取材している私は、赤道直下の光の強烈さを思い出して、眼下のもやを、(ありがたい、今日は涼しそうだ)と思っ

てながめていた。薄雲の下にカリマジタンの大地が広がっていた。黒くると続く眼下の大地に蛇行する川が光っている。ボルネオ島は、まさしく赤道直下の島である。面積は日本のおよそ2倍、74万3,000平方キロメートル。かつてはその全域が鬱蒼たる密林であった。島のほぼ中央を赤道が横断し、北緯6度から南緯4度のあいだに横たわるこの島の緯度は、はるがブラジルのアマゾンと等しく、アフリカのビクトリア湖と同位置にあたる。

いま、この緯度のあたりに茂る世界の熱帯雨林はどこも激しく伐採されている。

それぞれの地域の固有の事情によって、森林は姿を消そうとしており、ボルネオ島も、北側のマレー

シア連邦サバ州やサラワク州の森林伐採は進み、またインドネシア側のカリマンタンも伐採は進んでいる。

どの地域にも森林伐採の背景には重く複雑な事情がある。森林伐採の背後に横たわる事情を考えると、薄雲の下に広がっているはずの伐採の光景は、なにかしら私たち人類の、未だいたらざる面の反映のようにも思えてくる。

世界の森林の事情を取材してきた私は、森の続く光景を見るとき、その森に対面している人々と、その人々が抱えているさまざまな事情を想像して、いつのまにか人類史全体をぼんやり想うことが多くなってきていた。

ボルネオ島の熱帯雨林は地球上でもっともよく茂った森といわれる。一般に熱帯雨林といっても、乾季の雨量が100ミリを下まわる地域の森林を乾性熱帯雨林といい、同様に100ミリを上まわる地域を湿性熱帯雨林という。ボルネオの森林は乾季に雨量が多い。というより、乾季と雨季の違いがはっきりしていないとされる。そのことで、地球上でもっとも「典型的」な熱帯雨林が成育した。ボルネオ島の森は、この地球史が生んだ典型的自然のひとつなのだ。

そのボルネオ島東南部サマリンダに、日本の援助で設立された「熱帯降雨林研究所」がある。それがこの取材の目的地だった。

ジャカルタからジャバ

バリクバパン



ジャカルタからのジェット機はバリクバパンへ着陸した。ここでプロペラ機に乗換えて30分ほどでサマリタへ着く。

プロペラ機の高度は低い。その高度からまたぼんやりと、もやにけむる景色をながめていた。地表には、開墾された農地がモザイク模様のようにさまざまな色調で続いている。

あちこちからブッシュを焼く煙がいく糸があがっていた。インドネシア・カリマンタンの海岸部から低い丘陵地帯をふくめて、これまで盛んに開墾されてきたことは予備知識として知っていた。乾季のこの季節は、農地の整備のために、藪や、茂った草を

焼く。日本の薬焼きのような作業であろう。

そう思って地表を観察していたのだが、サマリンダまでの飛行時間のなかばで、その地表のようすが尋常なものではないことに気がついた。農地から森林への隣接する地面が、はっきりと焼け茶色に統一しているのである。

森林の下の地面、いわゆる「林床」が木立の下で焼け焦げていた。それはあきらかに炎が走った痕跡を示すものであった。

それに気がついてから、もう一度、眼下の光景をつぶさに検分した。あるところでは住居の近くの藪のあたりも焦げているし、農地からはるかに離れた丘陵の尾根のあたりも、よく見れば下草や幼樹も少なく、地表がすけて見えており、その地表をまだら模様には焼け茶色の帯が走っているのだった。

この乾季に不用意に火を放てば、あたりの森へ燃え広がる恐れは十分にある。熱帯雨林とはいえ、乾季の地表は乾き、ボルネオ島の湿性熱帯林であっても、当然のことに山火事は起きるのである。

地表の、どこか不吉さを感じさせる焼け焦げた色彩は、それを物語っているのかも知れなかった。

不意に疑問がわいた。この地表を覆う薄雲は、はたしてほんとに雲か？ 煙ではないのか？ とすればカリマンタンに近づくにつれてたなびくほどに濃くなったこの煙こそ尋常ではなく、いまこのとき、これだけの煙を立てる規模の炎が、この島のどこか

で燃えていることになる。

私は隣の席の若者に空を指差して、「あれは雲？ それとも煙？」と尋ねた。

「煙さ」

その学生らしい若者は無造作に答え、「風向きによってはスラウェシあたりからも煙がやってくるんだ。農地にするのに森を焼くからね」と続けた。

スラウェシと聞こえたその地名は、かつて日本の地図にはセレベス島と書かれた、ボルネオ島の東の島のことである。

マカッサル海峡の対岸、ドンガラまで約300キロもあるセレベス島からの煙が、ボルネオ島の東海岸部のサマリングダ上空を覆っているとしたら、これこそただならぬ事態といわざるをえない。私は思わずうめいていた。

隣の若者はげげんそうに私を見ていった。

「ドライシーズンには、こんな煙の目がよくあるよ。インドネシアはいまが開拓の時代なんだよ。つまり途上国はこんなふうに前進しているってわけさ」

シニクな笑いを浮かべた若者の冗談であった。私にとって、この若者の浮かべるような笑いの意味は少しばかり重すぎる。

これまで、ドイツの黒い森(シュバルツバルト)、ブラジルのアマゾン、タイ東北部、マレーシアのサ

ラウク州の現状を取材して得た総括的な印象も、気分次第では、肩をすくめてシロツクに笑ってしまいたいようなものになる恐れはあった。

(仕方ないさ、それが人間のすることなのだ。森は無くなるよ)

このなげやりな気分には落ち込んだら最後、ルボルグへ進む意欲はなえてしまう。

こうした気持ちが胸にわくたびに私は返答する。(それでも人間にはましな方法を編み出す知恵があって、これまでやってきたのだ。森は残るよ)

私は、自分が立派すぎやしないかと気にしながらではあったけれども、後者の意味をこめて若者に笑い返したのだった。

機はゆっくりと着陸した。地上はやはりうだるような暑さである。大気にかすかな煙の気配があった。

(仕方がない?)
(いやいや、なんとかなる)

どうやら、このふたつの気分が、このレポートの感情的な基調になりそうな予感とともに、私は空港の公衆電話で、熱帯降雨林研究所に、到着を告げた。

解明されていない熱帯の自然

迎えの車に野生動物調査を担当している専門家の安間茂樹さんが乗ってきた。短期派遣の研究期間を

合めて、ここでの研究は長い。日本では西表山猫の研究で知られている。

熱帯林造林研究所



すぐに国立ムラワルマン大学構内の研究所へむかった。

サマリングは東カリマンタン州の州都である。人口は急増して

60万人と推定されるという。ここへ来た人々は町の周辺に住むためか、市の中心街は落ち着いたたたずまいである。道を行く自動車も少なく、ゆったりと空間に余裕をとって建物が続いていた。

ムラワルマン大学は丘の上にあった。木立に囲まれたうらやましいほどの環境の大学である。同大学の設立は1962年。大学の名前はこの地方のクタイ王国第3代目の王の名前に由来する。東カリマンタン州の地理的条件から特に林学部を中心とする大学である。

大学構内の丘の中腹に熱帯降雨林研究計画の研究所があった。

この研究施設は1981年日本の無償資金協力によって建設され、ムラワルマン大学に供与されたものである。

研究所の正式名称は「ムラワルマン大学付属熱帯林造林研究所」という。ここが熱帯林研究協力の根

拠地であり、プロジェクトの事務所もこのなかにある。研究棟、事務棟、国際会議室などの設備のある本館の外観は、日本の大学の研究所を思わせるものであった。

この研究施設を中心に、熱帯林の総合的な解明と熱帯林の造林技術へ接続する基礎研究への協力が開始されたのが、1985年からの「熱帯降雨林研究計画」である。はじめに5年間の研究が行われ、90年からさらに5年間の第2次研究期間(フェーズ2)にはいつている。

このプロジェクトは、インドネシアの研究者への研究技術の移転を目標の中心にすえている。そこからガジャマダ大学、ボゴール農科大学も参加して3大学が研究態勢をとる構想となっている。

また研究所には演習林がある。バリクパバシとサマリンドラの中間、国民森林公園のなかの標高60メートルの丘陵地帯に、5,000ヘクタールの面積を有しており、ここでは研究と研究実習が行われる。名称はブキット・スハルト演習林、ここから60キロの道のりであった。

同研究所インドネシア側スタッフの皆さんに到着の挨拶を終え、取材の打合せをふくめて日本側専門家のチームリーダー前田満氏に話をうかがった。

「着々と成果はあがっていますよ。熱帯林の研究は、世界的にいうとまだ入口からわずかに進んだ段階で



ブキット・スハルト流石作

「この自然の美しさは、私にとって何よりも大切なものであり、それを保護することは、私にとって何よりも大切なことだから、全貌を解明するまでの道のりは決して楽観できるものではありませんが、学術研究の足取りはハイウエーを飛ばすようにはまいりません。そこを知っていただければ、ここに赴任したこれまでの研究者の成果は正しく評価していただけたと思います。自慢ではなく、誇っていい成果だと思います」

「私はアマゾンの中流域、マナウスにあるブラジル国立アマゾン研究所を取材したことがある。そこでこの研究は、熱帯の自然を相手に一見してゆらりと、しかし、ねばり強い足取りで続けられていた。」

「熱帯の自然の学術的な研究は、医学や、科学技術などの研究が華々しく進展しているのに比べれば、

いまやっとその緒についた段階だというべきなのである。

また、先進文化圏の自然がほぼ基礎的な解明を終えているのに比べれば、熱帯の自然にはわからない領域が多く残されている。この事情を知らないまま、性急に成果を求めるとすれば、それをいう者こそ不明を恥じなければなるまい。

私は、あくまでも素人として、と断りながら、熱帯の自然の研究の困難さと、解明されている領域の少なさについて予備知識があるむねを前田氏に告げた。

前田氏の言葉には、私が性急に成果を求めるような考えを持つ人間ではないかと、危惧するニュアンスがあったからである。

このレポートを読まれる方にもそれがあはしな

いかと、私自身もわずかに危惧を持つものである。

たとえば熱帯林が伐採されているというマスコミ

報道に接して、「伐採したのなら日本の山林のように植林すればいい

ではないか。暖かくて、雨がよく降る熱帯なら、

苗木はすぐに育つだろう」と思う人は少なくないのではなかろうか。

これがわれわれ温帯に住む人の当然の発想かも知れない。が、熱帯ではそうはいかない。これまで、植林の歴史が乏しいか、地域によってはまったくないのが熱帯なのである。

日本の村落に近い山林のほとんどは、長い植林の歴史を持っている。そこには歴史を通じての経験や技術が蓄積されている。

たとえば植林の方法には、「適地適木」

というセオリーがある。土壌、地勢、気候などの要素を総合的に判断して、なにを、どこに、どのように植林するかを決定する。すなわち適した樹種を、適した場所に植えるというわけだ。その基礎的なデータは、温帯地域の先進国ではあらたに調査しなくても、歴史的経験のなかに蓄積されており、なにをどこに植えれば良く育つかは、歴史のなかで検証済みである。

しかし、熱帯雨林地帯にはこの蓄積が無いが、乏しい。熱帯雨林地帯の植林の歴史は、ほとんどない。たとえば、アマゾンの河口、ベレン市にあるブラジル国立総合農業大学の林業科には植林の講座が無い。無限と叫ぶいいジャングルを前にすると、人は「植林」というモチーフそのものを必要としないのかも知れない。アマゾンの林業とは、さしあたって、なにをどう伐採するかだけが中心課題となって今日に至るのである。

東南アジア地帯の熱帯林の伐採が急速に進展したのはこの30年である。いま原木輸出を停止したフィリピン、タイ、インドネシアなどの諸国の伐採の経験そのものが、温帯の先進国に比べてあまりにも浅



農地のやせた土壌

いのである。そこに植林の経験、技術が蓄積するはずはなかった。したがってここで森を育てようとするば、ゼロからの出発ということになる。つまり「植えればいい」などと簡単にはいえないのが熱帯の森なのである。いまここでは「熱帯降雨林研究計画」の位置について述べようとしている。これを述べておかないと、この計画がフェーズ2に入るとどのような研究課題を設定しているかの背景が理解できないのではないかと、私自身が心配しているからである。もう少し背景について述べることをお許し願いたい。

たとえば土壌である。日本の場合、林業経営のために、山林土壌の解明はほぼ完了している。明治以来、山を歩きに歩いて土壌分布図が描かれた。その土壌のうえに育つ植生の分布も解明されている。植物の栄養となる有機質がどのように土壌に蓄積されるかも解明されている。

「造林」の際にはこのデータの有無も決定的な意味を持つ。これが解明されていなければ「適地適木」の根拠が得られない。ただむやみに植林しても木は育たず、育ってもなぜ育ったのかをつきとめられず、成果はわずかしか次へ継承できない。

しかし、熱帯の途上国にはこのデータが無いから、乏しい。

そして生態である。森林の生態は無数の系が複雑に影響しあってひとつの世界を形成している。土中の微生物から植物、大型哺乳類へいたる系の、まさしく「生態」がつきとめられなければ、森の生きたダイナミズムを把握することができない。

熱帯の土壌が、思いのほか痩せていることが解明されたのは、この面の研究のひとつの成果であった。「あれだけのジャングルが茂っているのだから、熱帯の森の土は黒ぐろと肥えているだろう」

というのは、温帯の森の、それも広葉樹の森の土からの単純な想像なのである。

熱帯では地表に落ちた葉や枝、つまり森の生産物である有機質がすぐに分解され、雨によって流失し

ていく。土中に養分が蓄積されず、すぐ欠われるため、土壌は瘦せている。土中にとどまる養分が流れるまえに植物は急いで根から吸収する。これらの結果、熱帯の森の土壌はほとんどの場合、瘦せているのである。このような土を相手に森を開伐して農業を営もうとしても、作物は短い期間で実らなくなる。そしてさらには、すべての熱帯雨林がこの一般的な性質だけを持っているわけではないという問題が存在している。場所によつては、妥当な方法によつて、十分に植林も可能だし農業も可能である。

これらの問題はごく一部だが、要するに、温帯の先進諸国が歴史のなかで蓄積したデータのほとんどを、熱帯では意識的に、学術的方法によって知らなければならぬわけである。これらが「熱帯降雨林研究計画」が当面している課題を構成しており、それは同様にこの研究所の位置を示している。粗い記述ではあるが、森林伐採の速度と、この課題とを重ねあわせると、事態は切迫した様相に見えてこよう。

研究テーマが物語る熱帯雨林の謎

第2期(フェーズ2)にはいろいろな研究プロジェクトは、その最終目標を、(この研究所を)熱帯降雨林研究における拠点と(文脈)をふまえて、(長期間)を(大規模)とする

なるように確立すること」が、この期間の第一の目標と定め、さらに、「熱帯雨林に関する基礎的資料の蓄積を図ると同時に、東カリマンタン地域の熱帯雨林の適切な管理のために必要な研究を支援、遂行すること」を第2期の目標とした。

この戦略のもとに、4つの分野の研究目標を設定している。

この各目標の意味することを理解するために、前段ではややくわしく「現状」について述べたのである。

以下は研究テーマを抜粋しながら見ていくことにする。
第1分野は「森林立地環境の評価」である。

- ① 土壌分類および土壌生産性
- ② 焼畑耕作による土壌条件の変化ならびに森林立地環境の保全

自然科学の研究文献は、素人にとってどんな意味があるのか、なかなか理解できない。

①については「森林土壌図作成のための資料の蓄積をはかる」と補足されている。
川さきにあげたように、土がどんな性質なのかをつきとめようという研究項目である。そして、最終的には土壌図を描こうということになる。これが森林を解明する必須のデータであることは、すでにふれた。

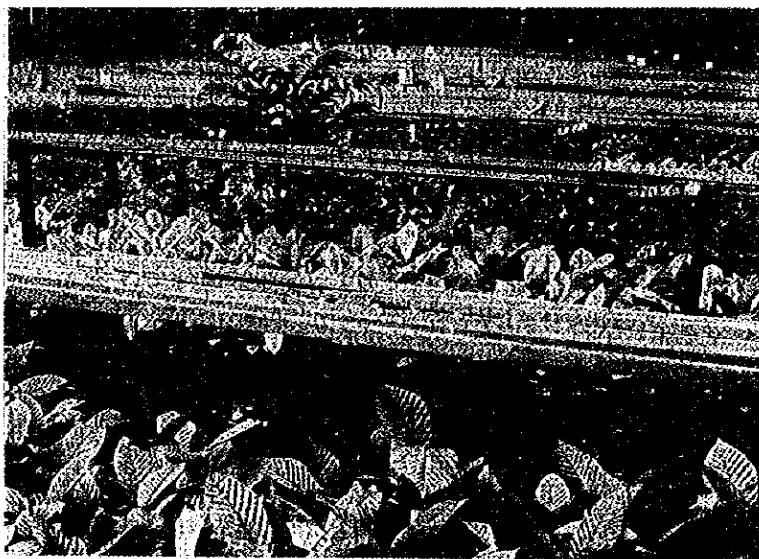
一定の間隔で、碁盤の目のように森の土を採取していき、どんな土壌が、どのように分布しているかを調べあげるのである。この一項目だけでも容易なわけではない調査であることがわかる。

この分野を担当するのが、森貞和仁氏である。農林省森林総合研究所から赴任してきている気鋭の研究者である。

「どうも前任者が勤勉な方でね。実績の水準が高くてサボれないスよ」と

研究室にはサンプルの土が、採取した地点の名札をつけられてとところせましどならんでいた。それらはひとつひとつ分析されて碁盤の目に書き込まれていくことになる。そしてさらに、その土がここではどのような植物をどれだけ養っているのが(生産性)をみていくわけである。この基礎データにもとづいて土地利用の計画を立てれば、混乱を少なくすることができよう。

②では、焼畑耕作が土壌をどのように変質させるのか。先住民の伝統的な焼畑耕作がどのようにこの土地と自然と関連して行われているのかを正確に見ようとする。さらには、いま進行している森林伐採や大面積の焼畑耕作が今後どのような影響をもたらすか。保全するにはなにをどうすればいいかが探られる。



演習林内にある苗畑

また、このように、自然環境を人為的に改変する行為は、自然環境の生態系に多大な影響を及ぼす。このように、自然環境の改変がもたらす影響は、開発が不断に自然の生産力に圧力をかけている。それを克明に掌握することができれば、開発計画が理にかなったものか、無謀なものかを判断することができることになる。

第2分野は「森林生態系の解析」である。この分野が熱帯降雨林研究計画の中核をなすと、位置づけられている。

- ① 択伐、山火事及び焼畑による生態系の攪乱に関わる更新過程
- ② 森林生態系の機能とその動態
- ③ 森林型区分と広域動態
- ④ 野生生物の生態

このうちの④は、人間によってさまざまにかきまわされている森林が、どのような姿をみせながら回復していくのかをつきとめようとしている。これがわかれば、自然が回復していく方向へ人間が介添えして、その回復を助けてやることができる。

⑤では森はどんな方でどのような速度で生きているのかがつきとめられる。つまり、森や、一本一本の樹木がなにをしているかがわかることになる。葉が地面に落ちたあと、どれだけの養分が水に溶け出し、どれだけが根に吸収されるのか。森の健康や、生理状態がつきとめられるのである。

森のなかではさまざまな樹木が生存競争をして、森全体も勢力争いの場となっている。そのようすを見極めようというわけである。その場には動物もふくまれる。動物が森のなかでなにがどのように生き、どんな役目を負っているのか。

この中核的テーマがはっきりすれば、熱帯雨林の正体がはっきりし、他の分野と関連して、炭酸ガスをどれくらい吸いどって、酸素をどれだけ吐き出しているのかも推定できることになる。ここから地球環境全体へ、温暖化現象への答えにも通じる道が開けることになる。

この分野を担当するのは渡辺隆一氏、信州大学助手からの赴任である。自然環境保護にも取り組む論客である。

「もう少し緑が残っているのかと期待してきたのだが」と平野部の伐採に対して無念の思いを語っていた。平野部の伐採は、この分野の研究者の代表として、野生生物の担当はさきに登場した安間茂樹氏である。困難とされた西表山猫の生態の研究で学位を取得した。研究の対象があれば自費でも食いつく力持ちである。この分野の研究者は、
「演習林の夜、動物を待たずで息を殺しているのが、ま、生き甲斐なんですな」
やさしい目をきらりと光らせた。

第3分野は「森林生態系の再生技術」である。

- ①熱帯林樹種の繁殖様式の解析
- ②樹木の成長・耐性に関する環境要因の解析
- ③育林技術の開発

この分野が、いましきりに報道される熱帯林再生の中心的課題といえよう。ときにはよっては性急な結論を要求される分野だが、ここに列記した「熱帯降雨林研究計画」の項目からもわかるように、熱帯林の造林、再生の土台となる基礎研究の水準からいって、報道されるように、「明日にでも植林が軌道に乗るといえるのは、結論の急ぎすぎといえるのはあきらみである。いま熱帯でどうにか植林されつつあるのは「早生樹」といわれる樹種である。アカシアマンギューズや、ユーカリなどがそれで、伐採までの時間はおよそ20年前後とされ、用途はバ

ルブチップなどに限定されている。

熱帯林の代表とされる、ラワンなどの巨木の植林は実験段階であり、種を集め、ポットで実生（みじょう）を育て、山地に植栽する段階までが実験されている。そのときにはさまざまな試行錯誤が待ち受けていよう。

ここに見てきたように、熱帯雨林の何がわかっていないかを、ここでの研究項目が逆に物語っている。

④にあるように熱帯樹種の発芽の特性が不明なのである。

さらに、通称ラワンと呼ばれるウタバガキ科の樹種は、幼樹のときは日陰で育ち、頭上の木が倒れて光が差すとぐんぐんと成育して樹高は30メートルから40メートルに達する。このような成長過程で、幼樹のときにどれくらい日陰で待機していられるものか、どれくらい乾燥に耐えられるか、水をかぶってもどれくらい枯れずにいられるかなど、ウタバガキ科の樹種でも細かいことが知られていない。

また、はらきりした四季のない熱帯で、この樹種はきまぐれに見えるような振舞で花を咲かせる。開花を促進する引き金がなになのかもわかっていない。これがわかれば、種の採取が計画的に行われるが、いまでは、花を発見して実の結ぶ時期を推定して採種にとりかかっている。そのうえ種は、休眠期間がない。冬を過ごして春に芽を出すといった温帯の植物の多くの種とは性質が違っており、種の長期間の

雄を多く移めたフタバガキの雄



保存ができない。こうした生理が分かっていない以上、育林技術の開発の前途も容易なものとはいえないのである。

この分野を担当するのは西山嘉彦氏、農林省森林総合研究所からの赴任である。九州支所で造林を担当した。

「温帯の樹木になれた目でみると、フタバガキ科のやつは不思議な木ですよ。乾季雨季に関係ないような花の咲き方をしたり、木の上でもう発芽していたりする。地上に落ちたら、すぐに生存競争をやるつもりで、フライングしてるみたいだ」

研究者が不思議というときは、その対象にのめり

込んでいるともいう。そんな意欲のこもった首のかしげ方をした。

第4分野は、これらの3つの分野を統合した試験林の設定を中心に組み立てられ、虫害や病気の発生環境などもそこで研究されていく。

チームリーダーの前田氏は、日本の林野庁の拡大造林時代に北海道根釧原野に展開したパイロット・オーレストの現場で、鼠の食害と闘い、ついに駆除方法を開発するなどの業績をあげている。

「私は皆さんの顔の役目です。研究者はどこかわがままでないといけませんから、その条件を維持しようと思っています」

と慈父のように語る。

こうした個性豊かな専門家の、仕事の土台を支えるのがJICAから赴任した業務調整・コーディネイター)の岩田弘氏だ。堪能な英語を駆使して交渉ごとを引き受け、チームの健康にも気を配っている。

「みなさんの雑用係に徹しています。気候も生活習慣も変わって、誰でも調子を崩すことがありますから。それとなく注意して条件を整えています」

こうして「熱帯降雨林研究計画」は第2フェーズの目標にむかっているわけである。

森の正体を知ること

ここまで見てきたように、第2期にはいった熱帯降雨林研究計画は、その研究の項目が順調に達成された場合、いま盛んに議論されている熱帯林についての、不明な領域の相当部分が解明されることになる。

一部の新聞が、熱帯で取り組まれはじめた民間企業の植林計画を大きくとりあげているけれども、その前提に横たわる困難さについてはふれていなかったりする論調にも、冷静な判断が働くことになるだろう。

自然科学の知見は、いわずもがなだが、客観的である。したがってそれに基づいた植林を行うてはじめて、民間各社が取り組みだした熱帯林再生の計画は無駄もなく妥当なものになる。さらに将来、この地域の土壌成分図や、自然の生産性が定量的にとらえられてくれば、持続可能な利用という、誰もが認める自然資源としての森林の利用の限界がはじきだされる。

森の正体が、いっそうはつきりととらえられれば、遺伝子資源としての熱帯雨林の底知れぬ価値がはつきりしてくる。

熱帯雨林の土壌がどこでも農業に不向きであり、一度伐ったらどんな場所の熱帯の森林も再生不可能

であるという、たぶん情緒性をともなった熱帯雨林の神聖視も、科学的な知見によって、少なからず冷静な視線に導かれるに違いない。

その視線を獲得できれば、土壌も知らず、植物相も知らず、気の遠くなる地球の時間のなかで適合してきた熱帯の自然の相も知らずに、農業開発を急ぎ、いたずらに自然を破壊する愚かな誤りも避けられる。

だがすでに遅いのかも知れないのだ。伐採している森がなにものであるかも知らずに、フィリピンや、タイや、ボルネオ北部の森も、ここカリマシタンの森も、すでに平野部では姿を消してしまったのであった。

熱帯材を買い続けた日本は、この点で人類の犯す過ちを、あまりに無頓着に犯してしまってきている。

(それが人間のすることさ)とはいいたくない。日本の経済発展の面からすれば、シニクに肩をすくめて笑っているのは卑怯というものである。

この「熱帯降雨林研究計画」の研究施設の利用についても、高価な機械が無駄に眠っているという記事を掲げた新聞社があった。

その批判の方向は正しいかどうか。ここまで熱帯雨林の消滅に加担した日本の責任を考えれば、むしろ遅過ぎたことを批判すべきであり、この研究体制の規模のささやかさを批判すべきではないだろうか。

アマゾンのジャングルを対象にしているブラジル

国立アマゾン研究所のある研究者は、総員270人の体制でアマゾン进行调查することの非力さを嘆いていた。270人の陣容のままアマゾン进行调查すると、生物の分類が終わるまで何百年かかるかわからないと苦笑していたものである。東南アジアの熱帯雨林であっても、事態はそうは変わらないだろう。

わが「熱帯降雨林研究計画」にこれまで投入された研究者は、長期専門家が20人、短期専門家が25人である。このささやかな人員の研究協力が無駄というのはシニカルにすぎよう。やっても無駄という意味の無駄を、ODAの無駄という文脈で語っているとしたら、そこに退廃が潜んでいるように、私は思うのである。

むしろこの計画の困難さを直視して、少しでも科学的知見が増える方向に批判することこそが、この「計画」への批判ではないだろうか。失われようとしている熱帯雨林について、私たちはそれほど知ってはいないのである。くりかえすが、そのことは、さきにあげた研究の項目にはっきり告知されている。

ジャングルの闇を貫く炎

現地のスタッフは献身している。単身赴任者の生活の苦勞、言葉の障壁、相手方の大学の機構的な問題を前に、それでも成果はあがっている。

ちょうど私の滞在していた時期に、土壌を担当し

ていた前任者の太田誠一氏が、森林総合研究所北海道支所から再び短い期間、研究所にやっていた。

太田氏から興味深い研究の一端をうかがった。熱帯の森林土壌では、定説として養分が表層に多くとどまり、やがて雨などによって流失するとされているが、太田氏の採取した演習林内部の土壌では、下層の土壌中150センチの深さまでには、相当程度の養分が沁み込んでいるという。

そこは砂地の土壌が表層にあり、その下に粘土質の土壌があるところで、粘土が小さく固まって(団粒)、その間に養分が沁み込んでいるという構造であるという。この知見ひとつでも、実際に調査することの意味の大きさがうかがえる。下層に一定の養分を期待できるとすれば、森林施業の方法にもなんらかの影響が予測できそうである。

(人間には知恵がある。それでこれまでなんとかやってきたのだ)

と私は頼もしい思いでこの話を聞いた。

研究所での皆さんのインタビューを終え、わたしはブキット・スハルトの演習林にむかった。ここでの宿泊を私は楽しみにしていた。

夜、林道をひと回りするという安間さんのジープに乗って、演習林に入った。演習林のなかでは、露出した石炭層に火がつき、いつもくすぶっている。

演習林内部に何か所も火がついている所があるという。私はそのうちのひとつに案内してもらった。

その現場は、道のわきの小さな崖の中腹だった。樹木に燃え移る恐れはないとのことだったが、開のジャングルの、木立の幹を赤く染める炎は、不気味にも美しいのだった。

石炭の煙が木立の間にたなびき、鼻をつく異臭が開のなかにたちこめている。炎はめらめらと燃えあがっていた。が、これも自然なのである。地球の歴史のなかでは、深い森のなかでこんなふうに石炭が燃えることもよくあっただろう。

この火は1982年から83年にかけて、世界史上最大とされる山火事がこの森を走ったときに燃えだし、何度か消火したはずのものが、また吹き出して燃えているという。その山火事では東カリマントン一帯の森が九州ほどの面積で焼失したという。

だがすでに、この演習林は山火事以前から自然林ではなく、伐採がはいつて、めぼしい巨木は伐採されていたのだという。そこを山火事が襲ったが、それでも開けた所には、日なたを好む樹種が茂り、森としての自然を営んできている。やがてこの森も遷移が進み、このままの営みが続けば、熱帯の典型的な森(極盛相)になっていくのであろう。

自然の大きな輪廻では、歴史上最大の山火事の跡も緑におおわれる。

そこから考えれば、回復不可能なほどに森を痛めつけてしまった人間の行為は、歴史上の何にたとえられるのだろうか。



熱帯林に生きる動物たち

野生哺乳動物の調査

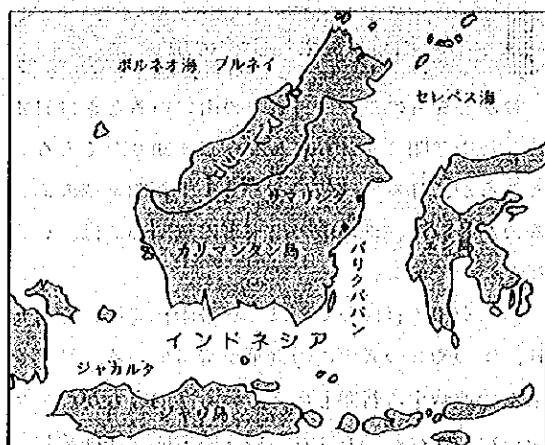
●野生動物専門家 安間繁樹

おかしなもので、ボルネオの山にいるときは日本のことなど聞こうとも思わないし、知りたくもない。ところが、日本では朝起きるとまず新聞を読みあさるのが日課だ。世の中の出来事に無関心では、いられないのである。

そんな中で目につくのは「熱帯雨林」。近ごろは毎日、1つや2つ必ずこの言葉が載っている。特集を組んで連載する新聞も増えている。内容もかつて多かった何がなんでも守れという感情的な保護論に替わって、最近は熱帯雨林を持つ開発途上国の現実を直視し、その保護の難しさを認識した上で、なおかつ我々は何をなすべきかを論ずる方向になってきている。これは大いに結構なことだ。生活の多くを直接、間接に熱帯に依存している日本人にとり、それは決して無関心ではいられない問題だと思われる。

さて、インドネシア国、東カリマンタンの州都、サマリングには熱帯降雨林造林研究センター (PUSREHUT) がある。日本政府が無償資金協力で建てたもので、JICAから派遣された長期専門家を中心に「熱帯降雨林研究計画」が1985年から進められている。

このプロジェクトは破壊された熱帯林の再生をめざし、方法の確立とインドネシア研究者への技術指導を主な柱としているが、現在は植生・土壌調査と



いった基礎的研究を中心に進められている。

熱帯林消滅の危機が叫ばれて久しいが、カリマンタンにおいては、これに関連した研究がスタートしたばかりなのである。しかし、その存在は心強く熱帯林再生への日本の貢献が大いに期待されている。

私はこのプロジェクトへ短期専門家としてJICAから過去3回派遣された。分野は哺乳動物相及びその生態調査と、研究の技術指導である。現地での私の生活は、本誌1988年2月号で紹介させていただいた。

生活のためには

私はかつてWWF（世界自然保護基金）に在職したが、当時、本部を通じて熱帯林の重要性と保護の

必要について大キャンペーンが行われた。その論理は実に明解で、説得は十分足るものであった。ところが、カリマシタンへ入ってみて、森林の保護育成が一筋縄ではいかないことを知った。しかも、その難しさの要因はインドネシア側に大きくあるような気がしている。

カリマシタンの森林資源は、保護より利用の政策がとられている。保護して、そこから出る余剰を利用していくより、すぐに伐採して木材として売るのが、手とり早く収入が得られるからだろう。いまは、いかにして食べていくのが国策なのである。

また、ジャワ島に集中する人口を分散させるために1950年から集団移民政策がとられているが、これらの人たちを安定させるために、ある場所では森林を切り開いて一大炭鉱町をつくったり、伐採道路ぞいに奥へ奥へ入植させ農業を奨励したりしている。

これは焼畑によるコショウ栽培が中心である。同じ焼畑でも、現在なおマハカム川上流域で行われている先住民によるものは、2〜3年して地力が低下すると数10年の休閑期を置き、その間、別の場所で耕作するので森林もよみがえるのだが、新たな開拓地は次々と入ってくる移住者に使われ、回復力を失った原野になってしまうのである。

森林の伐採も焼畑も生きていくためのものである。爆発的に増加する人口、それを支えるために森林を伐採しなければならない経済機構。石油、石炭、森

林が実に豊かなカリマンタンであるのに、一旦、町を出ると電灯もなく、炊事や暖をすべて薪に頼っている貧しい現実を見ると、熱帯林の保護は私たちが考えている以上に難しいことが分かる。

あらゆる調査方法

私の主な調査地はブキット・スハルト保護林であった。JICAチームの全分野が継続調査している研究林を含む270km²の森林である。

フタバガキ科の樹木とインドネシアテツボクが優占する熱帯低地林であるが、15年程前には有用樹種が選択的に伐採され、さらに1982～83年にかけては大規模な山火事に見舞われており、そのような所ではジャボンやマカラングといった先駆植物が繁る林に変わっている。

同じボルネオ島でも、マレーシア側は比較的研究が進んでいるのに対し、インドネシア側はほとんど行われていない。そのため私の研究も何が生息しているのかという最も基本的な調査が主体となった。特定の動物や、あるグループを追うのではなく、哺乳類であれば何でも調べるのである。時間も手間もかかる仕事だが、私にとってはむしろやりやすい方法であった。

ネズミ、ツバイの捕獲にはケージ・トラップを使った。インドネシア製だが日本のネズミがごと変わらない。朝、餌としてバナナをつける。これはツバ

イ用だ。夕方はサツマイモやキャサバに取り替えた。夜間活動するネズミの餌である。

果実食のコウモリには、かすみ網を用いた。

超音波を出す食虫性コウモリは、ねぐらを急襲したり、飛んでいるものを捕虫網を振り回して捕らえたが、これはかなり難しかった。そんな時、子供の頃の遊びを思いだして、もしやと思っただけの方法があった。それは釣竿の先に布切れをつけてコウモリがいる所で振り回すやり方だ。餌と間違えて近づいたコウモリが、竿にふれて落下するというわけである。これは、まずまずの成果が得られた。

中形から大形の動物は、主に猟師のところをまわり捕らえられた種の確認をしたり、自分でワナをかけたつもりもした。

観察路を注意深く歩き、動物を捜し出し写真に納める方法。餌付けによる直接観察。無人カメラによる自動撮影。考え付くあらゆる方法で調査をやってみた。

65種の動物を確認

私はこれまでにブキッド・スバルト保護林で65種の異なる哺乳動物を確認し、そのうち58種の種名を明らかにすることができた。その概要を紹介しよう。

食虫目では唯一ジムヌラを捕獲した。小さめのネコくらいになる真っ白なモグラで、人家や耕作地近くに生息している。



ボルネオ島のボルネオ国立公園
にあるボルネオ国立公園
の熱帯雨林保護林研究センター

ボルネオ島のボルネオ国立公園
にあるボルネオ国立公園
の熱帯雨林保護林研究センター

ボルネオ島のボルネオ国立公園にあるボルネオ国立公園の熱帯雨林保護林研究センター

ツパイ目では4種を捕らえた。優占する2種のうちアカオツパイは明るい林で、コモンツパイは高木の繁る比較的良い林で見られた。夜行性のハネオツパイもきつといるはずだが、遂に見つけることが出来なかった。次の機会には必ずや探し出したい。

皮翼目のマレーヒヨケザルは、ちょうどムササビのように滑空する動物だ。飼育を試みたが、うまくいかなかった。

翼手目は8種のみ。ボルネオ全体では96種、ブキット・スハルト保護林には約30種が生息するものと

考えられるから、今後、ねぐらを探すなど別の調査方法をとる必要がある。

鼯長目は8種。これはオランウータンを除き、東メリマンタンに分布する鼯長類のすべてである。オランウータンは昔からここにはいないようだ。貧歯目、マライセンザンコウは全身を囲いウロコで守っている。むしろ里近くに多く、頑強な爪でアリ塚を掘り崩しては、専らシロアリを食べている。

げっ歯目は23種。リス、ネズミ、ムササビ、ヤマアラシである。高木から地上、良い森林から農家の庭先まで、種の多様化と住みわけがみられた。

食肉目は13種。この多さには驚いたが、夜間、何時間も待ったすえ会うことが出来たベンガルヤマネコ、マーブルドキャット、マライヤマネコなどは実に美しかったし、感激もひとしおであった。

生息の条件

十分な成果をあげられなかったコウモリを考慮すると、ブキッド・スハルト保護林には約100種の哺乳動物が生息するものと考えられた。ボルネオ島からは221種が報告されているが、全局的に分布すると考えられるものは100種強だから、そのほとんどが、ここに生息する計算になる。これは私にとって大変な驚きであった。伐採や山火事からのダメージで、それほど良い林だとは思えなかったからである。

これには2つの理由が考えられた。一つには、ブ

キッド・スハルト保護林はサマリングとバリクバパンを結ぶ国道と東の海岸線にはさまれた狭くて細長い地域内にあるが、この中では当保護林を除いて良い森林は存在しない。従って、ここは多くの哺乳動物にとって唯一残された恒常的に生息可能な環境なのだろう。伐採や山火事によっても森林が分断されず樹冠層が連続的に残ったことも、幸いしている。

次に、この地域には多くの異なる植生がみられ、これに対応してそれぞれの植生を好む動物がおり、結果として種類数が多くなっているのだろう。もちろん50mの高さに達する森の立体構造も動物の住みわけを可能にし、多様性を保障している。

ただ、相対的に個体数が少なく、1つの群れを構成する個体の数も他の森林に比べて少ない印象を受けた。これは当地の各植生の1つ1つが小さいことによるものだろう。

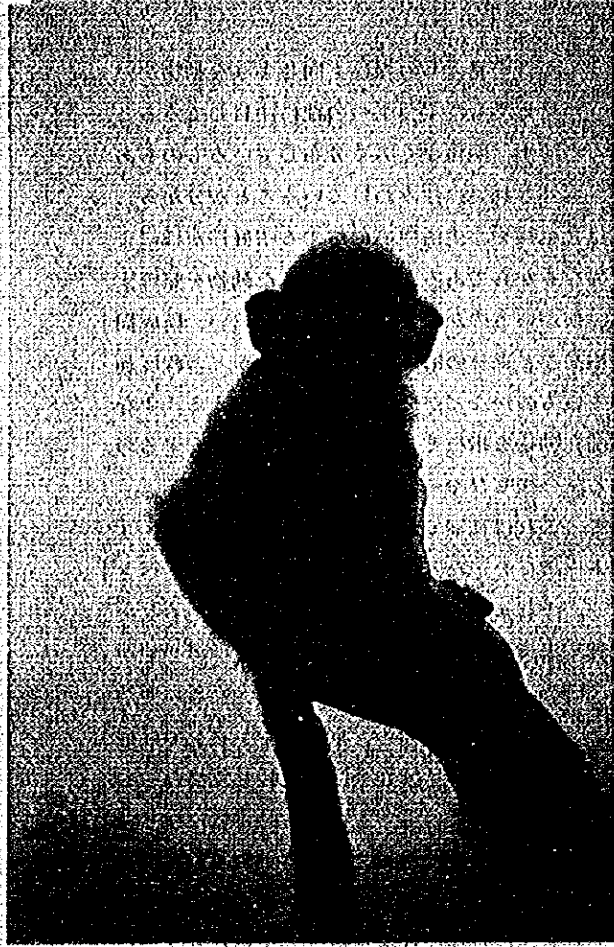
住みわけの研究

私が得た結果は、今後の造林や伐採において何か明確なヒントを与えてくれている気がする。いずれの場合でも、本来の自然に大きなダメージを与えないで行える面積を考えることができそうだという事。同じ面積なら小さく分けて分散させること。森林を孤立させることなく、たとえ狭いものであっても回廊のような森でつないでおくこと。経済的には効率が悪いが、やれないことではなさそうだ。

もう一つ。一見、どの森にも同じような動物がいるように見えても、一つ一つの種に注目してみると、もちろん植生に関係なく広く分布しているものもあるが、案外きれいに住みわけていることが分かる。これは食べ物や、生活環境に対する嗜好性が種によって異なるからであろう。こういった動物を整理すれば、何がいるのかによって、植生の違い、構成樹種や樹高など森林の構造の違い、人為がどの程度加わっているのかなどが分かるような気がする。すなわち哺乳動物を指標として個々の森林を把握するのである。今後ぜひやってみたい仕事だ。

さて、これは私案であるが、今後もブキット・スバルト保護林を主たる研究地として位置づけるべきだろう。これまで継続した研究がなされているし、研究林・保護林として保障され開発や伐採の心配がない。研究・宿泊施設が完備している。交通の便が良いことなどが理由である。東カリマンタンでは最も良いとされるクタイ国立公園と比較した場合でも、森林の出来具合では劣るものの、熱帯低地林という特性に変わりなく、交通の便、宿泊施設などを考えると、このプロジェクトのみならず熱帯雨林を扱う上で、ここは重要な意味を持つと思われる。

動物では、生息する種類はおおよそ把握できたので、植生の違いと種類及び個体数との関連、森林の立体構造からくる住みわけ、個体数変動などに研究を拡大することはもちろんだが、気になっているこ



手の平に染る子ザル

どの1つに肉食動物の豊富さがある。

ヤマネコ、シヤウネコ、イタチなどに多様化がみられるのである。食うもの食われるもの頂点に立つ動物が多いということは、それらを支えるだけのものがあることにほがならないが、ネズミなど小動物を調べている限り、それほど底辺が大きいとは思えないのである。熱帯雨林の持つ未知なる部分を感じざるを得ない。

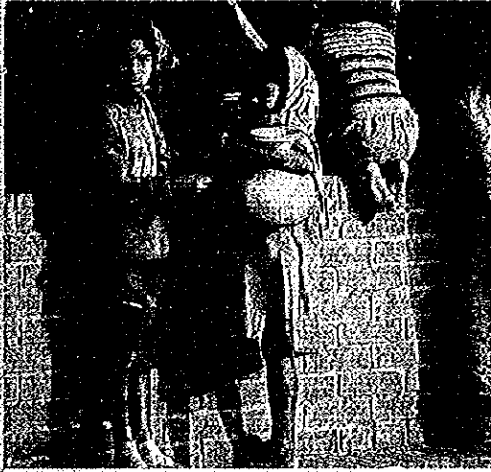
展開期に向けて

新しいものとしては、研究棟の一角に展示室を作るべきだと思う。動物・植物の標本のほか、写真・パネルの展示を行い、研究林内の観察路もあわせて活用することで、熱帯雨林を理解出来るような教育の場とするのである。学生、一般人を含め、これまで以上の利用が期待される。

このプロジェクトは熱帯林の再生が主題であるが、そのためには今ある見本林を一層充実させることも大切だと感じる。有用樹種であるフタバガキ科を主体として、山びき苗も積極的に導入すべきだろう。当然、そこでは鳥獣害・病虫害が発生する。しかし、それはインドネシア側の研究者を刺激し、問題意識を持たせることに通ずるだろうし、天然林の調査だけでは分かりにくい鳥獣害・病虫害の要因と防除対策を、よりの確に把握することが出来るだろう。

生活環境と子供たち





ストリート・チルドレンの実像

家庭と学校から離れて

● JICAジュニア専門員 川中 信

貧困と不平等

ストリート・チルドレンの急増は、開発途上国では貧困、不平等が原因となって、都市化とともに、農村からの人口移動や失業、家族の崩壊が急増した結果である。工業国では疎外と意識的な排除が原因と考えられる。それを青少年非行、捨て子、児童虐待の問題であると、あたかも当事者たちに責任を押し付けるような表現はできない。むしろ社会の態度、政策を変える行動が必要である。

農村では生活は厳しく、農政、社会保障が不十分である。一方には、都市に対する期待や、都市偏重の発展や開発政策もある。この辺に悪循環の構造もありそうだ。しかし強調したいのは、中南米でいえばメキシコ、ブラジル、コロンビアといった中所得の国であり、アジアではカルカッタ、マニラなど都市化がすすんでいるところに典型的に見られる都市的な現象で、単なる貧困問題というよりも、都市の犠牲者としてしか考えられないのである。それは「近代化」や「開発」からの一部の落伍者と決めつけられるほど少数者でも決してない。

児童労働としてみれば、ILOの推定で世界の15歳以下の子供の7%が働いており、アジア、中南米、アフリカを地域ごとにみると、総労働力の1割から2割を占める。しかもブラジルでは19歳未満の6,300万人のうち、約半分が街頭でなくとも「極度の収奪

状態」にあるという。

アジア各国から

フィリピンのマニラ首都圏だけで5万人から7万人がストリート・チルドレンで、このうち3,000人が性的に搾取されている。

タイでは、ストリート・チルドレンとの路上での売買に対する政府の厳しい罰金や寺院が身よりのない子どもに寝場所と教育を提供するために、一時よりは目立たなくなった。しかし、廃品回収や夜の飲食店で働いたり、路上生活する子どもが減ったわけではない。児童売春もマニラと同様に多数いるが、売春宿に閉じ込められている。

インドにはアジア最多のストリート・チルドレンがいるが、その人数の推定すら困難とされている。大半が廃品回収をしているようだが、その貧しさは厳しい。カースト制度のために、他の国でのように、物を売ったりすらできないという。

ベトナムでは米軍兵士との混血児数千人が母親からも捨てられ、ラオスでは屋台や小物売りに、バングラデシュの首都ダッカでは力車引き、荷役などにストリート・チルドレンが見られる。

ここで、他の国に比べれば、都市もそれほど大きくなく、ストリート・チルドレンの数もそれほど多くないが、ネパールを例に見てみたい。

ネパールの場合

ガウリ君はネパールで最初の児童労働の調査を始めた28歳の青年。彼はグループで、ストリート・チルドレンの他に、カーペット工場やレストランで働いたり、ゴミ拾い・靴みがきをしている子どもたちの実態を調べた。政府はこうした子供の問題について発言していない。

詳しい統計はないが、81年の国勢調査によれば、10～14歳の子どもの57%が働いているという。家族の雑仕事を手伝う子、小作として地主の畑や家で召使のように働かされる子も珍しくない。ある児童労働の定義にしたがって、親の仕事を目に2時間以上手伝っている子もふくめれば、10歳以下の子もたくさん働いていることになる。

やぎや水牛の世話、弟妹の世話、たきぎ集めや水汲みなどの家事の時間は女の子の場合、5～9歳で3時間、10～14歳で7時間という調査もある。

ストリート・チルドレンは、そうした農村・山村の児童労働の延長と見られないこともない。

カトマンズの場合は比較的、周辺の郡からの子どもたちが多し。友だちが誘いあって家にだまって村から出てきている。まったくの孤児である例はまれで、別居、死別などで片親もしくは継父母にいじめられたりという家庭崩壊を、家出や働かざるをえない理由にあげる子が3～4人に1人はいる。また昔



ネパール・カトマンズにて

から清掃などを職にするガイストがあるが、それ以外に近年になって廃品回収をする人が増えつつある。

安い労働力

子供たちがほぼ全員言うのは、家族が食べるにも小さな土地しかないか、もしくはまったく土地が無いという村での貧しさ。最後の小さな可能性に生存をかけて町へ出てきて、膨張する都市の悲惨さのみごまれていく人口が増えているのである。不平等が新しい貧困層を拡大しているとも言えよう。

そうした事情の子どもたちが、今度は街で、荷車を押したり、数10キロの荷物をかついだり、ごみを拾って業者に売ったり、カーペット工場やレストランで、雇主の言いなりになる「安い労働力」として搾取されている。

カトマンズだけでも、ごみ拾いをしている子ども

たちは300人とみられる。そのうちの34人に聞いたところ、約6割が親から離れて子どもたちだけで暮している。また文字通りの路上、またはヒンズー教寺院などに寝泊りする子も200人はいると見られている。農村やカーペット工場で働く女の子には、だまされてインドの売春宿に売られる例があとをたない。その数は数万人とも推定され、新聞にも時々団境で密売人が逮捕される例が載る。

コロンビア、ブラジルの場合

次はストリート・チルドレンが多い2カ国から、コロンビアの民間団体(N.G.O)の取り組みと、ブラジルからは行政の取り組みを紹介して、課題がどこにあるのかを見てみたい。

コロンビアの青少年カウンセリング財団は、81年以來900人の相談に関わっている。プログラムは時間数ではなく、一人ひとりの成長にあわせた、ゆっくりにしたペースで、「相談員との接触」「自己発見」「社会化」の3段階を通る。「社会化」からは居住形式で、リーダーシップ・トレーニングを経て、農村での「ラ・フロリダ少年町」、自治組織や成文憲法をもつ「ロスマチャ・チョス(少年)共和国」、工場の「インダストリアス(工業)ボスコニア」という3つのプロセスを持つ。人間的なふれあいを基礎に、人生の目標としての「幸せ」、一人ひとりの成長、街での生活がもつ良い面の価値を生かし、小グループによる音楽や演

劇などの活動を多く取り入れるといった特徴を、実現している。

自信と意欲

ストリート・チルドレンに関わるのは、民間による小規模な取り組みだけには限られない。ブラジル政府はまず民間の経験から学ぶために、75の都市や町での現地調査によって、多様なプロジェクトを5つの「予防的」モデルにまとめた。それを具体的に活用するために、町の人が毎日の活動で何をするのかまで整理した。さらに約300の都市や町周辺のコミュニティで行政官、宗教者、教育者、子どもたちが参加して会議を開き、ほとんどの場合に具体的なプロジェクトが生まれた。失敗した例はほとんどなく、あきらめと無力感が、自信と技能への意欲に変わったという。

また特定のカリスマ的な個人の主導や政府の線香花火的なプロジェクトにならないように、法的な傘としての全国子供福祉機関と地域委員会も設けた。一番重要なことは、政府が、経験ある民間団体と一緒に仕事することがプログラムにとっても最大の利益になると積極的に認めていることであろう。補助金もイデオロギー的に締めつけるためではなく、民間が実務的に市民からの信頼に応えられるために使い、あまり国に近いとみられることがプロジェクトの可能性を矮小化しないようにも配慮しているので

ある。

いま何が必要とされているのか

この種の報告では、書き手も読者も無力感にとらわれがちだが、国際人道問題独立委員会報告の勧告は21項目にもおよぶ具体的なものである。ここではその一部を紹介したい。ネパールや南米からの報告と照らしあわせてみられないだろうか。

- 政府が問題を認め、分析結果を公開する。
- 施設に押し込めるのではなく、働かざるを得ない子どもの現実のニーズに即した、主体性をのばすプログラムを中心とする。
- 片親の家庭や慢性的な失業家庭など、崩壊しやすい家庭の人間的な側面に対応する。
- 予防と更生は地域の自助組織や住民で行なう。
- 警察や司法当局ではなく、行政の社会福祉や人権擁護機関に主導権を認める。
- 非行少年としての法的な抑圧を最大限しない。
- 民間による取り組みを認知する法的枠組の整備。
- 民間と地域行政の連携の促進と、保護や相談にあたる人の存在を認める。
- 国の政策の枠組と実施能力を明確に定める。
- 靴みがきなど仕事を法的に認めて、作業条件の改善や栄養、教育、娯楽の機会を提供する。
- 施設での児童虐待を防ぐ最低基準やモニター制度をつくらったり、職員資格基準を厳しくする。子

子どもを大人と一緒に留置しない。

- 子どもの権利を守る統括的な政府機関を作り、警察や施設の職員の行動をたずねる権限を与える。
- 親と教師の接触を増やし、学校にやる余裕のない家庭のニーズや期待に沿った柔軟な教育課程を用意する。
- 街頭で子どもと接触する教育者の資格と雇用を保障する。
- 福祉・医療従事者、法の執行者の職業訓練を、ストリート・チルドレンの人間の尊厳を、具体的な業務上の問題として考慮したものにする。
- 研究・報道機関との建設的な協力。
- 人間的な都市計画、中でも街頭を子どもたちが遊んだり、娯楽、踊り、音楽、演劇をできる場にして、街路の社会的役割を復権させる。

考えるきっかけ

私のストリート・チルドレンとの出会いは、今にして思えば、日本テレビの国際障害者年のドキュメンタリー「パニンとジツジ」だった。タイがらは片腕が不自由な街の花売りの女の子の話。彼女の家族を助けて働く様子、生活の厳しき、家庭の崩壊寸前の状態などが、大要ていねいな翻訳の字幕を使い、肉声はそのままだったので、見る者にきちんと伝わって来るものがあった。音楽はポップ・マリヤのレゲエで、南からのメッセージを強烈に訴えかけていた。

ストリート・チルドレンは絶対的に悲惨なだけの存在というわけではない。また、逆境の子どもがことさら明るく振る舞ったり、スラムで外国からの訪問者に愛想よく笑顔を向けてくれたからといって人情話の主人公にしたてていくのもおかしい。反対に物ごいや何か買ってくれとつきまとわれたからといって態度を変えないで欲しい。

私が、いま思うのは、自分自身が現場にいても、その子と話が直接できて、その子のことを一体どれだけわかっているのか、実感できているのかという疑問である。そもそも自分が、日本の子どもたちの問題に一体どれだけの理解があるのかすら疑わしい。その点で、私の場合、日本の子どもたちの現状を知っていくことから、状況は全く違うのだが、ストリート・チルドレンや働く子どもたちの問題の根っこを考えるきっかけになったのである。

ストリート・チルドレンの問題も実は、世界に3千万人なのか1億人いるのか、といった退屈な話からは何もわからないはずである。その子たちがどれくらい家に帰るのか、すべて自分たちで生活の糧を探しているのか、街頭で暴力・売春・麻薬に巻き込まれているのか、道で寝ているのか、橋の下なのか、警官にどんな乱暴をされているのか、どんな仕事で食べているのか、学校にはなぜ行かないのか。そういう一つひとつのケースを自分の問題として見ていなくてはならないと思うのである。

1989年9月号

子どもたちのために
懸命に生きる



小児医療の向上を

●立山恭子（愛知国際病院総婦長）

「澄んだ瞳、うつろな瞳」

一様にキラキラ輝く澄んだ瞳の子どもたちは、人なつっこく親しみやすく出会う人々をホッとさせる。長い夏休みの夜遅くまで街灯の下でサッカーに打ち興じる子どもたちは健康そのものである。

しかし一歩脱水症対策センターに入ると、そこでは焦点の定まらないうつろな瞳の乳幼児の姿に直面しなければならない。

活発な学童たちそして全く同じ時間帯に農作業に働んでいる同年齢の子どもたちの姿がナイル川の河岸の農地に見られる。子どもたち全員が昼間は学校にいるといった時代になるにはあと少しの時が必要のようだ。大都会カイロでは学校と先生不足のため、2部3部授業が行われている。

小児保健の水準はその国の文化のバロメーターとも言われるが、その中でも乳児死亡率が近年著しく改善され、1980年はじめの90人/1000人が1986年には44人/1000人に減少した。全死亡の半分は5歳以内に発生し、中でも3歳以内がそのほとんどを占めている。

途上国ではヒトは母の胎内にいる時から多くのリスクと直面しなければならない。妊娠中に必要なバ

ランスのとれた食事を摂ること、特に動物性たんぱく質を若い主婦や子どもたちが十分に摂ることは難しい。最近の物価高は激しく肉の価格はこの5年間で4～5倍になっている。

妊婦は妊娠後期になると、貧血症状を示す人が多くなり、妊娠中毒症の出現も多くみられる。その結果、新生児に多くの影響が及ぼされ、また母親の母乳の分泌が十分でなく人工乳を与えねばならなかったり、疲労のために新生児の世話が十分に出来なかったりする。

子どもの2大死亡原因

このたんぱく質不足は特に乳児期の病原菌への抵抗力低下へとつながり、低年齢の子どもたちの健康を損う源となる。

熱く渴く5月から9月には消化器感染症、下痢による脱水症で死亡する例が多く、特に8月に集中する。冬期にはかぜから肺炎をおこし死亡というのが子どもの2大死因となっている。

しかしこれらの病気は母親を主なキーパーソンとしておとなの知恵を出し合うことによって多くは予防できる病気なのである。その知恵の源を開発するプロジェクトが草の根レベルで、そして公的なレベルで動き出した。今後如何にしてそれらのプロジェクトを支援し、多くの母親や若い女性たちが参加していくかという問題が残されている。



エジプト・カイロ大学小児病院

「教育活動の場」が、子どもと女性へ教育の浸透を促すことになり、

子どもと女性への教育の浸透そして彼らの積極的な教育活動への参加によって現在社会的問題となっている健康、教育、住居、労働等の問題に関して社会は徐々に変化をもたらしてくるであろう。幸いエ

ジプトには華麗な古代文明を恵み、育んだ偉大な「ナイル」が健在である。

「全人格をぶつけて

小児保健の向上を目的に1983年3月に近代的設備と共に開院したカイロ大学新小児病院は日本の無償資金協力で建設された。この小児病院へは全国から病気の子どもたちが来院し、入院治療をうけている。もともと診療教育活動が活発なところへ日本の技術協力が入ったことにより一層の活力が加わったといっている。

小児医療の向上を目的にエジプトで最も不足している看護、医療施設設備、医療機器技術の基盤固めを日々行ない、数回の看護・医学セミナーを開いた。過去5カ年にプロジェクトを通じて交流した医療関係者両国合わせて百数十人、第三国まで入れると数千人に及んでいる。

協力活動の成果は医療協力ではそんなに早く目に見えるように、例えば工場での月生産が倍増したというふうには出てこない。今までと比べ死亡退院の数がぐっと減少したということは、全医療スタッフの努力であり、医療技術の向上と言えるのであろう。

個々の派遣専門家が全人格をぶつけて行った技術協力が、どのような成果につながるかは今後の問題であり、公的な協力期間が終了したあと個人レベルでの交流がどのくらい続くかで、協力の真の価値が

出てくるのではなからうか。

「耐えることを知る子どもたち」

仕事上病気のこどもとのつきあいの方が多かったが、年長児が突によく幼児をなぐさめ、遊び相手になっていることが印象的であった。また腹水が溜まり相当息苦しそうな状態であるのに「うんちょっとつらい」というように我慢強いことであった。ひよっとするとおとなより耐えることを知っている。

一方、自分でケアをしなければならない人工肛門を使った女の子は、看護専門家からその手当ての方法を手際よく習い、他の同じ問題をもった友人に、母親たちに、そして時には新人の看護婦たちに、専門家の通訳兼助手で教えていた。その彼女が11歳とは思えなかった。

しかし、農村の11歳の女の子はもう日常的に主婦代わりを務めているのである。学校教育が進み、充実してくる程に、子どもたちの自然に身につけていた生活技術能力は欠落していつてしまう。途上国のこどもたちにこの貴重な生活技術を残しつつ、自分たちの健康は自分たちで守り、健康面への知識と技術を伝え、彼ら自身でとらえていくことが、将来に備えて最も必要なことであると思われてならない。

子どもたちが生き生きと過ごせる場

●篠 由美子 (元青年海外協力隊員)

湖の中の小さな島に

「アーコボーン」朝8時前、小さな手を胸の前で合わせて挨拶しながら、子どもたちがスリシナラタナ幼稚園へやって来る。ここはスリランカで最も大きい都市コロンボ。

その市内にあるベイレ湖(池)の中の小さな島に幼稚園は建っている。といっても園舎は床と柱と屋根があるだけ。雨、風よけに片側にビニールクロスがはってある。3、4、5歳児のクラスが各々1つずつ、全部で約80名の小さな幼稚園である。

家には電気も水道もない子どもから、会社の課長クラスの家の子どもまでかなり幅広い層の子どもがいた。

トイレや手洗いの衛生指導といっても、家にトイレの無い子どもも多く難しい。保健所に協力してもらい、親の衛生指導から始めたものだ。お寺が経営していることもあり、シンハリ人の子どもが最も多いが、モスリム、タミール人の子どもも8~10人位いた。

登園した子どもたちは裸足になって思い思いに遊びだす。ヤカゲームと称した鬼ごっこ(ヤカは悪霊)、スリランカのハンカチ(小枝)落とし、ココナッツの



スリランカ・コロンボ

般をシャベル代わりにしての砂遊び、クリケット。日本のフォークダンスも大好きだ。

コロンボ市内のこともあり、栄養状態が悪く動けないという子どもはめったにいないが、子どもたちは外で活発に遊ばず家の中にいることが多い。暑いこともあり運動はあまり大切にされていないようだ。

【鼠退治も仕事の1つ】

こんな子どもたちと共に私は2年間、園長として過ごした。実際の仕事は先生たちへの給料渡しから経営、僧侶との交渉(これが難題!)、メインの仕事の保育、先生たちへの指導、プログラム作り、ペン

キぬりから鼠退治とありとあらゆるものであった。

市販の糊が高いため、小麦粉で作った糊を使うと鼠がその作品を食べてしまう。殺生を嫌う国では鼠退治は私の仕事だった。

コロンボ市内にはモンテッソーリと呼ばれるキリスト教系幼稚園や私立学校附属プレスクールがある。そこでは主に室内での教具を使っただけの遊び、字や英語の指導、製作や歌謡指導等が行われている。子どもが自由に遊んだり運動をする保育はあまり見られない。また、ここに入れるのはある程度の層の子どもである。

地方に行けばサルボグヤがやっている保育所や個人が小さな部屋に子どもを集め、細々とやっている家庭内保育所のようなものがある。

【大事なことは教師の養成】

そんな現状の中で、私がこの幼稚園で一番重きを置いたのは、子どもたち一人ひとりが生き生きと過ごせる場としての幼稚園作りであり、それを作っていく教師たちの養成であった。少々過保護気味ではあるが、愛情深く育った子どもたちは楽しい物、興味のある物を提示すれば素直に反応する。身体表現、絵など日本の子どもにはないおもしろいものがたくさんあった。

しかし、教師たちにそんな子どもの個性や自発性を伸ばしていこうとする考え方も技術も不足であっ

たと思う。自分でやろうとする意欲がもう一つ見られなかったり、ある種のあきらめが感じられる大人が多い中で(今までの社会の問題だと思うが)、未来を作っていくこの子どもたちには自分で考え、主体的に生きていく力を身につけてほしかったし、そのためにまずは先生たちにその力をつけてもらう事だった。

当初は、「私にはできない」「やっつて」という消極的言葉がずいぶん聞かれたが、毎日あるミーティングの中で全員が発言したり、クラスごとのプログラムを自分たちで作ったり、週のチームを交代でする中で教師たちは主体的に動くおもしろさを感じ、意欲的になっていった。

実際に勉強する場が少ない教師たちは、「製作も、運動も、歌も」もっと知りたかった。技術の体得がさらに意欲を高めたと思う。

私もこれからの先生方の参考にと、年間プログラム、クラブのテキストなど不十分ながら作り、置いてきた。今も幼稚園で子どもたちは生き生きと活動しているだろうか。

社会の影響を受ける子どもたち

スリランカでは国民の約70%が仏教徒で、宗教は実生活・精神生活の基盤となっている。昔はお寺が教育の中心であったが、現在は日曜学校、塾が盛ん

に行われている。良い学校を出ないと良い仕事がない。それどころか仕事がないという実状では、親は教育熱心にならざるをえない。

しかし、一方ではほとんど学校へ行っていないスラムの子、兄弟の子守りをするためや母親が外国へ出稼ぎに行っていて、家事全部をまかされているため学校に行けない子、大変貧しく5～6歳の頃からサポーターとして金持ちの家で働いている子もいる。

大学まで授業料は無料、識字率80%のスリランカでも文房具が買えない、制服が作れない、バス代がないという理由で学校に行けなかったり、途中で辞めてしまう子も多い。

子どもは社会の影響をもろに受けて生きている。民族抗争による北からの避難民が同じ島内に住み出し、一時は800人を超えた。その子どもたちのために午後に保育をしたり、人形劇を見せたりしたが、子どもも親も飢えた様に関わってくる。

どんなに文化的なものを必要としているのかを感じ、胸の痛む思いであった。長い間学校へも行かず、そういう生活を続けていると子どもがどんどんずさんでくる。また私の送別会でお別れの言葉を言ってくれた父兄もこの抗争の関係で殺されたと聞く。その子どもはどうしているだろうが。スリランカが平和になって子どもたちが子どもらしい充実した生活が送れるように心がけたい。

人間のぬくもりを伝えあえたら

● 関口久子 (幼い難民を考える会会員)

四方を囲む有利鉄線

ここタイ・カンボジア国境のカンボジア難民収容所(カオイダンキャンプ)は、竹の家の立て込んでいることを除けば、一見普通の南国の田舎風景に映る。家の庭、脇道は花や熱帯の果物バナナ、パパイヤ、サトウキビなどが緑濃く茂っている。木々も枝を伸ばし、もうずっと昔から、ここでの生活が営まれ、これからも続いていくかのように錯覚してしまう。というのも一時と思われていたキャンプの生活が、はや10年の歳月を経過した結果の、落ち着き、整然なのだ。

有利鉄線で四方を囲まれた狭い難民キャンプから人々は外に出られず、ひしめき合った近隣の家や、限られた空間から起こる問題も少なくない。自分たちの明日はわからず、長い歳月をこの難民キャンプで過ごしてきた人々の不安や焦躁感は、慢性化していて深い。

第三国行きを希望し何度も面接を受けたが、他の国に受け入れられない人がカオイダンキャンプに現在10,723名(1989年6月末調べ)住んでいる。

「今日はおやつがあるの？」

このカオイダン難民キャンプで、幼い難民を考える会は「保育センター希望の家」を運営している。2つの保育園と保育者養成、織物、洋裁、木工の技術訓練と識字教室を行っている。カンボジアの伝統的な方法を重視し、以前に経験のある人から若い人、未経験の人へと継承伝達する形をとっている。

保育園に通園している子ども、保育者、木工、織物、洋裁で働いている父母や近所の人、また、これらの技術を習いに来ている人たちが昼休みで家に帰った後、竹材とニッパヤシの葉で作られた家の軒下でこのキャンプで働く日本人とタイ人スタッフで昼食をとる。すると早くも子どもたちが、門の前に三々五々集まってくる。そして、「今日はおやつ（バナナ）があるの？」

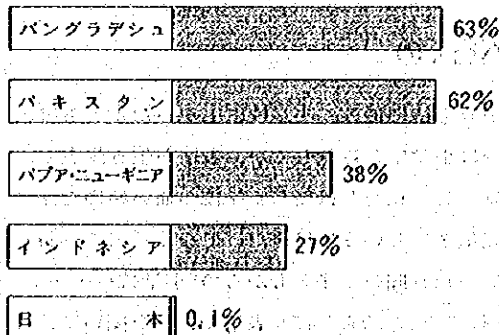
「お昼はもう食べたよ。」
「お父さん（希望の家で働いている）は昼寝しているけど僕はもうきたよ」
と矢継ぎばやに話しかけてくる。また、ある子はジーンズと何もいわずに見つめている。

日警のおばさんは「まだ食事の最中だから、もうちまっと待っててね。静かにしていなさい」と言い、注意をするが、子どもたちはお構いなし。なお一層声を張り上げ、名前を連呼したり話しかけてくる。



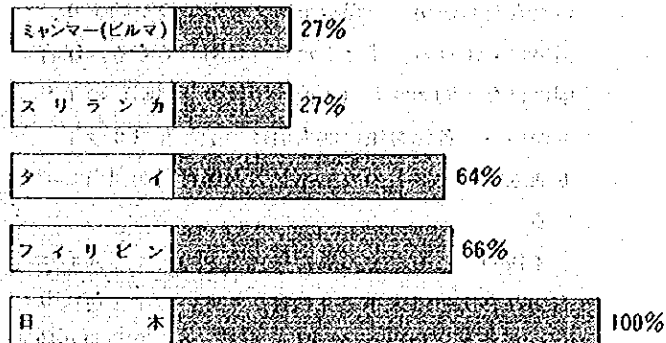
子どもたちの“戦い”

●5歳以下の子どもの2度の栄養失調



*2度の栄養失調=平均体重の60~85%の状態

●小学校を最終学年まで修了する率



同じ頃、この保育センターの前を小学校へ行く子どもたちがノート(黒板)がわりに板切れとチョークをいれたバックを肩にかけ、飲み水の瓶を持ち、通る。焼けつく赤土の地面の上を約半数の子どもは素足で歩いていく。みんなこの保育園に通園していた子どもたちで顔なじみだ。

学校へ行くの

その中でも特に最近、小学校に上がった子どもは、もう自分は小学生と自覚してか、表情が生き生きと輝いて見える。私たちは新しく学校へ通い始めた子には「元気?」という掛け声だけでなく、「どこへ行くの?」と毎日聞いて子どもからの「小学校へ……」「学校へ行くの」と誇らしげな表情や答えを聞いて、保育園を巣立っていった子どもたちが、小学校へ行って楽しく過ごしていることを喜び合う。

小学生の通学が間遠くなる頃、昼休みで帰宅していた人たちが戻り、保育センターの午後が始まり、活気にあふれる。子どもたちも登園してくる。保育園には今、約300名(午前、午後の2部制)の子どもがいる。各保育室は20人前後の子ども(2歳半~6歳未満)を2名のカンボジア人保育者が担当している。

午後の子どもがそろった保育室をのぞくと人形に布切れをかけて大事そうに寝かせている子、色塗りした糸巻き虫に紐を通している子、カードの同じ絵

を組み合わせている子、連れてきた赤ちゃんが横から手を出すのを根気強くあやしたり、別の遊びを与え、時々赤ちゃんの様子を見る子。カンボジアの子どもたちは幼い子でももっと小さい弟妹の面倒をよく見る。実に「間」よく巧みに世人口近くにはゴザを敷いた上で、キャッサバ芋の葉茎の弾力を利用しパーマ屋さんが始まった。髪を茎に巻付け止める。30分から1時間程して茎をはすとパーマのできあがり。

| 遊びの中からの発見

同じゴザの上で庭の花壇から採ってきた紅い花でマニキュアと口紅の化粧をし、竹の柱にかかった鏡をのぞき込んで覗きに入る子、この使いかすの花をバケツに集めたら、少し残っていた水とまじり、色水ができ、偶然の発見に狂喜し、熱中する子、いろいろな遊びが始まり展開されている。

これらの教材遊具は、子どもの身体、手の寸法と合うか目の前の子どもの使い勝手を見ながら、試作、補整される。キャンプで生まれ、限られた場所、空間で育つ子どもたちの当たり前前の普通な生活経験が乏しくならないように捕い、洋裁や織物、木工に参加している母親や父親の手作りによるものだ。使う人と作る人の呼吸、喜びがじかに伝わり合い、大人の励みになっている。

難民キャンプの限られた生活の中でも、父母、保

存者から、また子どもから大人へ“人間のぬくもり”
(愛惜の体験)を伝え合えたら、この“ぬくもり”を
いつも感じられたら、目の前の子どもたちは逆境の
経験をも生かし、よりしなやかな強さを備えた人に
育っていこう。

（1989年9月9日）

（1989年9月9日）

【原稿(1989年9月9日)】

（1989年9月9日）

（1989年9月9日）



途上国の主食

所変わればさまさま



ベドウィンの食事

●国立民族学博物館教授

片倉もとこ

●コーヒーとパンの香り

ベドウィンの生活は朝が早いですね。夜が明けると少し前に起きて、まず、朝の祈り。それから、男たちはコーヒーを入れること、女たちは主食であるパンを焼くことから、1日の仕事が始まります。

コーヒーはまずアラビアコーヒー豆を炒りすぎないように、しかし香ばしく炒り、少しさましてからすりこぎ状のもので豆をくだきます。アラビアコーヒー専用の独特の形をしたポット、ダッラに湯を沸騰させ、その中にくだいた豆を入れ、再び火にかけます。こうしていい香りが漂っている傍らで、女たちは小麦粉を練り、アンパンぐらいの大きさの塊を作ります。これを直径30cmほどの薄い円盤状に、両手で左右から叩き、回転させながらのばしていくのですが、これがなかなか難しい。私も試してみましたが、穴があいたりしてうまくいかないんですね。この円盤状のものを、中華鍋をちょうど裏返したような形の鍋に、そのカーブに合わせてのせ、焼き上げます。

できあがったパンはやわらかい部分が全くなく、かたいパン皮が2枚重なったようになっています。最近、町では西歐的なパンも売っていますが、ベド

ワインたちは中のやわらかな部分はちぎり捨て、まわりの皮だけ食べる人が多いですね。

材料である小麦粉は街の店で買ってくることもあるし、砂漠のベドウィンはわずかな土地に小麦を植えていますので、それを定着民の製粉工場で製粉してもらうこともあります。もともと、「水やりは神様をお願いした」天水農業ですから、それほど収穫があるというわけではありませんけれどね。

●朝食がいちばんのごちそう

さて、朝のパン焼きでいちどに1日分のパンを作ってしまうのですが、朝の食卓には焼きたてのパンが出てきます。パン、コーヒーにチーズやヨーグルトのような乳製品、そしてデザート、なつめやしの実のことですが、これらが朝食の基本的なメニューで、1年中、ほとんど変わりません。

昼食は1日の食事の中で主となるものです。朝食のメニューに、オクラやクーサ（うりの一種）など、その時々にある野菜をトマトで煮込んだ料理がつけます。お客があれば、お米を羊の油脂、サムナで炊き上げたものができます。お米はずいぶん昔から食べられているのですが、自生のものはないため、米客用など、どちらかといえばぜいたく品という感じですよ。中東ではイラン北部とエジプトで米が作られています。湾岸諸国では少しバサバサしたイラン米が、それ以外のアラビア半島の諸国では日本米に似たユ



シフト米が好まれるという傾向にわかれています。

ベドウィンは基本的には菜食中心です。羊の肉が出るのは、よほどの米客が、祭りや結婚式の時ぐらいですね。家畜の羊をどんどん食べてしまったら、日常欠かせないミルクや乳製品の元を失ってしまうことになりまして、商品としての羊は大切にしなければならぬのです。

そして夕食ですが、これは狂食の残りで簡単にすませたり、食べない人もいるぐらいです。「狂食のあとには休みなさい。夕食のあとには散歩しなさい」というアラビアの諺があります。このことは通り、狂食のあとは2～3時間睡眠をとります。そして夕食後に歩くということは、消化をよくするという意味で、寝る前にはあまり食べない方がいいと考えら

れています。夕食に米客があった場合は、もちろん簡単にすませるわけにはいきませんが、シリーグというごはんをミルクで炊いたものを出すのが習わしとなっています。これは白いおかゆのようなもので、この上に辛かたりの肉をのせますが、消化にいいようです。

●食事は家族揃って

ベドウィンの人たちは食事を共にすることをとても大切にします。1人でもお客があれば、一族郎党が集まってごちそうをふるまうのです。食事を共にすることが、客への敬意と歓迎を示すことになるからです。日常生活においても、よほどのことがない限り、食事は家族揃って食べます。

ナツメヤシの葉で編んだ直径1mほどのマット、トラピーザが食卓です。普段は壁にさげたり、テントの上のせておいたトラピーザを、さあ食事となると広げて、大皿に盛った食事をドンと中央に置きます。人々はマットの周囲に車座となり、大皿から直接手でとって食事をします。左手は不浄の手なので、右手だけを使います。しかし、私など不慣れなうちは、無意識に左手が食物の近くにいたりして、パチンと左手を叩かれ、注意されたものです。

●小さな変化

伝統的なライフスタイルを守るベドウィンといえども、新しい時代の変化は少しずつ、しのびよってきています。食物にしてもそうです。チョコレート

やジュースなどが入ってきました。また、逆に姿を消していくものもあります。らくだの乳は、家畜の乳の中でもいちばん上等なものとしていますが、最近、自動車を使うようになってかららくだを運搬用にご利用することが減ってきました。その結果、らくだの乳を飲む機会も減ってきました。

このように多少の変化は日につきます。しかし、食事の基本的なスタイルは変わりありません。ただ、かんづめやジュースが入ってきて、その空きかんや空きびんが投げ捨てられ、沙漠がずいぶんきたくなりました。行くたびに沙漠がよごれていくのを見ると、とても残念に思いますね。(談)
〈文責＝編集部〉

パプアニューギニア低地の 村落における食事

●東京大学医学部助教授

大塚柳太郎

●穀類を含まない根菜類中心の主食

パプアニューギニアの人びとの伝統的な主食は、地域によって異なるものの、タロ、ヤム、サツマイモ、バナナ、サゴデンプンのいずれか、あるいはそれらを組合わせたものである。簡単に整理すると、人口が比較的稠密な高地地方にはサツマイモ依存型、大河川沿いの低地帯にはサゴデンプン依存型が多く、その他の地域ではタロ、ヤムまたはバナナに依存する傾向が強い。このような彼らの主食にみられる基本的な特徴は、東南アジア起源と考えられる穀類を

含まない根莖類中心の農耕文化に立脚していることである。一方、動物性食物としては、有袋類やイノシシに代表される野生動物、魚介類、飼育されるイノシシなどがあげられるが、摂取量の少ない地域が多い。

私が調査してきたギアラ族は、西部州の州都ダルー（人口約7,000の小さな島）の対岸から内陸に広がる約4,000km²の低地に居住している。彼らの主食は、半野生のサゴヤシから得られるサゴデンプンと、焼畑作物のバナナ（ほとんどが料理バナナ）、タロ、ヤムである。もっとも重要なサゴデンプンは、湿地に生育し、10～15年で成熟し、樹高10～15mにもなるサゴヤシ（ヤシ科、メトロキシロン属）から得られる。収穫の際には、男が幹（直径50～70cm）を倒し外皮を剥した後、女が固くつまった軸を手拵で叩き、それを両手で揉むように水洗いしてデンプンを流し出す。1本の幹から得られるデンプンの量は平均して60kg以上にもなる。収穫時には集中的な労働が要求されるが、それ以外に必要な作業がほとんどないため、総労働時間あたりの食物エネルギーの獲得量で比較すると、焼畑耕作より効率がよい。病虫害や異常気候の影響を蒙りにくいこともサゴヤシ利用の長所である。その最大の短所は、サゴデンプンが純粋なデンプンにちかく、他の栄養素をほとんど含まないことである。たとえば、エネルギー100kcalあたりのタンパク質含有量は約0.2gであり、約1.2g



パプアニューギニアの市場

のイモ類、1.6gのコメ、3.0gの小麥粉より極端に少ない。しかし、この地域はパプアニューギニアにはめずらしく、森林帯だけでなくサバンナも発達し、ワラビー(カンガルーに近縁な有袋類)、イノシシ、ヒクイドリ(ダチョウのような走鳥)などが多く生息している。ギデラ族の人口密度が約0.5人/km²と低いこともあり、彼らは弓矢猟でこれらの動物を大量に捕獲すると同時に、海岸や川沿いの村落では魚、エビ、貝なども多く獲得している。

●簡単な食事

ギデラ族の伝統的な調理法は焼くことで、土器をもたない彼らの社会では煮る料理は発達しなかった。サゴテンブンはトウの葉で包み、イモ類やバナナはそのまま焼かれる。手がこんでいるのは、大型動物が入手されたときに行われる一種の蒸し焼き料理だ

けである。彼らの食事時刻はそれほど一定していない。多くの場合、早朝から9時頃までに1回、夕暮れから8時頃までに1回、食事が摂られる。この間にも、主食となる食物を少なくとも1回は摂るのがふつうであるが、「つまみ喰い」を含めると数回に及ぶこともある。

エネルギーやタンパク質などの主要栄養素にかんする限り、ギデラ族の摂取量が不足しているとはいえない。しかし、彼らのメニューは貧弱である。私たちが、1981年に4村落で各6～8世帯を対象に2週間の食物摂取調査を行ったときも、1村落で摂取されたすべての食物の種類数はわずか30～50であった。各世帯の食事1回あたりにすると、2～4種類にしかならない。すなわち、「サゴデンプンとウラビーの肉」、「タロとバナナと魚」、「タロとココヤシとパパイヤと野生の果実」といった具合である。

●米、小麦の普及で変化する生活

ギデラ族の社会もバブアニューギニアの多くの社会と同様、食生活は近年急速に変化している。ギデラ族に起こっている顕著な変化は、彼ら自身の食物（サゴデンプン、焼畑作物、ココヤシ、肉、魚介類など）をグルーまで運びローカルマーケットで売り、その収益でコメ、小麦粉、魚の缶詰などを購入する機会が増加したことである。この過程で、コメなどを調理するために鍋類の導入、さらには煮る料理の普及にともなう食塩の購入なども起こっている。た

たとえば、内陸の1村落の1971年と1981年の調査結果を比較すると、エネルギー摂取量に占めるサゴデンプンの割合が約60%から50%以下へ低下し、その部分はコメや小麦粉によって充当された。また、グループに近い沿岸村落では1981年のエネルギー摂取量の約半分が購入食品に由来していたほどである。

このような食生活の変化によって、彼らの栄養状態は総合的にみて改善される可能性は高いが、多くの問題点もある。購入食品のほとんどすべてが輸入品であることにとくに問題があり、途上国としてのバブアニューギニアの食糧生産の将来という点から、大きな危険が内包されているように感じられる。

(1986年6月)



伝統に根ざした住居

民族の個性を反映する

風土にあった生活、 生活にあった住まい

●建築家 八木幸二

●普遍化できない住みやすい家

イギリスの童話「三匹の子ぶた」では、ワラの家よりも木の家、木の家よりもレンガの家のほうが丈夫で安全であり、努力を惜しんで粗末な家を造った者には災難が待っているということを教えているのであろう。しかし、イギリス人にうさぎ小屋と呼ばれた日本の家を考えてみると、レンガやコンクリートの家のうさぎは湿気とつめたさで神経痛を患い、芽ぶきで木の家に住むうさぎは仕合せに暮らしたとき、と言えるかも知れない。住まいを考えるには、その土地の風土や暮らし方をみななければならないことは当然と言える。しかし、近代的、技術万能的、国際的と称する思考の一部には、技術的に進んでいるものなら世界中どこでも通用すると思いついでいる面もある。パプアニューギニアの首都ポートモレスビーの郊外にコンクリートの箱がボツリボツリと置いてある新興住宅地がある。これは、ある国の援助で、コンクリート製のプレファブ住宅（単なる箱）を持ち込んだものである。貧しそうに見える椰子の葉ぶきの住まいの方がよほど快適らしく、コンクリートの上に椰子の葉をふいたり、ベランダを作ったり、

中にはコンクリート箱は物置きにして、横に自分で建てた小屋に住んでいる人たちもいる。

私たちのように定住思考の強い農耕民の末裔にとっては、ベドウィンのテントやモンゴルのバオのように移動できる家は粗末に感じられる。私は、JICAがOTCAと呼ばれていた頃、シリアに3年間派遣されて農村の計画に携わり、遊牧民の定住化政策による集落計画にも参加したが、ベドウィンたちは子供の教育とか商店などのアメニティーには興味を示すが、コンクリートやレンガの家自身にはあまり魅力を感じない。調査のためにテントに泊ってみると、夜寝ていても、テントを透して月の光が感じられ、天と地を肌で感じながら生活している雄大さは、確かにレンガの家では得られない。

●運びやすく、組み立てやすいバオ

先年、中国北部、ウルムチからトルファンの間でモンゴル族のバオを散見し、私の内に秘めた遊牧願望が急に目覚め、とまどう中国の案内者に弾薬してバオの散在する沙漠を徘徊した。中に、ちょうど移動してきたばかりで、バオを組み立てている最中があり、オバさんたちが1時間ほどで組み立てるのには驚いた。遊牧民にとっては動物の世話と安全確保が最大の仕事であるから、男たちは移動してくるとまず動物を近くの草場へ連れて行き、家づくりは既して女の仕事とされている。

女性数人で組み立てることのできるバオは、実に運びやすく組み立てやすく工夫してある。だわめやすい楊の木で作った骨組みは、最近のガレージ扉のように伸縮自由の斜め格子になっていて、4組～6組を連続すると直径4～5mぐらいのカゴのような囲いができる。屋根も楊の木で骨組みを架け、羊の毛で作ったフェルトで周囲と屋根を覆う。屋根の頂部には煙り出しの丸い穴があり、雨の時には頂部のフェルトをひもで引っ張って閉じる。最近はこの穴からストーブの煙突が出ていることが多い。

できるだけ軽い素材を使い、いくつかのパーツに分かれているので、馬やラクダで運ぶのに便利であり、組み立てる時も最低2人でできるとのこと。移動できるようにすることと、冬の寒さに十分耐えるようにすることを同時に満たすことはかなりむずかしいが、冬には厚いフェルトを三重三重にかけ、内部で火を燃やして暖をとることによって解決している。

入口を南に設け、中心の炉を囲んで入った正面が客座、左手が男性、右手が婦女子の座となっている点、日本のいろり端の習慣を想わせる。入った正面、客座の後には先祖を祭る棚があり、部屋の周囲には物入箱やふとん類を積んでおく。アラブのテントのように柱を建てている場合は、柱を増やしてテント地を長くし、より大きなテントにすることができるが、寒冷地モンゴルでは大きくすることよりも、密

閉することに重点をおいているので柱もつと空間が欲しい場合には、バオを2つ、3つと増やして台所用、寝室用、などとするようである。

●密閉型と開放型

木造の建築でも、日本のような柱梁構造で開放的な空間を造る構法は東南アジアなどの蒸し暑い地方に多く見られ、校倉、ハルツティンバー、ツツバイフォーなどのように密閉型空間を造る構法は北ヨーロッパや北米に多く見られる、遊牧民のテントでも同じことが言えそうである。柱で屋根を支えるアラブのテントは開放型であり、周壁の骨組みで支えるバオは、ちょうど、校倉やツツバイフォーのように、壁で屋根を支える密閉型である。

ウランバートルなどの都市では、セントラル暖房の効いたソ連型のアパート群が建っているが、ちょうど日本人が木造の民家に郷愁を覚えるように、モンゴルの人たちは別荘のようにバオを持っていることもあるという。どこへでも移動できる別荘というもの、気が利いている。日本でも、バオの形態を木造パネルで造り、最近キットにして移動別荘として売り出した人がいるが、果して日本で、移動別荘を勝手に建てられる場所があるのだろうか。

日本でも、木造の民家に郷愁を覚えるように、モンゴルの人たちは別荘のようにバオを持っていることもあるという。どこへでも移動できる別荘というもの、気が利いている。日本でも、バオの形態を木造パネルで造り、最近キットにして移動別荘として売り出した人がいるが、果して日本で、移動別荘を勝手に建てられる場所があるのだろうか。

バリ島民の住居と世界観

●南山大学教授 倉田 勇

●東西南北以前
バリ島は面積5,621平方km、愛媛県位の広さに247万人が住み93%はヒンドゥ教徒で隣りのロムボック島の西半分を併せてインドネシアにおけるヒンドゥ文化圏を形成している。

バリ島は標準インドネシア語が通用し方位などは東西南北で表現しているが、日常のバリ語の世界は、太陽の出没 *Kangin*→*Kauh* と土地の高低である *Kaja*→*Kelod* の方位を組み合わせた民俗方位によって村の寺院配置や家屋敷が定められている。

インドネシアでは太陽の出没に合致して建てられた家屋や、川水の流れに平行した家屋、墓の配置が見い出される。太陽の出没は東西であるが川の流れは南北に限られず地形に応じさまざまである。

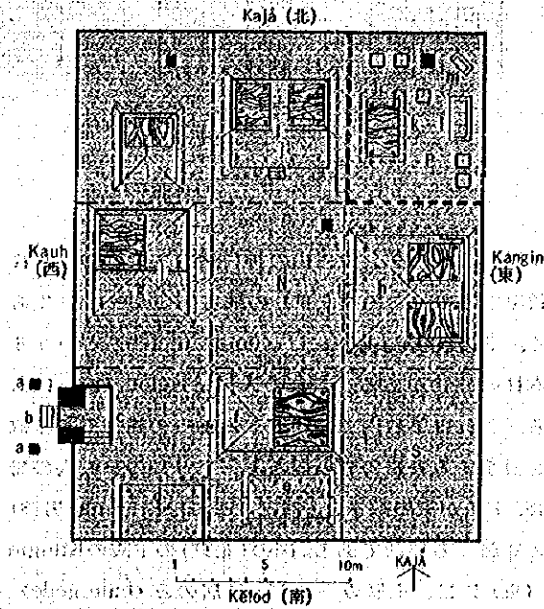
バリの民俗方位は、川上、奥地、山の方位を *Kaja* とよび吉方である。逆に川下、海の方は *Kelod* とし不吉な方位である。この *Kaja* は山から天に達し天界の概念となり、*Kelod* は海、水、地下の悪魔の住む黄泉、地界と結びつく不吉な方位とされており、したがって *Kaja*→*Kelod* は水平的でなく垂直的な概念だとされている。またバリ島の地形は中央高地を分水嶺となり、川水の流れは正反対となる。つまり、南

北バリではKajā—Kēlodが逆転する。さらにこの言
方、不吉な方位は神秘的な天界地界の方の支配と関
係しバリ島民の精神生活に深くかかわっている。バ
リの海岸で悪魔や悪病を祓う行事を行うのはこの地
界対したものであり、火葬で遺体を運ぶ多彩な塔
(ワグ)の頂上が聖なるアグン山で天界を、また土
台に亀や蛇を彫刻し画くのは地界を表象したもので
ある。

●災厄を避ける家屋敷の位置と秩序

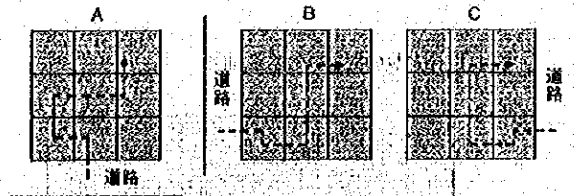
民俗方位を理解できるとバリ人の住居の構造が明
らかとなる。際限なき不幸、病気、恐怖や悪魔を避
けるべくバリ人は住居を構える。住居はカーネストに
よる差があり、Brahmin, Ksatriya, Wēsiyaの3階
級の住居を〈Jēro〉¹⁾といい、一般人の住居
を〈pekaraŋgan〉と区別している。〈Jēro〉は図1で示
したごとく将棋盤の目を大きくした形に、たて、よ
こ、3等分され、この長方形の9区分を〈nawa
sanga〉²⁾といい、この屋敷地は厚い土塼で仕切られて
いる。其中にある庭は〈nātār〉³⁾とよび、時たま祭壇を
設けるところで建物はなく、Siva神が守護している。
南バリではKajā-Kangin(北東)には〈ancak saji〉⁴⁾
とよばれる低い土塼でかこまれた聖所があり、家祠
〈sanggah kemulan〉がある。ここは〈Brahma-
Ishvara-Vishnu〉の三神が一体として祀られている。
この家祠は家屋敷の継承者に当る人が結婚に際して
新しく建立するが、職業、社会的地位、地域差によ

図一 南バリのジエ口の略平面図

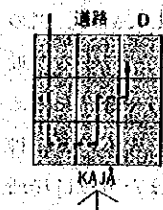


- P: 聖所 (k) バレ・スクナム(6本柱)
- N: 中心の庭 (g) バレ・ティアン・サンガ(9本柱)
- S: 庭 (h) バレ・グア(12本柱)
- a: 門 (i) バレ・シエバト(4本柱)
- b: 階段 (j) ラマ・メデジ
- c: 壁 (k) バレ・スサイエン
- d: 台所 (l) サンガ・グムラン
- e: 教倉 (m) バドマサナ

図一〇



り異なる。アグン山、山の神(祖靈)、太陽神が訪れ鎮座するのはこの(北東)の隅〈padmasana〉である。さてKajā(北)には〈umah mēten〉という8本柱の建物がある。これの入口はKelod(南)にある。これは屋敷内で閉鎖できる唯一の建物で家屋敷を継承する大婦の寝所である。バリ島の一般人の場合、木子が家屋敷を継承する。ここはBrahma(男神)の守護する場所である。図の(北東)の下隣のKangin(東)には、上層カーストの住居のみ〈balé gedè〉がある。やや小高くされた土地の上に12本柱で屋根をささえて、2つの床が張られている。建物は開放的であり、屋根は尖っている。ここは日常は婦人たちの織物や雑用の場であり、雨が降れば子供が遊ぶし、夜はここに寝泊りする。村によっては寝所としないところもある。この場所は人の一生の儀礼の場であり、生後40日目の祝いがあり、男女共に歯にやすりをかける成人式の場となり、死ねばここに安置



この図は道路から中庭をへて壱所に歩いていく道程を示したもので、C、Dは道路に壱所は接していても、精神的な距離では離れてることになる。(Dr. Roger, Y. D. T.の作成した図に筆者が解説を付加した。)

し、一度は土葬し、後で再び掘り出された骨を葬礼の完結とされる幾年かあとの火葬の時期がくるまで安置する場所であり、多目的に使用される。ここは、Ishvara神が守護する。

さて民俗方位Kauh (西) やKajã-Kauh (北西) には規制がなく、入口近くには客人を泊める〈loji〉があり、この建物は現代風様式である。日中は作業場であり、夜は寝所に変る。名称は柱数4、6、8本で名が決まる。9本ならば〈balĕ, fiang saŋga〉という。寝る場合、枕はkajã (南バリでは (北) 北バリでは (南) か、Kangin (東) であり、決してKĕlod (南から西) の方位にしない。Kĕlod (南) の方位に台所と殺倉がある。ここはVishnu (女神) 領域とされ、Kajãの〈umah mĕten〉の男神と対称的である。またKĕlodの方位に豚小屋をつくる。入口はどこも定まっていなが、悪魔の人らないよう小さくつくられる。入口は道路と関連している。図2は屋敷内

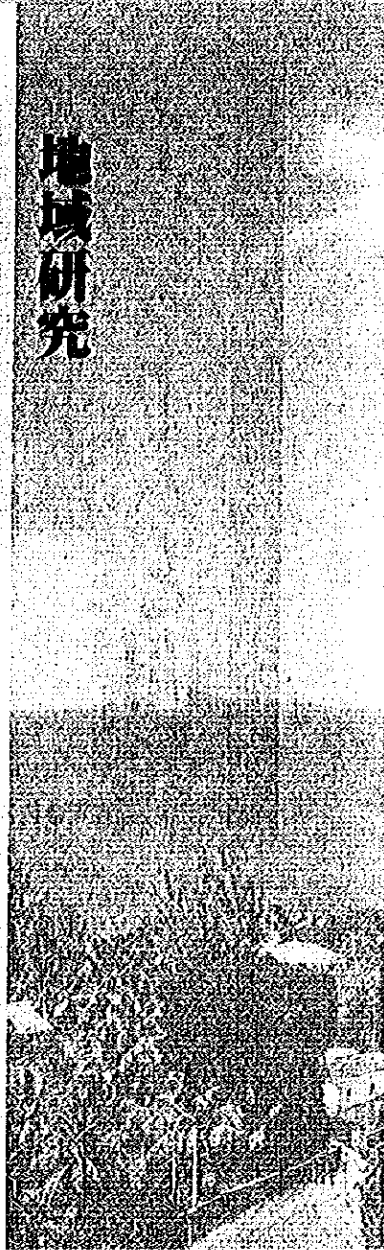
の聖所に道路から歩む経路を示している。家祠のある聖所はKajā-Kangin(北東)に一定している。図のC、Dとは聖所と道路とは互いに接し、一見すると近い距離にあるわけだが、入口のとり方や経路を考えると眼に近くても心では遠くに位置したもので精神的な距離の存在に気づくのである。また方位は場所において、場を示す名称に変わってKēlod→dlodとなりダロットのバレ〈balē dlod〉となる。主人の一定歩数で屋敷地の建物の位置を定めるし、喪所の床の長さも主人の背丈によって決定し、妻のそれではない。かくてバリ島民の住居は整然と秩序ある意味をもった1つの世界である。

（1986年7月号）

（1986年7月号）
 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152) (153) (154) (155) (156) (157) (158) (159) (160) (161) (162) (163) (164) (165) (166) (167) (168) (169) (170) (171) (172) (173) (174) (175) (176) (177) (178) (179) (180) (181) (182) (183) (184) (185) (186) (187) (188) (189) (190) (191) (192) (193) (194) (195) (196) (197) (198) (199) (200) (201) (202) (203) (204) (205) (206) (207) (208) (209) (210) (211) (212) (213) (214) (215) (216) (217) (218) (219) (220) (221) (222) (223) (224) (225) (226) (227) (228) (229) (230) (231) (232) (233) (234) (235) (236) (237) (238) (239) (240) (241) (242) (243) (244) (245) (246) (247) (248) (249) (250) (251) (252) (253) (254) (255) (256) (257) (258) (259) (260) (261) (262) (263) (264) (265) (266) (267) (268) (269) (270) (271) (272) (273) (274) (275) (276) (277) (278) (279) (280) (281) (282) (283) (284) (285) (286) (287) (288) (289) (290) (291) (292) (293) (294) (295) (296) (297) (298) (299) (300) (301) (302) (303) (304) (305) (306) (307) (308) (309) (310) (311) (312) (313) (314) (315) (316) (317) (318) (319) (320) (321) (322) (323) (324) (325) (326) (327) (328) (329) (330) (331) (332) (333) (334) (335) (336) (337) (338) (339) (340) (341) (342) (343) (344) (345) (346) (347) (348) (349) (350) (351) (352) (353) (354) (355) (356) (357) (358) (359) (360) (361) (362) (363) (364) (365) (366) (367) (368) (369) (370) (371) (372) (373) (374) (375) (376) (377) (378) (379) (380) (381) (382) (383) (384) (385) (386) (387) (388) (389) (390) (391) (392) (393) (394) (395) (396) (397) (398) (399) (400) (401) (402) (403) (404) (405) (406) (407) (408) (409) (410) (411) (412) (413) (414) (415) (416) (417) (418) (419) (420) (421) (422) (423) (424) (425) (426) (427) (428) (429) (430) (431) (432) (433) (434) (435) (436) (437) (438) (439) (440) (441) (442) (443) (444) (445) (446) (447) (448) (449) (450) (451) (452) (453) (454) (455) (456) (457) (458) (459) (460) (461) (462) (463) (464) (465) (466) (467) (468) (469) (470) (471) (472) (473) (474) (475) (476) (477) (478) (479) (480) (481) (482) (483) (484) (485) (486) (487) (488) (489) (490) (491) (492) (493) (494) (495) (496) (497) (498) (499) (500) (501) (502) (503) (504) (505) (506) (507) (508) (509) (510) (511) (512) (513) (514) (515) (516) (517) (518) (519) (520) (521) (522) (523) (524) (525) (526) (527) (528) (529) (530) (531) (532) (533) (534) (535) (536) (537) (538) (539) (540) (541) (542) (543) (544) (545) (546) (547) (548) (549) (550) (551) (552) (553) (554) (555) (556) (557) (558) (559) (560) (561) (562) (563) (564) (565) (566) (567) (568) (569) (570) (571) (572) (573) (574) (575) (576) (577) (578) (579) (580) (581) (582) (583) (584) (585) (586) (587) (588) (589) (590) (591) (592) (593) (594) (595) (596) (597) (598) (599) (600) (601) (602) (603) (604) (605) (606) (607) (608) (609) (610) (611) (612) (613) (614) (615) (616) (617) (618) (619) (620) (621) (622) (623) (624) (625) (626) (627) (628) (629) (630) (631) (632) (633) (634) (635) (636) (637) (638) (639) (640) (641) (642) (643) (644) (645) (646) (647) (648) (649) (650) (651) (652) (653) (654) (655) (656) (657) (658) (659) (660) (661) (662) (663) (664) (665) (666) (667) (668) (669) (670) (671) (672) (673) (674) (675) (676) (677) (678) (679) (680) (681) (682) (683) (684) (685) (686) (687) (688) (689) (690) (691) (692) (693) (694) (695) (696) (697) (698) (699) (700) (701) (702) (703) (704) (705) (706) (707) (708) (709) (710) (711) (712) (713) (714) (715) (716) (717) (718) (719) (720) (721) (722) (723) (724) (725) (726) (727) (728) (729) (730) (731) (732) (733) (734) (735) (736) (737) (738) (739) (740) (741) (742) (743) (744) (745) (746) (747) (748) (749) (750) (751) (752) (753) (754) (755) (756) (757) (758) (759) (760) (761) (762) (763) (764) (765) (766) (767) (768) (769) (770) (771) (772) (773) (774) (775) (776) (777) (778) (779) (780) (781) (782) (783) (784) (785) (786) (787) (788) (789) (790) (791) (792) (793) (794) (795) (796) (797) (798) (799) (800) (801) (802) (803) (804) (805) (806) (807) (808) (809) (810) (811) (812) (813) (814) (815) (816) (817) (818) (819) (820) (821) (822) (823) (824) (825) (826) (827) (828) (829) (830) (831) (832) (833) (834) (835) (836) (837) (838) (839) (840) (841) (842) (843) (844) (845) (846) (847) (848) (849) (850) (851) (852) (853) (854) (855) (856) (857) (858) (859) (860) (861) (862) (863) (864) (865) (866) (867) (868) (869) (870) (871) (872) (873) (874) (875) (876) (877) (878) (879) (880) (881) (882) (883) (884) (885) (886) (887) (888) (889) (890) (891) (892) (893) (894) (895) (896) (897) (898) (899) (900) (901) (902) (903) (904) (905) (906) (907) (908) (909) (910) (911) (912) (913) (914) (915) (916) (917) (918) (919) (920) (921) (922) (923) (924) (925) (926) (927) (928) (929) (930) (931) (932) (933) (934) (935) (936) (937) (938) (939) (940) (941) (942) (943) (944) (945) (946) (947) (948) (949) (950) (951) (952) (953) (954) (955) (956) (957) (958) (959) (960) (961) (962) (963) (964) (965) (966) (967) (968) (969) (970) (971) (972) (973) (974) (975) (976) (977) (978) (979) (980) (981) (982) (983) (984) (985) (986) (987) (988) (989) (990) (991) (992) (993) (994) (995) (996) (997) (998) (999) (1000)

地域研究

（昭和四十八年秋刊）





イスラームと開発

公平な社会作りが開発の鍵

●佐々木良昭（拓殖大学助教授）

白色革命の残したマイナス・イメージ

イランの故パーレビ国王は自国イランを欧米型の工業国にしようと考え、白色革命を進めた結果、イスラーム原理主義者たちによって王位を追われ、エジプトで客死した。

このイランの例は、イスラーム教と近代化あるいは工業化とが相入れないものであるというイメージをイスラーム世界以外の人々に植え付けてしまったようだ。

しかし、実際は、イスラーム世界の近代化、工業化が立ち遅れている理由は他にある。

かつてイスラーム教の預言者ムハンマドは彼の教友たちに「知識を得るためならば中国までも行け」と教えている。

ここで言われている中国とは、実際の中国を指しているのではなく「遠い所」ということであり「知識を得るためならばどんな遠い所までも、どんな苦勞をしてでも行きなさい」ということなのだ。

つまりイスラーム教そのものは知識を求め、開発、工業化していくことと何らの矛盾も持っていないということになる。

イスラーム世界が世界史の中で過去に大きな成果と繁栄の時代を有していることは誰もが認めるところであり、否定できるものではないだ

ろう。

現代の化学、物理、論理、社会学などはアラブ・イスラーム世界の産物をヨーロッパが受け継ぎ発展させたものだし、芸術の分野においてもイスラーム世界は多くの成果を今日に伝えている。

コーラン解釈による限界

イスラーム世界のそうした繁栄の時代が低迷の時代に到ったのはどうやら他に理由があったようだ。

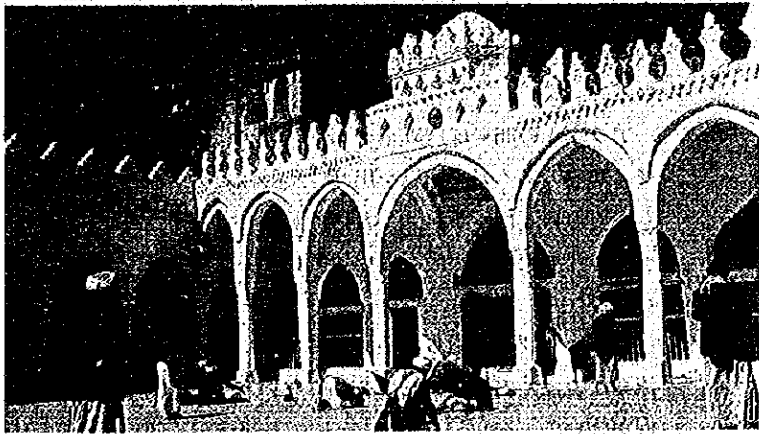
第1にイスラーム教徒は記された聖典(コーラン)を有していたために、その理解と応用に自から固いワクをはめてしまったということだ。

そのため、一定の解釈を越えては解釈を拡大しようとはしなかった。

コーラン解釈の学問はタフスォールと呼ばれるが、何度となく解釈の範囲が広げられるたびにそれは限界を越えるものとされ、原典に復帰するという繰り返しが行われてきている。

つまり拡大しては縮小し、縮小しては拡大するということを繰り返しており、その限界を越えての解釈はなされなかったということだ。

こうしたイスラーム教徒の手法は、一面においてイスラーム教を正確に今日に伝えたし、一時期、強力なエネルギーを発し、一定の成果を



モスクで祈る（イエメン）

イスラーム教は自らの教義を「平和主義」として、
 根本的な面で差別や対立を生み出すことが
 生み出したが、柔軟さが無い故に次第に立ち遅
 れを生み出していったようだ。そして、その結果
 をそしてついにはアラブ・イスラーム世界は、
 ヨーロッパ諸国の支配下におかれることになり、
 内面に多くの不満を抱えていくことになった。

商業こそが理想の職業

第2の理由はコーランの解釈に限界を設意し
 たと同様に、コーランの教え、預言者の教えを
 忠実に守ろうとすることから生まれた。そして、
 預言者ムハンマドの職業が商業であったこと
 から、イスラーム教徒は商業が最も理想的な仕
 事と考えている。このため生産することよりも、

商うことの方を重視する傾向があり、生産とそのための方に対する熱意が弱いものとなっている。

アラブの間では“カネのある者はカネを出せ、知恵のある者を知恵を出せ、そしてそのどちらも無い者は汗を出せ”という諺があるが、それは汗を流す者が最も低い位置にあるということだ。

こうした認識があるため、知識ある者は汗を流さず、カネのある者も汗を流さないという傾向が強い。

今まで多くのアラブの若者が日本を始めとする先進国に留学し、科学技術を学んでいるが、彼らの多くは学んだ知識を現場で活かすとは考えようとしない。つまり、科学技術を学んでも、自国の設備を修理しようとは考えないのだ。彼らにとって、留学は知識を得るためのものであり、一端、知識を得た者は“汗を流す層”にはならないということだ。

何人もの留学生に会って話しをしてみたが、彼らは一様に“設備の修理？ いや、それは我々の仕事じゃない。我々は帰国したらホワイト・カラーでありブルー・カラーじゃない”と語っていた。こうした彼らの考え方は“イスラーム社会の習慣”ではあってもイスラーム教そのものには原

因があるとは言えまい。

■ 株式会社が生まれにくい理由

イスラーム世界が次第に低迷し、後退していくにつれヨーロッパ諸国の支配下に置かれると、異質な文化による侵入、支配の下でイスラーム教徒は他に対する不信感を強めていった。勿論、部族単位、家族単位の社会だったため、イスラーム教徒は元来、他に対する不信感が我々日本人に比べれば強い。

不信感の強さは今日なおイスラーム世界には民間の巨大な株式会社を生み出していないことから知ることが出来よう。アラブ世界を旅行していると、街の中に目に付く企業の看板が「〇〇ブラザース」あるいは「〇〇サンズ・アンド・カンパニー」というものがほとんどだ。つまり、兄弟や親子で経営している企業がほとんどであり、不特定多数の人々の資金を集めて企業がつくられていないということだ。

日本が明治期に、国営企業を設立し、次第に民間企業にしていったが、それはひとつには株式会社という社会的信用が日本にはあったから出来たのだ。

エジプトを始めとするアラブ世界の中の先進国も、日本と同じように国営企業の民営化を進めようとしているが、現実は今も日本の場合と

は異なる。民営化をされた企業に関わる者は、国家から利益を得たという発想が強く、その企業を発展、拡大していこうという意欲が弱いのだ。そうしたなかで新たに不公平感が企業のメンバーの間に生まれ、利害の感情的な対立がその組織の中で発生し、国営企業の民営化はあまり成功する可能性は無くなるということだ。

企業とは彼らの発想の中では、個人企業以外、楽な職場であり、赤字は生まれず、生まれても誰にも責任は無いといったものとして受け止められている。

能力を発揮させるのは企業の責任

だが、外国企業で働く際は、そうはいかない場合がある。一部の産油国のように、能力に関係無く自国民を一定の割合で雇用させる場合は別だが、それ以外の場合は能力を要求されるし、努力も必要となってくる。

その場合、彼らは日本人とは全く別の考え方をすることを知る必要がある。日本人の場合、自分の出世が遅れているのは自分に能力が欠けているか、運が悪いか、学歴かという判断をし、ある部分はあきらめてしまうだろう。

しかし、彼らの場合はこうは考えない。自分が今いるのは不満なポジションだ。それは自分に能力が無いからではなく、企業側が十分な指

導(社員教育)をしないからだ。充分な指導をしてくれれば自分にも能力が付く、よって自分の能力の不足は雇っている側の責任だ、という考えなのだ。そして能力を付けてくれてなおかつ充分な給与の支払いが自分に対してなされるべきだと彼らは考える。

彼らは給料が自分にいくら支払われているかによって自分に対する評価を知ろうとするし、給与が安ければ例え他の面でその人物を企業側が評価していても認めようとはしない。

そして、もうひとつは自分をうまく使ってほしいと彼らは考える。自分の能力が充分に発揮されないのは自分に能力が無いからではなく、自分が現在就いている仕事が不向きなのであって、自分に合った職種ならば能力が充分に発揮され、給与も上がると考えるのだ。

こうした、相手(雇用者)に全責任を押し付ける発想は部族社会の残滓なのかも知れない。

部族内においては族長が部族構成員全員の能力を掌握し、ふさわしい仕事を割り当てるというものだ。部族構成員は族長に絶対服従だが、族長は他方、その統治能力を部族構成員によってチェックされるということでもある。

こうしたイスラーム世界の人人の発想、行動様式を知った上であれば、同地域の人々との交流がよりスムーズになり、日本側の意図が正し

く理解され、彼の地の開発・近代化に協力して
いけるものと思われる。

近代化とイスラーム教は相反しない

イランの白色革命が失敗に終わった最大の原因
は、近代化がイスラーム教に反するものであつ
たからでは無く、不平等、貧富の差が拡大し過
ぎたからだった。

多くの外国企業がその国に進出してくると、
当然のことながら各企業が競って優秀な人材を
確保しようとする。そのことは当然、高給を払
うということであり、特別な能力を有さない者
は彼らに比べ安い賃金で働くことになる。

多くの外国企業が進出するということは多く
のビジネスが展開するということであり、それ
は国内にインフレを生み出すことになるし、地
方と都市部の経済格差が拡大するということでも
ある。結果的には多数派の単純労働者が不満
を拡大していき、これを反体制側が吸収し体制
を倒す方向に向けていくということだ。

そこで重要なのは教育の機会均等による能力
の向上、また技術訓練所の増設といったことが
こうした不平等を是正していく手段となる。

イスラーム原理主義の背景にあるもの

アルジェリアを始めとするイスラーム諸国の

中で燃え上がるイスラーム原理主義の動きも、イスラーム教に対する大衆の回帰というのは必ずしも正しくない。

経済的な悪化、それに伴う格差が次第に体制に対する不満を生み、その核となるのがイスラーム原理主義ということになるのだ。

富の公平な分配が行われるシステムさえあればイスラーム世界でも開発、近代化に対する反動は生まれまい。しかし、現実には構成員の間に能力格差があり宗教の差異があり、部族、民族への違いがあることからイスラーム世界では差が生じてしまうのだ。

こうした能力・民族・宗教の差異はアラブ世界だけでは無く他のイスラーム世界についても言える問題だ。そうした国民の中の差異をかつては植民地宗主国が利用し、現在は経済活動が利用しているということだ。

相手国に進出していくに当たり、各企業は自社の利益のために相手国の要人を抱き込み、有能な人材を高給で雇い入れるということになる。

その結果、富む者と富まざる者が生まれるし、富む者にとっては国家の財政がどうあれ外国からの借り入れは自分の利益につながることからどんどん進めていく。

その国家が大きな対外債務を抱え込めば世



カイロの風景

銀からの圧力がかかり、国内では貧困層をおさえ込むために充当されていた食糧を中心とする生活必需品に対する政府補助が削減されることになり、それは暴動の引き金となる。

イスラーム世界の場合、絶対的な正義(神)があり、公平の理念があることから大衆が集結しやすいということだ。

理想ではあるが、イスラーム世界を始めとする開発途上国への援助の上で最も重要なことは公平を生み出すための援助(教育)と公平な対応ではないのか。

また、援助を求めてくる相手国の希望が、その国の公平の原則に至ったものか否かを援助する側は考える必要があるのではないか。

イスラーム教が開発への足枷と考えるのはイスラーム教に対する偏見でしかない。

(1991年10月号)



「アフリカの年」からの30年……

ハラ色の独立、絶望、そして再生へ

1950年代後半から1960年代前半にかけて、アフリカ大陸は独立の嵐を巻き起こした。この30年、アフリカは独立の夢を追い求め、国家の建設に邁進した。しかし、独立後のアフリカは、多くの場合、政治的腐敗、経済的停滞、そして内戦に悩まされた。この30年、アフリカはどのような道を歩いたのか、そして未来はどのようなものか、について考察する。

●川端正久（龍谷大学教授）

第2次世界大戦は植民地主義の崩壊を決定づけ、アフリカ大陸の植民地各地で民族主義運動が開始された。大戦前、独立国はエチオピア、リベリア、南アフリカ、エジプトの4カ国だけであった。アフリカ大陸における独立の動きは北アフリカから始まり、1956年までに4カ国が独立した。

1957年3月、エンクルマが指導するC.P.P. (会議人民党) の民族独立運動の結果、旧イギリス領ゴールドコーストはガーナとして独立を獲得した。これはサハラ以南アフリカ (いわゆるアフリカ) 独立の幕開けを告げた。1958年10月、ギニアはフランス第6共和国憲法を拒否し、独立を選択した。1960年には実に17カ国が独立した。したがってこの年は「アフリカの年」と呼ばれた。1961年から1968年までに15カ国が独立を達成した。

1970年代には7カ国が独立した。1974年、「最後の植民地帝国」ポルトガルの独裁政権が打倒され、ポルトガル植民地主義は崩壊した。1980年はジンバブエ、1990年にナミビアが独立した。アフリカ大陸から植民地は消滅した。残るはモロッコが占領している旧スペイン領西サハラ (1991年4月、国連安保理は独立について住民投票を実施することを決議した)、フランス領リュネオンなどである。

60年代前半に独立した大多数のアフリカ諸国では、

70年代前半の頃まで、熱望に包まれた人々は政治が開花し、経済が発展し、生活が向上する、と期待を懐いていた。独立運動の指導者は新興独立諸国の支配者となり、民族国家建設のスローガンを高々と掲げた。新しい国旗がはためき、国歌が奏でられ、議会が開設され、選挙が行われた。独立後の約10年間、アフリカ諸国は社会的経済的にかんがりの成果を挙げた。大学や学校が設立され、識字率は向上し、病院や診療所が建設され、衛生は改善された。経済は成長し、インフラ投資は進み、人々の生活は前進した。



危機の深化——絶望の淵

しかし70年代中頃から、とりわけ80年代に入ると、独立の熱気は冷め、アフリカ諸国において政治的・経済的・社会的危機が深化し、アフリカは絶望の淵に立たされた。

政治は閉塞した。独立の英雄は「建国の父」として自己の権力維持だけに腐心し、国民の政治参加を拒否し、「独裁者」と化した。政治のルール、法の支配が無視された。独裁者を翼賛するために一党制が導入された。軍部は政治に公然と介入し、軍事政権が増えた。クーデターによる政権奪取が常例となり、平和的政権移行は例外となった。戦争、内戦、紛争が多発し、難民と流民が大量に発生した。軍事警察偏重の武装国家が強行的に建設された。

経済は失速した。〈宗主国—植民地〉という植民



アフリカ・タンザニア

アフリカ・タンザニアの都市風景。前景には二人の女性が写っており、一人は子供を抱いている。背景には海と遠くに見える都市の建物群が写っている。

アフリカ・タンザニアの都市風景。前景には二人の女性が写っており、一人は子供を抱いている。背景には海と遠くに見える都市の建物群が写っている。

地型経済構造は、独立後も根本的には変革されなかった。世界資本主義の危機は最弱のアフリカに転嫁された。バラ色に描かれた経済計画は、社会主義的であろうがなかろうが、ほとんど挫折した。それでも60年代から70年代にかけて、1人当りのGNP成長は辛うじて年率1.3%であった。これが70年代末から80年代にかけて年率0.7%に落ちた。したがって実際の所、石油輸出国ナイジェリアを除けば、アフリカ諸国の1人当りのGNPは1975年以降、実質的に低下し続けた。農業は停滞し、食糧生産は人口増加に追いつけず、飢餓は常態となった。80年代、アフリカ経済は「失われた10年」を経験した。

社会は混迷した。かつて独立運動で共に闘った指導者と広範な人民大衆からなる「民族戦線」は瓦解した。大統領は国庫が赤字でも、自己の道楽に巨額の金を浪費した。政府高官は大邸宅に住み、外国製高級車を乗り回した。多くの庶民は1日の生活にも事欠いた。失業者が溢れ、物乞が徘徊した。どの国でも都市周辺に巨大なスラムが出現した。



アパルトヘイト廃止——南アの夜明け

80年代末から、とりわけ1990年以降、アフリカ大陸は平和と民主主義に向けて歩み始めた。1990年から1年半の激動は、1960年の「アフリカの年」に匹敵するだけの歴史的意義を有する事態である。

最大の出来事は南アフリカ人民の運動が前進した

結果、南アフリカがポスト・アパルトヘイトに向けて大きく動きつつあることである。1990年2月、マンデラは27年ぶりに釈放された。3月、ANC（アフリカ民族会議）副議長に就任したマンデラは、4月にデクラーク大統領と会談し、政府と対話を開始した。5月、ANCと政府は予備交渉を行い、共同声明を発表した。6月、政府は非常事態を解除した。1991年1月、マンデラは「91年を権力の人民への移行のための大衆行動の年にする」と宣言した。2月、マンデラ・デクラーク会談は武装闘争の停止と政治犯の釈放で合意した。4月、ANCとインカタ（ズールー人組織）は黒人闘争終結について会談し、他方、ANCとPAC（パンアフリカニスト会議）は統一戦線結成で合意した。6月、人種別議会は人口登録法の廃止を可決し、デクラーク大統領はアパルトヘイト体制の終焉を宣言した。7月、ANC大会が開催され、マンデラは議長に選出された。もちろん差別法が撤廃されても、差別と不平等の現実は変わっていない。それでも1人1票制の全人種平等を規定する新憲法制定に向けて、南アフリカは動き始めた。夜明けに向けて進みつつある。



多党制

新しい風

もう一つ重要な動きは、独裁政治を支えてきた一党制が大きく崩壊しつつあることである。70年代は科学的社会主義を標榜して登場したモザンビーク

ベナン、サントメ・プリンシペ、コンゴ、カメルーン、アンゴラなどの社会主義政党は「マルクス・レーニン主義」の看板を次々と外し、同時に、多党制への移行を決定した。

社会主義政党でなくても、多党制移行は1990年以降、「新しい風」として大陸を席卷した。90年3月の一党制反対・民主化要求デモの結果、4月にPDG（ガボン民主党）のボンゴ大統領は多党化を表明した。90年3月の民主化デモの高揚に押されて、5月にPDCI（コートジボアール民主党）のウフェボアニ大統領は野党合法化を余儀なくされた。一党制維持に未練を残したザンビアUNIP（統一民族独立党）のカウンダ大統領もついに11月、憲法を改正し多党制を認めた。さらに赤道ギニア、マリ、トーゴなどが多党制を導入した。

軍事政権の国でも民主化要求が高まった。90年8月、カーナに政党が出現した。同じ頃、ニジェールとブルキナファソでは多党制が示唆された。91年5月、ギニアでは民主化運動が発生し、91年7月、モーリタニアでは民主化が国民投票に付された。

多党化の背景には次の事情がある。①アフリカ人民大衆が政治的に覚醒した。②ナミビア独立からアパルトヘイト廃止へと南部アフリカで民主化が進展している。③ソ連・東欧そして途上国で民主化が進んでいる。④世界銀行・IMFおよび先進諸国が援助提供の条件として市場経済と多党化を要請した。

多党制への動向をどう見るか、評価は難しいが、現時点では次のことが言える。国外の援助供与国および国内の人民から非民主性を批判された独裁者が政権を維持するために、市場経済と多党制を導入することによって、民主化のペースを余儀なくされた。民衆は上意下達の儀式と専た政治に公然と疑問を表明し、やっと政治参加の道の戸口に辿りついた。

政情不安は続いている。リベリアなど5カ国では政権が打倒された。ナイジェリアなど6カ国ではクーデター未遂事件が発生した。民族紛争は多発している。エリトリアの独立への動きは国境線を変えないというOAU（アフリカ統一機構）原則を動揺させている。また飢饉の深化が伝えられている。

アフリカの明日 第2の解放

90年代、アフリカをめぐる国際的政治経済環境は厳しい。問題はアフリカ諸国政府が危機克服のシナリオを主体的に立案し実行できるかどうかである。どの国もシナリオの案案さえも作成できていない。この点で91年6月のOAU首脳会議は象徴的であった。アフリカ諸国は今世紀末までにアフリカ経済共同体を結成するという「夢」を語った。ところが会議に出席した世界銀行のコナブル総裁はこの夢に冷水をかぶせ、「当面する構造調整の諸施策を実行しなければならない、良い統治が必要である、それができなければアフリカ・ベシミズムは定着する」とま

で断言した。世界銀行、IMFの資金を欲する各国の首脳はその警告に逆らえなかった。

もう一つ象徴的な出来事は91年7月のロンドン・サミットであった。サミットは西側先進国主導の世界経済秩序の維持を主張し、アフリカを含む途上国問題の解決を無視した。経済宣言は民主化、世銀プログラム推進、飢餓について言及したが、南北問題解決の道筋を示さなかつた。

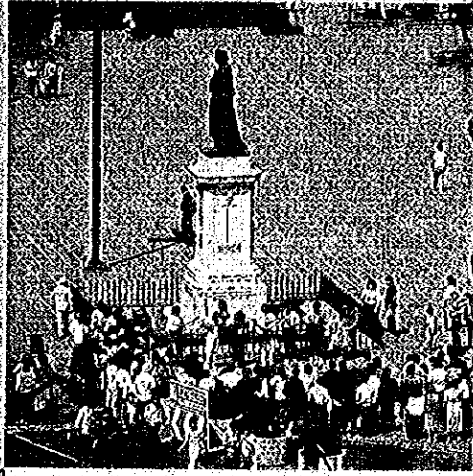
冷戦は終わった。それは皮肉にも途上国問題をより深刻にした。なぜか。ソ連は新思考外交なる名目でアフリカ問題から手を引きつつある。エチオピアの事態は典型的である。そこでアメリカはこれまでほどアフリカ問題に介入する必要から解放されつつある。アメリカは軍事援助をアフリカに提供し続けるが、経済援助は日本に肩代りさせるという政策をとっている。かくして世界一のODAを誇る日本がアフリカの舞台に登場することになった。91年6月、日本政府は1993年にアフリカ開発会議を開催すると発表した。これまでアフリカ外交と言いうものを持たなかつた日本がどのような内容のアフリカ外交を打ち出すのか、世界が注目している。今こそ、日本は「平和的」で「顔のある」アフリカ外交の理念と構想を自主的に構築すべきである。

「独立後30年、アフリカはついに解放されつつある」(ルモンド)。90年代のアフリカが、60年代の植民地独立(第1の解放)に次ぐ、真の民主主義に向

けて第2の解放の真只中まじらにいることは確かである。
民主化の主人公が貧しい大多数の無辜むこの民衆である
ことを忘れてはならない。

(1991年9月号)

(長崎大学) 政治経済学



ラテンアメリカの不安

債務危機と貧困

●細野昭雄（筑波大学教授）

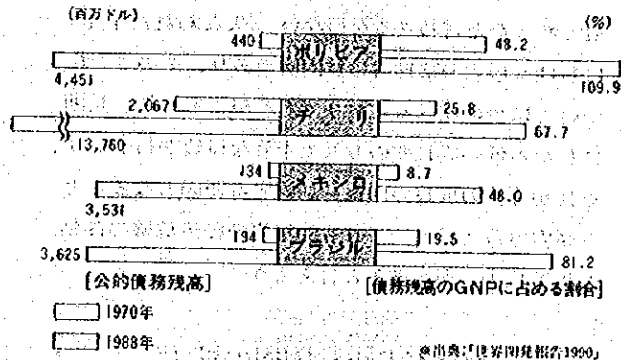
失なわれた10年

よく知られているように、ラテンアメリカ諸国は、1982年8月のメキシコの金融危機を発端に同年後半から累積債務危機に陥り、一般に成長を抑えて債務サービス支払いを継続する政策をとってきた。危機発生直後の2年間、1982年、83年においては特に成長率の抑制は厳しいものであり、1983年にはこの地域の平均成長率はマイナス2.7%となった。その後、84年から87年まで地域全体としては3%台の成長を回復したが、88年以降、再び低い成長率となり、同年0.9%、89年1.5%、90年にはマイナス0.5%となった。この結果、1981年から1990年の累積成長率は12.4%に留まり、80年代の成長率が極めて低いものであったことが分かる。一方東アジアでは世界銀行の1991年世界開発報告によれば、1989年5.6%、1990年6.2%の成長率を達成している。これと比較すれば、ラテンアメリカ地域全体の80年代の成長率がいかに低いものであったかが理解されよう。1980年代は最近よく言われるように、ラテンアメリカにとってはまさに「失なわれた10年」であったのである。

しかも、この10年間に12.4%という成長率は、この間の人口増加率を大幅に下回るものであり、一人当たりの国内総生産成長率では1981-90年でマイナス9.6%の成長率となり、大幅な所得水準の後退が見ら

れたのである。それは国によっては1970年代の初めの水準程度にまで下がることを意味したと言われていた。例えばペルーの場合、80年代の一人当たり国内総生産成長率はマイナス30.2%であり、所得水準は80年代初めの7割に下がったと言える。同様にベネズエラがマイナス19.9%、アルゼンチンがマイナス24.3%といずれも大幅なマイナス成長率となった。このようなラテンアメリカ諸国の経済的不振が累積債務危機を直接的原因としていることは言うまでもない。その関連を分析することは本稿の目的ではないが、簡単に述べるならば、それは成長率を抑制することによって輸入額を減らし、できるだけ貿易黒字を拡大させて、それによって利子支払いの継続を行うという政策をとったことにある。そのような政策をとることは、基本的には累積債務の元本の返済について繰り延べを行う(利子支払いは継続する)ために先進諸国の民間銀行団との交渉において不可欠な要件であった。国際通貨基金(IMF)はその債務国に対する支援を行う際のコンディショナリティーとして総需要抑制策を行うよう勧告したのである。1985年9月にはベーカー提案が行われ、より成長を重視する必要性が強調されたが、ベーカー提案を実施に移すための民間資金の導入は期待されたようには行われなかった。ただ、IMFの総需要抑制策に代わって世界銀行による構造調整政策が債務国における政策の中心的な部分を占めるようになった。しか

公的債務の推移



しながら、いずれにしても債務国は引き続き利子支払いの継続のために低い成長率を続けざるを得ず、一方、債務問題の解決には明るい展望が開けないという状況が80年代の後半にまで続いたのである。

こうした中で1989年初めに提案されたのがブレイデー構想であり、債務の削減や公的資金による協力を含む画期的な提案であった。ラテンアメリカ諸国の中では、既にメキシコ、ベネズエラ、コスタリカ、ウルグアイがブレイデー構想の対象国となって債務問題の解決に重要な進展が見られた。また、チリのようにブレイデー構想の適用を受けずに債務問題の解決に多くの成果を挙げてきている国もあり、ブラジルやアルゼンチン等、残る10債務国もブレイデー構想の適用へ進展が見られている。こうしてラテンアメリカ諸国は1990年代に入ってようやくやや明るい状況が見られるに到ったが、80

年代の「失われた十年」の残した傷跡は極めて深刻であったと言わざるを得ない。「失われた十年」における最大の犠牲者は貧困層であり、そのことについては後に述べるとおりであるが、その他、長期にわたる低い成長率のもとで十分な投資が行われず、それが今後の成長の回復を制約する要因となることも憂慮されている。これも80年代の経済危機の深刻な後遺症の一つであると言えよう。

経済危機と貧困層の拡大

上に述べたような10年間にわたる低成長は、それだけでも低所得層の生活水準を下げる要因であった。特に他の条件は等しくとも、当初から低い所得水準の階層の人々にとっての人当たり所得の約10%ものマイナス成長は生活水準の深刻な切り下げを意味している。

しかしながら、ラテンアメリカ諸国の貧困層の困難はそれだけに留まるものではなかった。まず何よりも、各国で累積債務の危機発生以来、インフレが深刻化したことをあげなければならない。ラテンアメリカ諸国は物価上昇率の高いことで以前から知られてはいたが、その地域全体の平均は70ないし80%程度の水準に留まっていた。ところが、危機発生以降、インフレの加速が見られたのである。1982年に地域全体の消費者物価上昇率は84.6%であったが、

84年には184.7%、85年には274%に達した。この年アルゼンチンでアウストラル・プランが実施され、翌年の初めにはブラジルでクルサード・プランが実施された。いずれも物価や賃金の凍結を含むショック政策であったが、これらの一時的効果でインフレ率は1986年には64.5%に低下したが、その後、再燃し、1988年には778.8%、1990年には1491.5%に達した。中でもブラジル、アルゼンチン、ペルーは、高インフレ国であり、1990年の物価上昇率はペルーで8291.5%、アルゼンチンで1832.5%、ブラジルで2359.9%(1990年11月の前年同月比)に達したのである。比較的物価上昇率の低い国として知られていたメキシコでも一時1987年には159.2%に達し、ベネズエラでも同年40.3%に達した。こうしたインフレによる影響は、このインフレに賃金の上昇が追いつけないために実質賃金の低下を招くことが多い。1980年を100とした時の平均賃金の1990年の水準は、アルゼンチンで68.3、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで85.5、サン・パウロで139.6、メキシコで75.8(この国の場合のみ1989年)、ペルーで43.9、ウругアイで72.8となっている。ブラジルの場合にはリオ・デ・ジャネイロとサン・パウロの顕著な相違が見られるが、サン・パウロの場合は製造業のみを対象とする数字である。また、1991年に向けて、さらに実質賃金の低下が生じたと伝えられる。

一方、都市の実質最低賃金の変化については1980

年を100とすると、アルゼンチンで69.9（ただし1989年）、ブラジルで54.1、メキシコで44.3、ペルーで24.1、ウルグアイで70.6、ベネズエラで58.5という数字が報告されている。（以上の数字はいずれも国連ラテンアメリカ経済委員会の1990年12月に発表された数字である）以上のように見るとき、一人当たり国内総生産の低下よりも平均賃金の低下の方が一般的に大きいことが明らかであり、さらに、低所得層を対象とする実質最低賃金の低下の方がさらに著しいことが明らかである。特に、国によっては実質最低賃金が80年代初めの50%かさらにそれ以下にまで下がっていることが分かる。

また、ラテンアメリカ諸国の場合、不完全就業者の割合が高いことにも留意する必要がある。既に失業保険等社会保障が十分に制度として確立されていないこともあって、失業することはできず、正規の雇用機会もないままにいわゆるインフォーマルセクターに就業している人の数が多いのである。その割合は1980年代において増加している。

このようにして、1980年代において貧困層、特に絶対的貧困層（生活の基本的な必要を満足するための最小の消費用の商品およびサービスを購入することができない状態すなわち貧困ライン以下の状態）の人口はラテンアメリカ全体で1980年には約1億1,200万人であつたと推定されているが、1986年には1億6,400万人となり、その全人口に占める割合

は35%から38%に増加したとの推定が国連によって行われている。換言すれば、人口の4割近い部分がラテンアメリカでは絶対的貧困の状況にあるといえることができる。しかも、この絶対的貧困所帯の中には必要最少限の食糧を購入することさえ困難な極端に窮乏した状態の世帯も少なくないことが知られている。このように絶対的貧困が深刻化する傾向が顕著な中、こうした状況は、より具体的にはラテンアメリカ各国における都市のスラムの拡大等にも、また政治の悪化にも反映していると考えられる。

貧富の格差拡大の構造的要因

ラテンアメリカにおいては、このように1980年代において絶対的貧困層の増大やスラムの拡大が見られ、それは直接的には累積債務危機の影響が最大の要因であったことは明らかである。しかしながら、ラテンアメリカでは危機に陥る以前の1960年代においても70年代においても、絶対的貧困や貧富の格差が問題とされてきた。たとえば1960年代の後半から70年代前半にかけては、ブラジルでは年率の国内総生産成長率が10%にも達し、ブラジルの奇蹟と言われたが、その高度成長期のもとでも、貧富の格差が縮まるどころか拡大したことがブラジル内外の経済学者によって明らかにされ、ブラジルにおける貧富の格差の問題の深刻さが浮き彫りにされたのである。

高度成長期には、例えば最も低い所得層の収入の指標とも言うべき最低賃金の水準が殆んど改善しなかったのに対し、中間層以上の家庭の所得の著しい改善がみられた。それは当然貧富の差の拡大につながったが、その背景にはブラジルにおける極めて多数の未熟練労働者の存在があり、そして都市におけるスラムの存在がある。高度成長で貧困の差は縮まるどころか拡大したのである。

さらに、その背景にはブラジルにおける貧困な零細農民の問題がある。特に東北ブラジルにおける農民の貧困が長い間問題となってきた。すなわち、ブラジルでは商品作物農業を行う広大な大農園と並んで極めて零細な規模の農家が共存しており、大農園では近代的農業技術と機械化により高い生産性を実現しているのに対し、零細農業の技術の向上は遅れ、そこでの人口増加が貧困の問題の解決を困難にしている。その結果、農村から都市への人口流入が拡大し、それが都市でのスラムの拡大、インフォーマルセクターの拡大となったのである。農村からの都市への人口の流入と都市における雇用機会拡大の制約の2つが都市での貧困を拡大させたと言えることができる。

以上、ブラジルを例にとって検討したが、貧困な農村はアンデス諸国やメキシコの高原地帯、中米、カリブ諸国等多くの国々で見られる。ラテンアメリカにおける貧困と貧富の格差の問題の解決のために

は、何よりもまず、累積債務危機からの脱出と成長の回復により雇用機会を増加させることが必要であり、それに加えて貧困の構造的問題を解決することが必要であると考えられる。

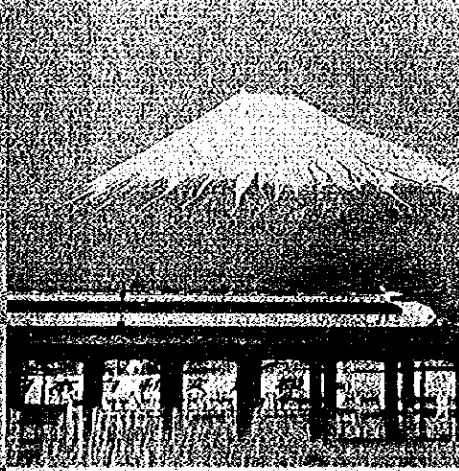
(1991年11月号)



日本を愛する時代

援助が日本を生き返らせた

復興への道程を顧みる



●大来佐武郎（内外政策研究会会長）
（続）

ホームにしゃがむ人々

1945年8月の終戦後、荒廃した日本では何もかもが非常に不足していました。特に食糧の不足は激しく、国電のプラットフォームで電車を待つ人々が、空腹のあまり立ちていられず、しゃがんでいた光景を思い出します。また、各県が自分の県に少しでも多くの米を確保するために、米の生産量を極力低く国に報告するようなことも頻々ありました。言わば、現在の後発開発途上国と同じように、苦しい状況だったのです。

あれから45年を経過して、日本経済は目覚ましいまでの発展を遂げ、現在では世界一の援助大国となったわけですが、その過程、特に終戦直後の10年間においては、海外から受けた様々な援助が非常に大きな役割を果たしたことは間違いありません。そうした援助は、物資や資金から人材育成まで多岐にわたります。ここでは、私の印象に残る援助に触れ、それらの支援が日本の経済発展に与えたインパクト(影響)を考えてみたいと思います。

飢餓と疾病を防ぐ

第1に挙げられるのが、食糧や医療品といった基本的な生活物資です。飢餓や疾病を防ぐために、人道的な立場から贈られたもので、カリオア・エアロ資金による米国政府からのものだけでなく、国際機

岡のUNICEFや民間団体であるCAREなどから、さまざまな援助物資が日本に寄せられました。

例えばUNICEFからの援助だけでも、当時のお金で約65億円相当に達しており、これは全て、世界各国の民間の方々からボランティアに寄せられた資金です。子どもの時に、このUNICEFのミルクの世話になった人は、たくさんいるのではないのでしょうか。私が現在、日本ユニセフ協会の会長を務めているのも、少しでもご恩返しができれば、という気持ちからなのです。

経済再建に向けて

戦後約6年間、日本は連合国の占領下にありました。当初の占領政策は、制裁の意味もあって「飢餓と疾病を防ぐ援助はするが、経済再建のための援助はしない」というものでしたが、その後方針が転換され、再建に向けた支援物資も認められるようになります。

当時、外務省の調査局にいた私は、吉田茂首相がマッカーサー司令官に宛てた書簡の原案を作成したことがあります。「飢餓と疾病を防止するための援助は大変有難いが、石炭や鉄鋼といった物資の再生産に必要な援助もいただきたい。とりあえず、鉄鋼生産に必要な重油を供与してほしい」という内容で、有沢広巳・東大教授が主唱した「傾斜生産方式」を

年(カッコ内は昭和)	水田、稲作復興、NGOからの日本への援助
1945(20)	
1946(21)	物資不足の救済開始
1947(22)	アジア物資の援助開始 (1945)
1948(23)	大連市の復興が20万ドルの物資緊急援助 COAと物資不足の救済開始 (1955)
1949(24)	米の供給の確保に努める 生活困難者救済のための物資供給が開始され、米は20 万ドルの緊急物資として供給 (1952)
1950(25)	日本への物資供給に開始 (日本の米、日本の米は20万ドルの物資)
1951(26)	
1952(27)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1953(28)	WHOによる米の供給のための国際食糧会議に出席 中国、日本、米の供給の確保に努める (1957)
1954(29)	
1955(30)	(日本の米は20万ドルの物資)
1956(31)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1957(32)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1958(33)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1959(34)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1960(35)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1961(36)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1962(37)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める
1963(38)	
1964(39)	
1965(40)	
1966(41)	米の供給の確保に努める 米の供給の確保に努める

目指すものでした。この要望は、3カ月後に実現し、これが傾斜生産の1つの大きな契機となったのです。

また、資金の面での援助も、非常に重要です。愛知用水や東海道新幹線の建設は有名ですが、それ以外にもダムや製鉄所の建設用に、多額の資金を世界銀行から融資してもらうことができました。これらは、経済発展の基礎となるインフラ整備の実現に資するものでした。世界銀行からの借入金をやっと全額返済し終えたのは、昨年、1990年のことです。

さまざまな人材育成

こうした物資や資金の援助と同様に、いやそれ以上に重要な役割を果たしたのが、人材の育成に対する援助です。これも、米国を中心とする連合国からの専門家の来日による指導、あるいは日本人の海外視察や留学など、さまざまな形で行われました。資金も、米国政府のものから、ロックフェラー、フォードといった民間財団のものまで、いろいろなレベルから提供されました。

例えば、ガリオア資金による米国留学は、のちにフルブライト留学制度に受け継がれ、数千人におよぶ日本の若者の教育に貢献、多くの優秀な人材を輩出しています。また、日本生産性本部が米国産業界の支援で毎年派遣した「生産性チーム」も、米国の優れた技術と経営思想を学んで帰国し、日本の産業発展に大きく寄与しました。

米国民の好意

視察や留学を経験した方々が共通して口にするのは、米国の国民が皆、とても好意的に受け入れてくれ、素晴らしい環境の中で視察・勉強ができたということ。この辺りからも、米国の懐の深さというか、太っ腹な国民性がうかがえます。

私自身、1958年にロックフェラー財団の資金提供で世界をひと回りして各国の状況を見たことがあります。レポート不要、夫人同伴可という破格の条件で、世界20カ国を5カ月間かけて視察して回りました。費用は、当時のお金で約1万ドル。でも、この時の見聞は、1960年の「所得倍増計画」立案に、いろいろな形で織り込まれることとなります。

これは余談ですが、当時、私は経済企画庁の総合計画局長の職にあり、現役の局長が5カ月間も外遊するなどということは、空前にして絶後のことでしょう。それを許した当時の河野一郎長官(後に三木武夫長官に交代)も、ロックフェラー財団に劣らず太っ腹だったということでしょう(笑)。

アジア諸国からのエール

こうした物的・人的援助と共に、精神的支援とても呼ぶべきものが、私の印象に強く残っています。1948年、日本の戦犯を裁きたいいわゆる東京裁判で、インド人のバル判事がただ1人、戦勝国が敗戦国を

裁くことの不合理を指摘し「東京裁判は法と正義の衣をまとった復讐劇に終始すべきでない」と主張したことは、日本国民に大きな感銘を与えました。

日本の「独立」を認めた1951年のサンフランシスコ講和条約について、セイロン（現スリランカ）のジャヤワルダナ外相が、好意的な発言をしてくれたことも、よく記憶しています。

また、私は1952年4月にタイの首都バンコクにある国連のECAFE（現ESCAP）の事務局勤務となったのですが、当時の局長だったインド人の経済学者は非常に好意的で、「日本はアジアにとって大切な国。早く立ち直って、正式な加盟国になってほしい」と言われたことが、大変に印象的でした。

これらは、ほんの一例ですが、アジアの国々の人々が日本のことを心配し、その復興を願う気持ちが伝わってくる場面は多く、私たちにとっても大きな励みになりました。

人道主義と戦略援助

米国を中心とした対日援助は、どういう理念から行われたのでしょうか。根底に人道主義、あるいは弱者に対する同情とも呼ぶべきヒューマニズムがあったことは間違いありません。ただ、これに加えて、東西関係の緊張といった国際情勢の変化から極東における「日本」の重要性が高まり、それによって援助が強化されたという、戦略援助的な側面があ

ったことも事実です。

もう一つ、日本の経済復興にとっての順風となったのは、戦前への反省から世界の経済ブロック化を防ぎ、自由貿易体制を確立しようという潮流です。1950年当時、世界のG N Pの約50%を占めていた米国がそのリーダーとなり、対日政策にもその思想が反映されることになったわけです。

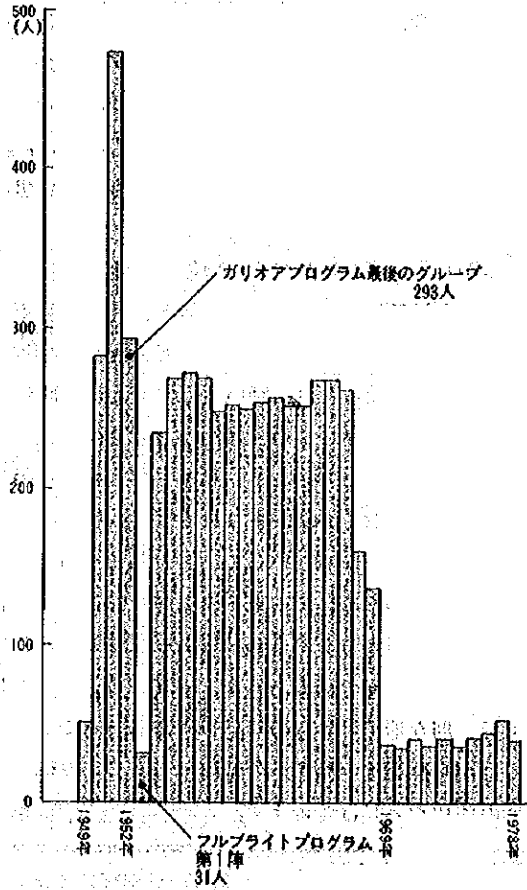
しかし、いずれにしても、戦後に日本が受けたさまざまな援助は、日本経済の復興と、それに続く高度成長にとって、測り知れないほど大きなインパクトをもたらしたことは、疑いありません。援助がなければ現在の日本はない、援助が日本を生き返らせたと言ってもいいでしょう。私たちは、常にそのことを銘記しておく必要があります。

もっとも、だからといって、「お世話になった米国への恩返しのために、中東へ自衛隊を派遣しよう」などという考え方をする必要はありません。これは全く異質な次元の話であって、平和国家・日本としては、別な形で世界への貢献を考えるべきでしょう。それが、開発途上諸国への国際協力、つまり開発援助の強化だと私は考えます。

日本の使命とは

では、日本が今後進めていくべき援助とは、どのようなものでしょう。日本が援助を受けた当時、そ

■ガリオア/フルブライト留学の軌跡



(日本教育委員会資料より)

▶ガリオア、フルブライト両プログラムの下で、昨年までに8184人の日本人留学生が渡米し、大学院生や研究生として学術活動に携った。彼らは帰国後、それぞれの分野で活躍している。

の荒廃した状況は現在の途上国以下でしたが、そこには江戸、明治期からの蓄積が、目に見えないながら存在していたことも確かです。それは援助を吸収する基盤と呼んでもいいでしょう。したがって、その基盤自体が未成熟な国に対して、日本が受けたのと全く同じ援助をすることはできません。それぞれの国の実情に応じた援助の進め方があるはずで

この点で私は、これまで日本が進めてきた援助がもう少し正当に評価されてもいいのではないかと考えます。よく「日本の援助には哲学がない」とか、「商業主義的だ」といった批判がありますが、インフラ整備を重視して相手国の自助努力を促し、被援助国からの「卒業」を目指す日本の援助方式は、とくにアジア地域で目覚ましい成果を挙げています。

もちろん、BHN（人間生活の基本的なニーズ）の充足にも力を入れる必要があるのは当然ですが、それだけでは途上国は援助依存症に陥り、いつまでたっても自立できません。昨今、米国などでも「日本の援助を見直そう」という機運が、出ています。先進諸国も援助疲れで、結果として自立を助ける援助。に目を向けて来たとも言えます。

ともあれ日本は、被援助国から卒業した先進国として、また援助依存症も援助疲れも共に経験していない唯一の国として、今後ますます重大な使命を担っていかなければならないのです。 <談>

国際協力年表

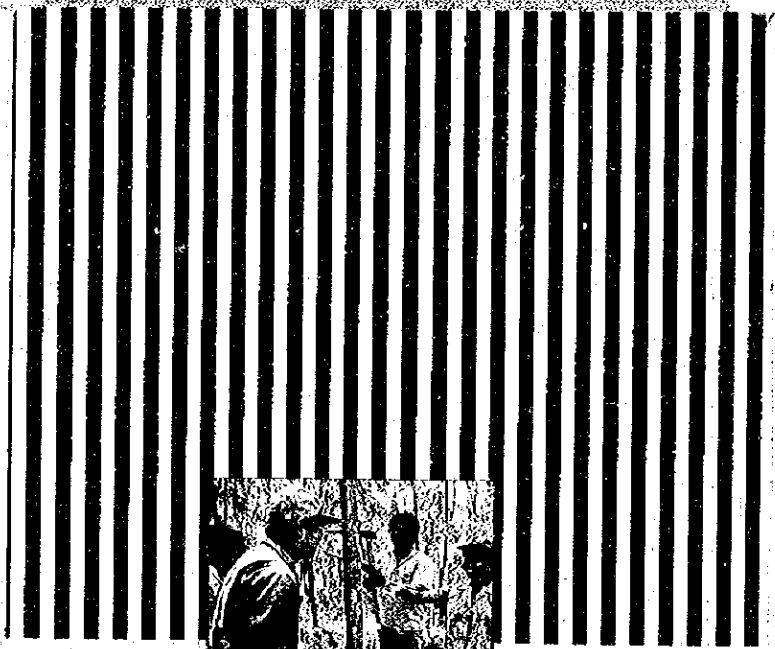
平成4年4月

●発行

国際協力事業団

〒163 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル 私書箱216号

電話 03(3346)5311～5314(受付台)



J I C A

